

第5回全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞公開選考会



誌上で同人誌評を執筆している東谷貞夫氏（同人誌「風の森」主宰）の六人です。予定していた中部ペンクラブ会長三田村博史特別選考委員は事情により欠席されました。

今回は特に関東同人雑誌交流会からの特別推薦枠を設け、従来六篇だった候補作を七篇として、優秀作品が多彩に揃いました。「崖くずれ」納富泰子（「胡壺・KOKO」9号）、「顔」井本元義（「胡壺・KOKO」9号）、「踏切の音」朝岡明美（「文芸中部」86号）、「空の通信」北川朱実（「文芸中部」86号）、「幻燈一夜」寺本親平（「彩雲」3号）、「風景―悪虫―」山口馨（渤海59号）、「親子で鬱病」平井文子（「ままた」31号）の七篇です。今回は、同じ同人誌から複数の候補が選出され、しかもそれが二誌という、前例のない形となり、この点からも注目されました。

開始時間の午後一時となったところで、いよいよ「まほろば賞」公開選考会開会です。まず挨拶は前全国同人雑

誌振興会会長森啓夫氏（「文学街」主宰）が昨年末で辞任されたため、新たに会長代行となった五十嵐勉氏です。会長代行は、出版メディアの衰退の危機に触れつつ「同人雑誌の創造行為がいっそう重要になり、近年は特に同人雑誌作家の作品が大勢の人に開かれていく趨勢になっている。最近の芥川賞作品はいとは思えない。芥川賞作品よりも優れた作品が同人雑誌にはたくさん眠っている。そうした作品がこういう場や、あるいは他の場で積極的に取り上げられることで、日本の文芸そのものが良い方向に向かうことを期待している」と力強く語りました。

選考討議に入る前に、基本的なルールが会場に説明されます。討議と投票は二部に分かれ、第一次討議と第二次討議に分けて行なわれます。第一次では七つの全作品についてそれぞれ会場からも参加して討議し、その後に黄色の投票用紙による第一次投票を行います。その結果によって、上位三作品を選びます。集計と休憩の後の第二次討議は、残った三作品に集中して会場とともに討議し、そのあとの赤い投票用紙に

事前投票

崖くずれ	顔	踏切の音	空の通信	幻燈一夜	風景―悪虫―	親子で鬱病
14.5	0	1	7	0	0	1.5



東谷貞夫特別選考委員

●**第一次討議**
一時二五分、いよいよ作品討議に入りました。司会は「文芸思潮」編集長の五十嵐勉氏で特別選考委員を兼ねています。
まず最初に福岡の同人雑誌「胡壺・KOKO」9号掲載の「崖くずれ」について、討議されました。
最初に東谷選考委員が「この作品は七篇の中で『文学の女神』の微笑みにあずかっていて、文学の基本的なものが全部ここに含まれている。精神的な憔悴のプロセスが丁寧に書き

よる第二次決戦投票を行ない、最終的に「まほろば賞」を選出決定します。上位一位と二位があまりに僅差の場合、さらに決選投票を行なう場合もあります。
文書選考委員の郵送による事前投票結果は、「崖くずれ」14.5点、「顔」0点、「踏切の音」1点、「空の通信」7点、「幻燈一夜」0点、「風景―悪虫―」0点、「親子で鬱病」1.5点でした。まずこの結果が「文芸思潮」の里見風樹選考会アシスタントによって発表されます。

●**第五回目を迎えた「まほろば賞」**
二〇一一年九月一日、暑さの残る晴天のこの日、第五回「まほろば賞」公開選考会は、東京世田谷区の玉川区民会館で開催されました。全国の同人雑誌掲載小説作品の中から最優秀作を選ぶ「まほろば賞」公開選考会は、年ごとに認知度を上げ、今回節目の第五回目を迎えて、今年はどうな作品が選ばれるのか全国からさらに注目が集まるなかでの選考会となりました。

昨年徳島県三好市で行なわれたことに続き、今年も当初福島県いわき市での開催が予定されていましたが、三月一日東日本大震災の影響で、急遽東京に会場を変更しての開催となりました。
「まほろば賞」は全国の同人雑誌で発表された小説の中から優秀作を選びそれを「文芸思潮」に転載、さらにその中から公開選考会で最優秀作を選出するものです。候補作を読んだ人なら誰でも一般選考委員として選考会に参加でき、当日参加できない人のために事前投票制度も設けられています。

選考は得点制で、特別選考委員は持ち点五〇点、一般選考委員は一〇点、当日参加できない文書選考委員による事前投票は二点となっています（来年から三点に変更）。この持ち点の中で評価する作品に点数を振り分けます。今年特別選考委員を務めるのは、作家集団「塊」の大高雅博氏（「新像」新人長編小説受賞作家）、八覚正大氏（「新潮」新人賞受賞作家）、小沢美智恵氏（蓮如賞受賞作家）、都築隆広氏（「文学界」新人賞受賞作家）、五十嵐勉氏（「群像」新人長編小説受賞作家）、「文芸思潮」編集長の五人に加えて、「文芸思潮」

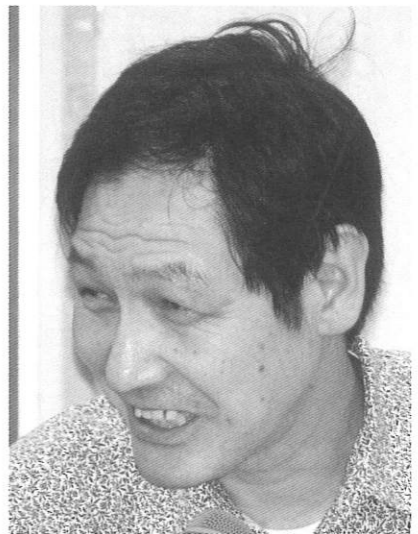


小沢美智恵特別選考委員

かれています。どこに出しても充分通用する作品だと感じていた」と強く推薦しました。

続いての小沢選考委員は「夫を許せない気持ちや裏切られた気持ちがとても納得できるような書かれていて、すべてに納得がいくので、ある意味で完璧に近い作品なんじゃないかと思う」と高く評価する一方、「夢に出てくるのは山だが、主人公の心は淵や溝のような救いのない、ある種の地獄ではないかという気がした。夫の失踪の理由と残された妻の思いも限定されていて、納得できる一方で普遍に通じるところが弱くなってしまったのではないか」と指摘しました。

大高選考委員は、「今回はいい作品、優れた作品が集まっている。年々レベル上がっている。どの作品が『まほろば賞』になってもふさわしいと思う」と各候補作を高く評価しつつも、「崖くずれ」はさらにもっと良い作品にできる。人により意見は分かれるかもしれないが、失踪した夫がどうなったかを書いていないのはどうかと思う。また、他の人が書いた詩をモチーフにするより、詩の本文を途中で出して、もっと違うものを出した

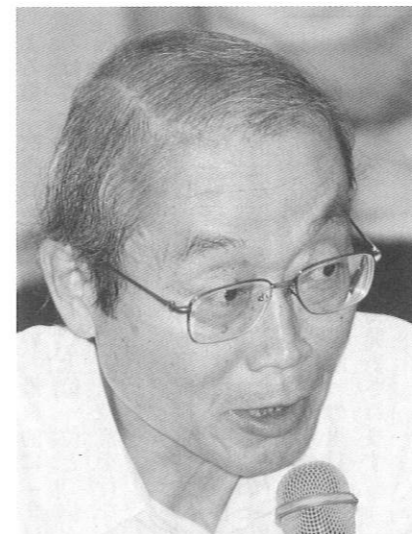


大高雅博特別選考委員

方がよかったのではないかと辛口の評価をしました。

続いて都築選考委員が「リアルな前半と幻想的な後半の対比もよく、主人公の夫への怒りや、ほめていく過程のリズムがとてもおもしろく読めた。もっとも優れている点は『アザミの女』『風の通る林の中の静かな家』といったディテールが、読者に伝わりやすいところ。ただ、マイナス点が多くて、『崖くずれ』の詩を本文中に引用しないのは、小説として成立するのか疑問がある。また、起承転結の起承を考えたら結末はぼやけと終わらせることができるという、悪い意味での純文学の典型例のような終わり方をしてしまっている。ただし純文学作家としてみたら、評価せざるをえない上手い作品だと思う」と分析しました。

ここで五十嵐選考委員は、「私も、詩を引用して他の人の創作やムードに寄り掛かっている作品は基本的に評価できない。そこにこの作品の弱さがある」「崖くずれ」の詩を出さずにこのテーマを表現することは可能。それができていたらもっと際立った作品になっただろう。もう一つ、水



織戸政義選考委員

る。随所におもしろいところがあり、作者の特色や食や言葉があつて、こういう形で出したというのわかるけれども、それが読者に読まれていくかというところ、ちょっと難しいかと思う」と述べた。

続く大高選考委員は「崖くずれ」は詩、『顔』はユイスマンスの『さかしま』を読んでいないと面白みが半減するのかもしれない」と「崖くずれ」に戻って付け足す発言をし、この作品に加えモチーフを読んでいない読者にもわかる作品にしなければいけないと強調しました。小沢選考委員からも「私も皆さんと同じ感想を持った。『最愛の妻を亡くした時』という文章自体がもう文学的ではないし、最後に浮かんでくる顔が家政婦の顔というのは、そこは奥さんの顔が浮かんで来いよと思う（笑）。作者と読者の波長があうかというの大きいと思うが、やはりちぐはぐな感じがした」と話し、批判的なコメントが続きました。

そこで五十嵐選考委員が「文章がいいと思う。作者は詩を書いている人で、その感性が散りばめられている。パリの描写も優れていて惹かれる。夕暮れの描写は素晴らしい。普通のリアリズムとして読んでいくと、このおもしろさは味わえない。死と隣り合わせの老残の人生と、最後に燃え上がるエロティシズムがうまく溶け合って、花を咲かせている」と優れた点を挙げました。

会場の中野氏からは「最愛の妻を亡くした時」という言葉が批判されているが、この作者は世間的な美意識を目指していると思うので、こういう紋切り型の表現もあってよいと思う」と肯定的な見方が出されました。さらに、同人誌

のイメージが何を象徴しているのかよくわからない。たびたび出てくるそのイメージが何と結びつか曖昧な点は完成されていない」と厳しく批判しつつも、「夫の浮気から生活が崩れていく様は非常によくできている」と評価しました。

ここで会場からの発言が求められました。最初に候補作「風景」の作者である山口馨氏が、「納富さんは『テーマに鋭く切り込み、読後に尾を引く作品が書きたい』と言っていたが、それはこの作品において充分発揮されている」と、以前から注目し上手い書き手と評価していたという納富氏の作品を援護しました。第二回銀華文学賞当選作家の中野陸夫氏は「これは救いがない結末で、絶望して終わりになっていると思う。表現力に力強いものがあるが、作品のテーマの力点が曖昧で疑問が残る」というマイナスの意見でした。故河林満氏に師事していた織戸政義氏は「モチーフになった詩を知らないため、作中での意味合いが飲み込めなかった。しかし、夢と実際の場面の融合性が破綻なく書かれており、純文学としての完成度

「風恋洞」の小野光子氏からも「自分も牡丹が好きで庭に植えているが、分析しないでひとつひとつを読めば、よい作品ではないかと思う」と評価する意見が出ました。一方で、文芸思潮エッセイ賞優秀賞の山田まさ子氏から「家政婦が気の毒で、牡丹よりそちらが気になってしまう」という意見も出ました。

三作目は朝岡明美氏の「踏切の音」です。東谷選考委員からは「会話の微妙なずれ違がおもしろい。踏切の音の場所がクリーニング屋の二階だとすぐわかってしまうところが問題で、このあたりじゃないかとぼやけさせた方がおもしろかったのではないかと思う」と評しました。大高選考委員は「優れた作品だが、一回読んだだけでは家族関係がわかりにくいところがある」と指摘、八覚選考委員は「地味な人生だと思っていた母親に、輝くロマンスがあったんだという、死んだ母親への気持ちが出てくる完成度の高い小説。ただし、高野の存在は都合がよすぎる、つくられたものだと思う」と述べました。

意見を求められた会場の同人誌「北斗」の尾関忠雄氏は「少し書き過ぎているところがあるの、整理するともっとよい作品になるかと思う。母親の出生をモチーフにするのは安易な手法に感じるが、母の人生は誇り高い生き方だったという作品の説得性が、かなり生きてくるかと思う。非常によい作品である」と評価しました。

「母親も書かれているが、高野を書き過ぎでバランスが悪いところがある」という織戸氏の言葉をを受けて、五十嵐選考委員は「高野の存在が主人公の救いになっているが、全体の緊張感を散漫にし

は高い」と述べました。

二番目は井本元義氏の「顔」です。都築選考委員は「まほろば賞」としては作品が短いと言及しつつ、「私は」という書き出しが非常に多いが、読者が知りたいのは「私が誰と何をしたか」というところなので、他人へ興味をもつとあつた方がいいと思いつつ読んでみた。家政婦との会話もなく、物語の概要を読んでいるような気がした。よかった点は「食には眼がなかった」というところで、料理のセンチメンスが本当にうまそうに書かれていて、こういう小エピソードは非常によく書けている」と評しました。

八覚選考委員は「文章は知的な感じがあつていいが、一行目で『最愛の妻を亡くした時』とあつて、牡丹と奥さんはどういう関係なのかというところが、まず引つ掛かった。それを置いても、牡丹を描くという行為をすることは、行為は思念と違って現実との関わりになってくる。牡丹の精を描くというプロセスの中で生まれてくる言葉がある、そういうところが残念ながら欠け落ちてい



八覚正大特別選考委員



尾関忠雄選考委員

ている感じがする。高野がいることによって日常性は確保されるし安心もできるが、安心しすぎるところがある。そこをもう少し収斂させていく必要があるのではないかと思う」と評しました。

そこで会場の中野氏が「この小説は女性の男性に対する居心地の悪さが主題だと思ふ。主人公と高野との関係も決していいものではなく、母親も一人の男性を愛してその後の二人にはほとんど愛情を持たなかったという、ひどい話だと思つている」と述べましたが、大高選考委員は「不幸な母親の人生にもちよつとだけロマンスがあったことと、最後に主人公が高野に温泉に誘われる。おそらく行かないだろうけれども、そうした細やかな救いがあると思ふ。高野がいなければ非常に暗い話になったと思うので、こういうふうには書かざるを得なかったのかなと思ふ」と反論しました。

「高野」の存在について意見が続くなか、都築選考委員が「高野」を弁護したいとマイクを取り、「介護小説として読むと、必要ない高野の存在がどうしてもつくりものめいたキャラクターになる。し

かし、高野と主人公の関係について、こうした男女関係に年をとってなるというのは、若い世代からすると変なりアリティを感じた。この恋愛の方を書いて、介護の方を減らして凝縮すれば、もつとバランスのいい小説になったと思ふ」と評しました。

「私人」の長野統氏はカルチャーセンター所属の同人誌として、「作者のように文化センターやカルチャーセンターで一生懸命書いていると、こういう小説になる。似た作品を沢山読んだが、ある意味で完成してしまつていて、作者も読者もそこで止まつてしまふ。そこを突き抜ける契機がつかめないで、そのヒントを特別選考委員にうかがいたい」と経験に即した意見を述べました。

五十嵐選考委員からは「高野とのやり取りはおもしろいし、ほつとするが、そこに頼つてしまつたら、突き抜けるものは出てこない。母親の女性として燃えた貴重な時間を、残された娘が辿つて、ひとつの輝きを提示するのが文学の役割だと



長野統選考委員

が成り立たないかもしれないけれども、タエが生きていて周りの人は苦しいという方が、小説としてはいい」と評しました。

東谷選考委員は「この小説は文章が上手く、流れもよい。精薄は実際にはこんなものじゃないとか問題は出てくると思ふけれど、そうした欠点を超える筆の力がある」と強く推薦しました。

会場の中野氏はタイトルについて「タエが空から通信を送ってくるというような意味なのか、最初からタエは空にいるという前提で書いているのか、空が作者にとつて何を意味しているかが重要になってくると思ふ。文章にはところどころ気になるところがあつて、それをよしとするか未熟と見るかで意見がわかれると思ふ」と述べました。

次は寺本親平氏の「幻燈一夜」です。大高選考委員は「最後まで文体を貫いている点が非常に優れていると思ふ。作中に出てくる卯辰山からは金沢市内と日本海が見えるが、自分のように地元を知っている人間にはイメージできておもしろく読める。優れた作品だと思ふ」と評しました。

東谷選考委員からは「もつと素直に漢字を使つてほしい、読み疲れてしまふ。観念性というか世間観が充分に出ていない気がする。底が深いように見えて、意外に浅いものかもしれない。そういうところが引つかかる」という否定的な意見が出ました。

ここで五十嵐選考委員から激賞の言葉が述べられました。「相当な力がないとこの文体はつくれない。他の作品と決定的に違うのは、この事実は幻だとして、その中の夢のドラマとして書いてい

思ふ。高野を息抜きにしないで、その一年が母親の人生においてどういう意味を持っていたかを突き詰めていかないと死を超えるものは出てこない」と、書き手としての根本的なあり方が語られました。

四番目に北川朱実氏の「空の通信」です。

都築選考委員は「純文学としては『崖ぐずれ』を評価しているが、読者としてこの作品をお勧めしたい。この作品は三幕構成として読むことができ、映画を見るようにスムーズに読めるのが魅力のひとつ。もうひとつの魅力は、日常の細かい動きが書かれているので、タエの死をちゃんと悲しく感じられるということ。また、障害のある娘ではなくて姪という、主人公と少し距離が置かれている点絶妙だと思ふ。そのおかげで、語り手と読者がより近い距離で悲しみを感じる事ができる。最後にろくでもない男が出てくるのは、恋愛が強引だという意見が出るだろうが、そういう矛盾も含めて読み物としてのおもしろさがある作品という印象を受けた」と強く推薦しました。

大高選考委員は「タエの母親の遺体はバスボートを持った状態で発見されているが、これは書き過ぎかと思ふ。そうなるとう計画的な失踪ということになるが、どちらかと言えば発作的に家を出たように感じる。気になる点はあるが、ディテールはとても良い」と述べました。

小沢選考委員は「タエという人がちぐはぐな感じがする。料理本にふりがなをふらないと読めないというエピソードもあるのに、子ども図書館の本で知識を仕入れたというのは、べつべつの人のように思える。そういうところから、つくりもの

る。その視点が普通の小説とは違って、人生を切り捨ててそこから見ているような文章だと思ふ。それがまずすごい。ひとつの再生のドラマを持ってきたり、能というふうなものを借りながら架空の花として咲かせきつていて、その技量は一流だと思ふ。五〇メートルの高さの銭湯から現代文明を俯瞰して、文明への痛烈な批判にもなっている。なおかつ古典的なものを下敷きにしながら、超時代的なものを構築している。現代の病んだ文明を象徴する娘の傷や瘡、それを食べに寄つて来る魚の群れ、そういったものにむしろ再生の希望を託しているようなところが感じられて、文明を皮肉っぽく見ながら再生をここに持つてくるという、非常に壮大なスケールを持つていて。これはなみなみならぬ書き手である」

会場の山口氏は「虚実が入り混じつた夢幻譚の体裁をとつているが、改行がなくシニールなこれだけの文章を書き込んでいく力はあまり他の作家にはないと思ふ。寺本氏の作品は、ある意味で古い書き方をし、古い文言の使い方をし、古い世界



五十嵐勉特別選考委員



「親子で鬱病」の作者・平井文子氏

章がさらさら流れていて、それによりかかって小説を書いているような印象があったが、根本的な物語のつくり方が、かなりの力量でないとこれだけ変化のあるものは書けない」と過去の候補作と並べての筆力を高く評価した。

最後は「親子で鬱病」です。

最初に東谷選考委員が「他の候補作は『こういうものを書く』という形をつくっているが、この作品は形がない。その点でスタートから遅れているかと思う。意識的に『書く』のではなく『つく』る」という気持ちがあれば、もっとまとまったものになったのではないか。文章に品があつて光っているところがあるので、その点が欠けているのが惜しい」と指摘しました。

八選考委員は「ここまで書いたことに、驚きとともにある種の感銘を受けた。文学的な力量などは、優秀作まで上がってきたのだから、どの候補作もそれなりのものとしてある。それを抜けるものとしてのインパクトを感じるのには、やはりこ



小野光子選考委員

の作品。息子に彼女ができたたりするのがリアリティとしてどうかというのがあるが、現実にもこういうケースはある。文学的にはこれから学んでいく必要があるかもしれないし、次の一作からはトーンが落ちてしまうかもしれない。しかし、これを一に推したい」と力説しました。

会場の織戸氏は「社会的な問題を扱っているのでも、おもしろい点はある。しかし、読み終えた後の読後感が非常に重苦しい。親子の中でかすかな救いのようなものが出てくればよかつたかと思う。この作品も含めて、今回の候補作はどれもタイトルがピンとこない。河林先生は『タイトルは予感、本文は実感だ』と言ったが、この作品はタイトルがそのまま実感なので、もう少し工夫をした方がよい」と述べました。

小野氏は「関東同人雑誌交流会で、自分はこの作品を強く推したが、やはり推してよかつたと思つた。身体や心から出る言葉をつないでもらいた

いというのが、私の小説観。時代が移っても変わらぬ。説明的になつたり普通の描写がおろそかになつたりするので、そこが気になつた。毎年『風景』というタイトルの下にサブタイトルがついているが、短編として普通の題名をつけた方がいいのではないかと思つた」と指摘しました。

会場の長野氏は「読者への広がりがあるテーマになつていて、昨年発表の作品だが、3・11以降の世界にも眼が行つていられると思われような作品になつていて。文章も非常に読みやすいテーマにも説得力がある。今までの『風景』の連作の中では一番よいのではないか。最後に『悪いって、強いつてことでもあるのよ』と人間を描いている面もあつてよいと思う」と推しました。小野氏も「姉も主人公も生きていて、人間像が捉えられている」と讃えました。

五十嵐選考委員からは「三つの『風景』を並べて見たときに、それぞれ異なつていてパターン化してない。改めて技量を感じた。最初の頃は文

を書いているようである、新しい小説世界を構築しているのではないかと思つている」と述べた。中野氏からは「これは完全に狂歌の世界で、狂歌の中でも幻想的な作品を徹底的に勉強しているという気がした。必死に新しいものを生み出そうとしている」との見方が示されました。読みにくいながらも新しいものを読者に感じさせるという評価がなされたようです。

六番目は山口馨氏の「風景―悪虫―」です。山口氏はすでに過去二回「まほろば賞」候補になつていますが、山口氏はそれにもっとも近い書き手ということになります。

小沢選考委員は「人の中の得体の知れないものをちゃんと描けていて、自分の一押しである。『崖くずれ』で夫が出ていってしまうのは限定的な理由だが、この作品は全ての人に共通した『悪虫』を捉えている。その悪虫を理解する姉と批判する妹でバランスもとつているし、実際に出かけた義兄と行かなかつた夫の対比もされていて、私小説っぽく書いていながら、取つてつけたようではなく上手く処理されていて、普遍的な問題を捉えた見事な作品であると思う」とその技巧を讃えました。

東谷選考委員は「これは本当に素晴らしい作品で、義兄が登場しないことも楽しみなところ。姉も今後化けそうな気がする。これの続きが出てくるんじゃないかと期待している」とさらなる続編を希望しました。



中野睦夫選考委員

都築選考委員は「男には野垂れ死にたいという願望がある程度の年齢になると出てくるよう夫の秘密と、義兄の失踪が重なるようなところが効果的でおもしろい。あと一点おもしろかつたのが、夫と主人公が教師と教え子で、それに対してかつての同級生たちがミーハーめいた好奇心を抱いていて、同窓会ではやし立てる彼らの気持ちがとてもよくわかつた。ただはやし立てるだけじゃなくて、そこから、夫が抱いていた願望が主人公の耳に入るといのが、テクニク的にすごいと思つた。マイナス点は、意識してやつているのかもしれないが、義兄と夫が読んでいて識別しなかつたことと、後半が姉と主人公の会話中心にな



都築隆広特別選考委員

ることのない人間の生を書くからこそ創作は続いているのであつて、古い小説も新しい小説もすべてが勉強になるのだと思う。作者から出たこの作品の言葉は、体裁をつくらわず、そのまま書いているリアリズムで、自分はとても良い小説だと思つた。こういう作品を評価して、世の中に出してもらいたい」と高く評価しましたが、尾関氏は「リアルではあるが、どこか感覚的になり過ぎてい」と否定的でした。

小沢選考委員は「実情がよく書けていて、似た状況の人の参考になるいい作品だと思う。同じような状況で、育て方が悪かつたんじゃないかと自分を責めている親は多いが、育て方の問題ではなかつたということが主人公の救いになつていて。しかし、小説で書かず、ノンフィクションとして書いた方が、インパクトがあつてよかつたのではないか。あえて小説で書く必要がなかつた作品という意味で、この賞の中では買わない」と評価に対する見解を述べました。

都築選考委員は「どうしても鬱病の小説は読者が構えてしまう。なぜかという、鬱病の小説は主人公の一人称で書いた場合、たとえはひどいことを言われたという、この主観は本当に正しいのか。残酷な話ではあるけれども、説得力を持つて伝わるんだらうか、読者が身構えてしまう問題があると思う。この作品は逆に、小説として難しいことを考えずに気軽に読んでよいと思う。本当にどうしようもない息子と鬱病の自分、でも生きていくしかないというドラマ、おもしろい小説として読んでいいのではないか」と異なる読み方も可能であることに言及しました。

大高選考委員は「葉が出始めるから鬱病になる、というような話もある。その辺まで進んだところから鬱病の小説を書けた方がいいんじゃないかと。今、苦しんでいる人にはそんな話をしてもらっていいから、小説として成り立たないとは思ってほしい」と、小説としてはそういう方向もあると思う」とアイデアを出しました。

両氏の発言を受けて、会場の山田氏は鬱病を経験した立場から「病気の人のとってみれば、幻聴だと受け取られる不安もあるが、それを勇気を出して書いたことがすごいと思う。鬱病の取り扱いは、息子がどんどん変わっているというのは本場で、息子が寝込んでいっているというのが、薬の副作用によるところが大きいのではないかと心配にもなる。作中に出てくる薬が製造中止になっていたり、鬱病についての説明が必要以上に詳しいところは気になった。しかし先日、鬱病だということが本人に知られて「傷」についてはいけないということで、薬をジュースに混ぜて子どもに飲ませていると話す親がいて愕然とした。そういう人もいる一方で、この作品が書かれたというのはすごいこと」と、病気をありのままに書いた勇敢さを讃えました。

●第二次討議

全候補作の批評が一通り行なわれたところで、二時五〇分、第一次投票となりました。一五分の休憩で、ほっと一息。この間に集計係の手で集計がなされます。三時五分、皆席に戻ったことを確かめて、里見アシスタントの高らかな声で点数が発表されます。

第一次投票の結果——「崖くずれ」85.5点、



早川ゆい選考委員

まく表現されている。気になったのは、一七二ページの「大切なことを忘れてしまっている」というのが、何を忘れたのか読み切れなかったこと。しかし、とても優れた書き手だと思った」ということで、参加者からは筆力に対して、おおむね高い評価を得られていることがうかがえました。

続いて討議は「幻燈一夜」に移ります。指名された都築選考委員は「もっと読者の方に歩み寄ってもいいんじゃないかという印象がある。今の文芸誌は読者に歩み寄り過ぎていて、読みやすく表面的なおもしろさしかない作品が多いが、その対極を行き過ぎていて」と辛口の評価を述べました。

シュールリアリズムを書く尾関氏からは「文芸としては似ている分野を自分も書いているが、作者のイメージが豊富に出ていて、幻想的な世界を扱っているということ、作品の資質的な面では優れている。同人雑誌の作品の傾向としては異色であると思う。これを評価して賞に結び付けば、

「顔」3点、「踏切の音」16点、「空の通信」71点、「幻燈一夜」86点、「風景—悪虫—」101点、「親子で鬱病」61.5点。これによって上位三作品は「崖くずれ」「幻燈一夜」「風景—悪虫—」となりました。「空の通信」が一次で落ちてしまったことは予想外でした。残った三作に対して、第二次討議で、いよいよ最後の激論が交わされます。

三時一〇分、討議が再開されました。まず「崖くずれ」に対し、否定的な評価をした八覚選考委員に意見が求められました。「文章や詩的な表現はよい。しかし、やはり詩人の高野喜久雄、イギリスの脚本家の一節などが出てくると、どうしてもそれに依っているんだ」という感じが否めない。部下が死んだという社会的な過労死の問題になるのかと思えばそうではなく、不倫の話になる。不倫の話から、主人公に認知症が入ってきてその話になる。夫が過労死した女は恨んでいるはずだと書いていなければならない、その方向にも行かない。全体的な統合力がいいのかと思う」と批判しました。

第一次投票

	崖くずれ	顔	踏切の音	空の通信	幻燈一夜	風景—悪虫—	親子で鬱病
事前投票	14.5	0	1	7	0	0	1.5
一次投票	71	3	15	64	86	101	60
合計	85.5	3	16	71	86	101	61.5

小沢選考委員は「悪くない作品だとは思っている。実際に『崖くずれ』

同人雑誌の世界が広がっていくのではないかと肯定的な意見。

八覚選考委員は「空中にある湯船がどういう意味を持つのか、現代的な面としてどこか繋がってほしいというのがひとつ。後半になると気持ち悪い面が出て来て、これは『古事記』『日本書紀』に出てくるイザナミヤヒルコといった原点のようなものに結びつけたのかと思うと、それを能くするようなものに吸収してしまう。この文体を使わなければならないかというところに戻ると、疑念が湧いてきてあまり評価できなくなってくる」と批判しました。

会場の織戸氏からも「改行のないようなものではなく、それなりに読みやすい工夫をやはり加えるべきだ」、長野氏も「この文体でよいのか。場の雰囲気によって、意外な作品が『まほろば賞』になってしまいう傾向がある気がする」と否定的な見方が続きました。

一方、山口氏は「この作品は取っつきにくくても気にせざるを得ないものがある。読者の方から俺の世界にやってこいというぐらいの思いを持って、この作品を書いているのだと思う。タフな書き手の登場だと、受け止めることができるのではないか」と擁護しました。

五十嵐選考委員は「作品の随所にある、再生を託した表現は、言葉でしかできないもので、しっかり評価すべき。文明そのものを根本的に批判するという立場から、ここまで書ききっている人はそうはいない。時代に応えようとする確かな立場が感じられる」と強く推薦しました。最後に一次投票で最高点を獲得した「風景—悪



の詩を読んでみると、かえって違うようなところがあるので、作中に出さなくてよかったのかもしれない。隅々まで神経が行き届いていて読ませるが、よく読むと気になるところも出てくる」とおおむね肯定的な意見を述べました。

会場の山口氏からは再度、「崖くずれ」を応援する意見が述べられます。「納富さんの作品を読むと『受苦』というものが底流としてあるようだ。自分にくれたメールを読ませてもらうと『汚いもの、おぞましいもの、醜いもの、怖いもの、夢のようなもの、美しいものなど、それらを作者の独特の柄杓で掬いあげていくのが小説ではなからうか。自分はいい柄杓がほしい』と締めつけておられました。私もいい柄杓がほしいなと同感共感、それができる納富さんを尊敬できると思っっている」と、愛読者としての言葉でした。

織戸氏と同じく河林氏に師事していた早川ゆい氏からも「描写力のある人ですばらしいと思った。夢と現実の境界が曖昧になっていくところも、う虫—」です。

八覚選考委員は「山口さんの作品をあまり評価してこなかったが、今はこの作品を一押ししたい。山口さんの作品は女性的な面がやはりある。教員の夫は死んで女が出ていく。姉の旦那は失踪してしまふ。結局、男を踏み台にして女が立ち上がっていく小説だなと（笑）。変な発想ですが、かの文豪・谷崎の『刺青』で最後、女がそこに出てくる。すごい女を生み出してしまふ。ああいうふうに見て男の目から出てくる女。逆に女の目から見てそういう男が出てきたら私は脱帽したと思う。ここにそれはないけれど、最後にこの変な姉妹が男を踏み台にして変質していく。ここに皮が剥けはじめたところが出てくる。タイトルに『悪虫』とつけてしまふところが、まだ皮を引きつつしていると感じるが、新しさを感じたのでこの作品を選びたい」と作者の成長を褒めました。

前半で強く推薦した小沢選考委員は「最後の『悪





「強いことでもあるのよ」の部分には要らないと思った。「幻燈一夜」は私は推していない。読みにくいだけではなく、文章を読んできて読者の脳裡にイメージが浮かんでこなければいけないと思った」と述べました。

大高選考委員は「『幻燈一夜』はいくつかイメージがあって、それを繋げて小説にしたんじゃないかと思う。私自身はイメージできた。『崖くずれ』は破綻していると私は思うけれども、逆に可能性がある。『風景』はかなりよいところまで行っているの、中から針で突き抜けてほしい」との意見。

小野氏は「風景」について「妹の視点で書いているので、もつと姉の言葉を引き出さないといけない。会話が多いこともあるが、読み終って誰かに伝えようとしても、さて何が書いてあったらうとイメージが残らない。最高の作品として選ぶにはダメイメージがある」と否定的な意見でした。五十嵐選考委員は「『幻燈一夜』に関しては大

うものが散りばめられていて、逆にうるさく感じるところもある。『幻燈一夜』は一目見て読みにくいと思ったけれども、読んでみるとすらすらと読めて割合によくわかった。小説としては違和感があるが、イメージは素直に入ってきた。『風景』は素直に違和感なく文章として読めたと思う。見送って作家賞になるのもよし、今回これになるのもよしだと思った。『崖くずれ』『風景』どちらでもよいが、『崖くずれ』はタイトルが何か違うような気がした」と講評しました。

「親子で鬱病」の作者の平井文子氏は「他の人の作品を読んだとき、自分は足元にも及ばないと思った。『親子で鬱病』は実体験をまとめたようなもので、小説とは言えないのではないかと。皆さん、とても書き慣れていて、長い間、努力してこまで書けるようになったのだと思うので、これから一生懸命書いて、なんとかレベル・アップをしたいと改めて決心した」と決意を語りました。

熱い討議に時間が経つのが早く、すでに四時四五分。終了予定の五時まで時間が迫ってきたので、最後に特別選考委員から一言ずつ総合的な見解が述べられます。

都築選考委員は「一読者として一番おもしろかった『空の通信』が落ちてしまったので、純文学作家としておもしろかった『崖くずれ』を推そうかと思ってるが、山口さんの『風景』はよい作品で、これは他の作品と競うよりも、自分との闘いで、前年よりもおもしろいものを書いてきたというのが個人的にリスペクトできる。『幻燈一夜』はどうなんだろうと思ってきたが、まほろば賞には毎年魔物が潜んでいるので、これはもしかした

高さんと同様、自分にはイメージできた。山口さんに関しては、この一作だけで評価すべきではなく、これまでの全体で評価すべき作家で、その意味では『まほろば賞』よりも『まほろば作家賞』にふさわしい。ここで『まほろば賞』をとってしまおうと『まほろば作家賞』をとれなくなることに、寂しさがある(笑)」と述べました。

中野氏は「『風景』は文学的に余裕がある作品だと思ふ。人間の思いを風景として眺めようという姿勢を貫いている。豊かな可能性がある。『崖くずれ』は必死な作品で、後半の水や崖くずれに、この人の人間そのものが表現されている。そこを再評価してもよいと思う」と分析しました。山口氏は「納富さんの作品は文学のおいしさというものを感ぜさせてくれる。寺本さんの作品は新しい作家の登場を予感させてくれる。どちらも捨てがたい。自分は二人に比べると平凡で、文章を高める課題を持っていきたい」と語りました。

ここで河林満夫人・河林幸恵氏が「崖くずれ」は、長年やってらっしゃったんだろうということとがよくわかって、フリーズフリーズに文学とい



河林幸恵選考委員



ら逆転があるかもしれない(笑)」と予測を含めてまとめました。

小沢選考委員は「自分も都築さんと同じで『風景』には絶対に二次選考に行ってもらいたかったので持ち点全てを入れた。『風景』か『崖くずれ』だと思ってる選考に臨んだ。『崖くずれ』は文章がかっこいい。『風景』のよさは自分の中の悪虫を描けているけれども地味ではある。『幻燈一夜』も他の人はイメージが浮かぶといっているの、予断を許さない(笑)」と、どの作品が選出されるもおかしくないとの見方が示されました。



特別参加した第7回エッセイ賞優秀賞の山田まさ子選考委員



みだけれども、今回、山口さんを推してしまう」と選考会に参加した候補者に温かい言葉を贈りました。

大高選考委員は「『親子で鬱病』に関して言えば、小説を書きながら新しい発見をしてもいい。『風景』はいい作品だが、衝撃力というのが少ないと思う。それを出すには、やはり書きながら発見していかなければいけない。大変なことだけれども、それが一番かと思う。他については既に話したけれども『幻燈一夜』が当選しても大丈夫(笑)」と笑いを誘いました。



八覚正大特別選考委員から賞状と賞金を授与される2011年度優秀賞受賞の平井文子氏

額「如見天心」が贈呈されました。お二人とも喜びに顔がいつそう輝いていました。

選考会は、白熱した議論により予定終了時間をかなり超過しての閉会となりました。最後に主催者から長時間選考に参加してくださった方々への感謝に加えて「とても充実した選考会だったと思う。これを弾みとして、同人雑誌の作者の方々に、多くの人が読んでよかったと思うような、さらにはいい作品を書いてもらいたい」と期待の言葉が述べられ、熱気に満ちた公開選考会は閉会となりました。

今年東日本大震災という思いがけない災害を乗り越えて、選考会を開催することができました。被災地の皆様へのお見舞いを中心から申し上げるとともに、これを途絶えることなく続けさせていただけただけに心から感謝し、さらに「まほろば賞」が継続し、同人雑誌による創作に励む作家の方々に、大きな目標と励みになっていくことを重ねて切望しております。

まほろば賞は回を重ねることに認知度も高まり、また作品のレベルも上がっているとの参加者の声でした。またこれにより、所属していない同人の作品を読む機会が増えていることが参加者の発言から実感できます。このネットワークがさらに広がり、同人誌の外部ともつながっていくことが期待されます。

このネットワークの上に、各作者の創作意欲に満ちて、たくさんの人と共有すべき優れた作品が生まれ、実りのある日本文学の果実が生み出されることを願ってやみません。次回の再会を約して帰途に着きました。

(風森里美)

東谷選考委員は「崖くずれ」は文学が好きの人が素直に立ち向かったひとつの究極の形ではないかと思う」と短く話しました。

五十嵐選考委員は「崖くずれ」は最初に東谷さんが推薦してきたが、確かにいい作品だと思う。『顔』もよい作品だと思った。『空の通信』はかなりよいところまで行くかと思っていたが、今回は中部ペンクラブからの参加者が少なかったためか、予想ほど点数が入らなかったのが残念。『風景―悪虫―』は「まほろば作家賞」に期待しているが、それはどうなっても仕方がない。『幻燈一夜』は賛否両論だが、想像力を一番発揮しているのはこれだろうと思う。会場の方々に、全国への同人雑誌の最優秀作として発信すべく悔いのないように投票してもらいたい」と締め括りました。

「では投票をお願いします」という声で、各人がすでに配られた決選投票の赤い用紙にそれぞれの点数を記入しました。

どの作品が最高点になるか、今年の「まほろば賞」に輝くのはどれか、各自の期待を託した投票用紙が集められ、一〇分間の短い休憩の間に集計されます。会場は、討議からの解放感と同時に、逆に高まっていく緊張感で、熱気が充満します。いよいよ集計の結果が発表されます。里見アシスタントが会場に響く大きな声で各作品の獲得点数を読み上げます。

「『崖くずれ』130点、『幻燈一夜』114点、『風景―悪虫―』146点。以上の結果、一位は『風景―悪虫―』となりました」

会場からオーッと歓声が上がります。ここから司会者から「決選投票で上位二位が二〇点以内

の場合、さらに二作品のあいだで決戦投票を行なうことが示されていますが、そのようにしますか。それともやらずにこのままでよろしいですか」と提案が出されました。会場の声は「このままでいい」というものだったので、司会者が「ではこのままでいいという方は挙手をお願いします」と採決したところ、圧倒的多数が挙手しましたので、「では、第五回全国同人雑誌最優秀賞は山口馨さんの『風景―悪虫―』に決定しました」と宣言しました。「山口さん、おめでとうございます」という司会者の声と同時に、会場から万雷の拍手が鳴り響きました。

大接戦でしたが、四時間以上にわたる選考討議の結果本年度の第五回「まほろば賞」は、「渤海」59号山口馨氏の「風景―悪虫―」、特別賞は「胡壺・KO KO」9号納富泰子氏の「崖くずれ」と決定しました。

最後に表彰式が行なわれました。会場全員の拍手の中、山口馨氏に全国同人雑誌振興会から賞状と賞金が授与されました。さらに「風景―悪虫―」をもっとも強く推薦していた小沢選考委員の手で、首に重い記念メダ

第二次決定投票

崖くずれ	幻燈一夜	風景―悪虫―
130	114	146

ルがかげられました。また優秀賞「親子で鬱病」の平井文子氏には、力強い言葉で激励した八覚選考委員から同様に賞状、賞金、メダルが授与され、加えて書家でもある五十嵐選考委員から記念の書



小沢美智恵特別選考委員から賞状と賞金を授与される2011年度「まほろば賞」受賞の山口馨氏



第5回
全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

2011 公開選考会
9月18日 PM1時

あなたも選考委員

同人雑誌最優秀作品を自らの手で選ぼう
同人雑誌界のエポックを

会場●東京都世田谷区玉川区民会館
主催●全国同人雑誌振興会・文芸思潮
後援●作家集団「塊」 参加費●1500円

(候補作品を読んでいただくことが必要です/収益は「まほろば賞」の賞金となります)

※候補作7作は「文芸思潮」41号に掲載

参加申込 TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 文芸思潮

メールでも受けつけます asiawave@qk9.so-net.ne.jp

地方から御参加の方は、宿舎も手配します

詳細は次ページを御覧下さい。

新しい日本文学の潮流を

同人雑誌から

全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

第5回全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

どうぞ選考に御参加ください **公開選考会**

あなたも選ぶ、新同人雑誌時代の、新しい文学賞

2011年9月18日(日) 13時

東京世田谷区玉川区民会館

●全国同人雑誌振興会・文芸思潮では全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」を公開選考会にて決定します。公開による方法ですので、どなたでもご参加できます。

●候補作品は文芸思潮41号に同人雑誌優秀作として掲載された作品です。

「崖くずれ」(納富泰子「胡壺・KOKO」9号)

「顔」(井本元義「胡壺・KOKO」9号)

「踏切の音」(朝岡明美「文芸中部」86号)

「空の通信」(北川朱実「文芸中部」86号)

「幻燈一夜」(寺本親平「彩雲」3号)

「風景—悪虫—」(山口馨「渤海」59号)

「親子で鬱病」(平井文子「まくた」31号)

●選考会は9月18日(日曜日)に等々力駅前の玉川区民会館で13時より開かれます。郵送による投票だけでも参加が可能です。どうぞあなたも選考委員になって最優秀賞を選んでください。

選考委員ご希望の方はまほろば賞選考委員申込用紙を、「文芸思潮」まほろば賞係宛にお送りください。※参加費1500円

選考委員は候補作掲載号が必要です。お持ちでない方は選考委員申込用紙と併せて、文芸思潮41号をお申込みください。文芸思潮の定期購読者は、候補作品を読んでいただければそのまま選考委員になれます。詳しくは次ページをご覧ください。

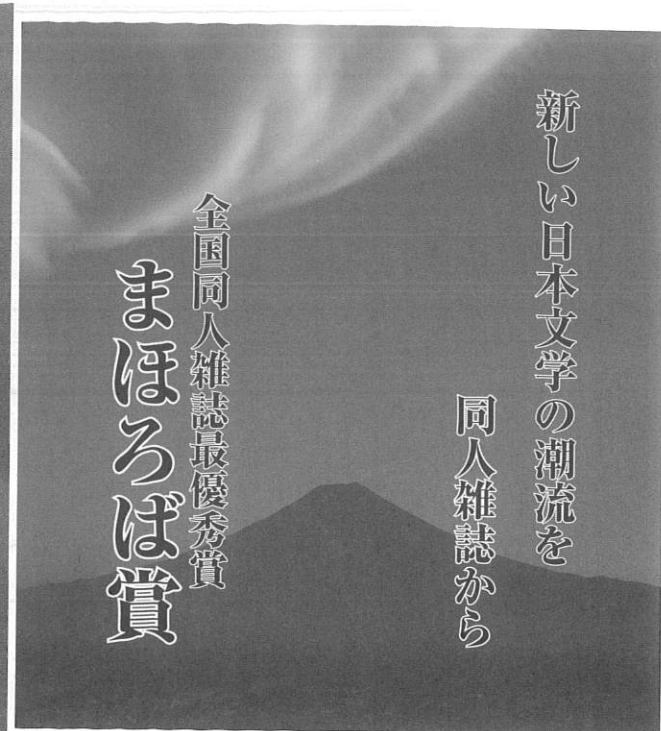
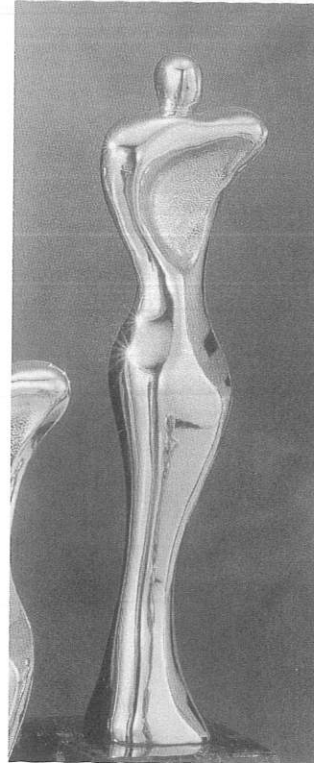
全国同人雑誌振興会

文芸思潮

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13

TEL&FAX03-5706-7848

Mail: asiawave@qk9.so-net.ne.jp



新しい日本文学の潮流を

同人雑誌から

全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

第5回全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞の公開選考会に参加
ご希望の方は、以下の用紙をご利用ください。

第5回全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞選考委員申込用紙

2011年9月18日(日)に東京都世田谷区・玉川区民会館で開催される、第5回全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞の選考に参加します。

ふりがな 氏名	年齢
住所 〒	所属同人誌 (あれば)
TEL	Eメール (あれば)

2011年8月31日までに「文芸思潮」まほろば賞係宛に郵送・FAX等でご提出ください。これは実際に会場での選考に参加される方(一般選考委員)のための申込用紙です。選考に参加される方は、必ず全ての候補作をお読みください。※参加費1500円
会場にお出でになれない方(文書選考委員)は別頁の投票用紙をご利用ください。

全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞

●全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」

文芸同人雑誌の振興と創作活動の奨励を図るため、全国同人雑誌振興会および文芸思潮では、全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」を創設します。これにより、同人雑誌で活躍される方々の創作エネルギーを鼓舞し、優れた同人雑誌の作品を、文芸を愛する人々に広く読まれる運動を展開していきたいと存じます。

●全国同人雑誌最優秀賞の選考過程

- ① 全国同人雑誌振興会選考委員会および文芸思潮編集部により、同人雑誌に掲載された作品のなかから（3年以内とする）優秀賞を選び、文芸思潮に掲載する。これに同人雑誌優秀賞を贈り、同時に最優秀賞選考の候補作品とする。優秀賞は6篇前後とする。優秀賞には賞金1万円と賞状・記念品を贈る。
- ② 毎年**公開選考会**を行ない、候補作品について十分な討議を重ねたのち、投票により、最優秀賞を決定する。全国および海外からの送付による投票も点数に加える。
- ③ 選考委員は候補作全作品を読んだ者とする。
- ④ 選考委員は特別選考委員と一般選考委員（選考会参加）、および文書選考委員（選考会不参加／文書のみ）によって構成される。一般選考委員、および文書選考委員は希望志願とする。
- ⑤ 各委員投票持点は特別選考委員50点、一般選考委員10点、文書選考委員は2点とする。一般選考委員、および文書選考委員の人数枠は第1回は設けない。
- ⑥ 文書選考委員の投票は公開選考会一週間前までに行い、選考会当日までに開票集計して発表する。
- ⑦ 最優秀賞は一人が原則だが、二人もありうる。
- ⑧ 最優秀賞には10万円の賞金と、賞状、記念品を贈る。（賞金は、できるだけ有志の寄付を募り、その寄付金によって、将来賞金額を上げていくことが望まれる）
- ⑨ 最優秀賞選考過程・結果を「文芸思潮」に発表する。
- ⑩ 優秀賞を4回受けた作者には「まほろば作家賞」が授与される。

●この全国同人雑誌賞は、多くの方に参加していただき、その賛同と御協力によって運営されていく新しい賞です。ぜひ同人雑誌からの文芸復興をめざして奮って御参加いただきたいと切にお願いするしだいです。

2007年5月25日（2009年5月1日※⑩を加えて改訂）

※2011年7月1日文書選考委員の持ち点を2点に変更。

全国同人雑誌振興会
文芸思潮

第5回全国同人雑誌最優秀賞 まほろば賞公開選考会

あなたの手で最優秀賞を

参加費 1500円

文書選考委員 1000円

JR大井町駅より大井町線
車で約20分

会場：**玉川区民会館**

東急大井町線・等々力駅前

2011年9月18日（日）

13時～17時予定

どなたでもご参加いただけます。

選考会に出席される方は、お名前・ご住所・お電話番号を2011年8月31日までに、お葉書、FAX、メール等でお知らせください。



①合議・討議⇒投票⇒②討議⇒投票⇒決定
徹底的に話し合った後、投票で候補を絞り込み、討議を重ねて第2回目の投票で決定いたします。

- 「崖くずれ」 納富泰子「胡壺・KOKO」9号
- 「顔」 井本元義「胡壺・KOKO」9号
- 「踏切の音」 朝岡明美「文芸中部」86号
- 「空の通信」 北川朱実「文芸中部」86号
- 「幻燈一夜」 寺本親平「彩雲」3号
- 「風景—悪虫—」 山口馨「渤海」59号
- 「親子で鬱病」 平井文子「まくた」31号

●お問合せ：文芸思潮まほろば賞係

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13

TEL & FAX 03-5706-7848

Eメール asiawave@qk9.so-net.ne.jp

第5回全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞投票用紙

⑦ 平井文子「まくた」 31号	⑥ 山口馨「渤海」 59号	⑤ 寺本親平「彩雲」 3号	④ 北川朱実「文芸中部」 86号	③ 朝岡明美「文芸中部」 86号	② 井本元義「胡壺」 9号	① 納富泰子「胡壺」 9号
点	点	点	点	点	点	点
持ち点 2	氏名		TEL			
住所 〒						

選考会に参加できない方はこの用紙をコピーし、8月31日までに、まほろば賞係宛てにお送りください。

※点数の合計が持ち点となるようにつけてください。一人に限らなくてもけっこうです。158
文書選考委員の方は1000円の郵便為替を同封して下さい。収益は賞金にさせていただきます。

崖くずれ

納富泰子

山を囲む、青黒く透明な池だ。
長い水草が幽かにそよいでいるところを見ると、どこかから少しづつ水が注ぎ込まれ、流れ出ていく岩穴があるのかも知れない。

見上げる山は休火山特有の円錐形をしている。
立ち入ることの難しい山だ。来る者は先ず池で阻まれ、さらに灰色の絶壁で突き放される。中腹は針葉樹林に埋め尽くされ、頂上には剥き出しになった岩山が尖る。
池の岸には、なよやかな柳の木が一本立っている。山地に生える木ではないのに。
静まりかえった山は、私の夢のなかでいつも、曇天の下

に重くうずくまっており、虫の音も鳥のさえずりも風の音さえもない。

半年前から、床に伏せることの多くなった私は、広い居間に移したベッドで、枕に頬を埋めて目覚めたり、夢の山を見上げて池の傍に立っていたりする。意識が混ざり合うので、焦って眼をこじあけると、居間の壁の穴から流れ出す水が、酸素チューブのうねる床で、霧になって消えていくのが見える。「水が……」と呟くと、曲がったストローつきの、ミネラルウォーターの入った容器を、私の手に握らせようと介護人の手が伸びてくる。

アザミに似た女から、ときどき、ひっそりとした声の電話が掛かる。受話器を取り上げて、はい、と応えると、しばらく間が空いて、「あの……」と言いくそように声を出すのが女の癖だ。
アザミの女は、ほとんど無駄なこととは言わず、私の夫の

消息が何か知れたか、と尋ねるだけだ。

「納期が迫って若いあいつに三日三晩の徹夜をさせて、心筋梗塞で死なせたのは俺なんだよ」夫に何度聞かされたことだろう。

部下が死んだのは十八年前のことだ。生まれて間もない男の子と妻が遺された。労災保険が下りるように会社に交渉したのも夫だった。

夫は、盆を迎えるたびに、私を同行させて隣の市の郊外にある部下の家まで、仏壇に線香をあげに行った。
敷地が広く、林に取り囲まれた静かな平屋だった。
風鈴の音が涼しい。

幼子を膝に載せて座っているふっくらとした声の穏やかな妻の姿が、その家にはよく似合っていた。
十年目に私は、膝の関節症が悪化して正座が出来なくなった。あとの八年ほどは、夫一人でお参りに行くことになった。お供えの果物や花を準備して夫に持たせた。「私が、お元気で頑張ってください、って言ってたって、ちゃんと

奥さんに伝えてね」とその都度くどいほど念を押した。
盆のお参りから帰宅した夫が、「あの時、あんなに小さかった息子が、アメリカの大学に留学したらしいよ」と嬉しそうに言ったのは去年のことだった。

夫は二年前の三月に定年退職をした。夫が家にいるようになって、夫婦二人の暮らしには、三LDKのマンションでも広すぎるほどだった。このマンションで、平凡な生活を通しながら、ゆつくりと年をとり、やがてどちらかが、どちらかを、介護する日がやってくる。

すでにお互いの父母も鬼籍に入り、夫の一人きりの弟とは、父の法事の時に誰も住まなくなった故郷の家を壊すかどうかで意見が割れて険悪になり、以来、全くの疎遠だった。私の身内は外国に住む弟がいたが、数年前に病死し、弟嫁は再婚した。叔父も叔母も高齢になって心身が不自由になり、法事にも出られなくなった。

「明日は我が身ね。そして、こじんまりと少人数の葬式を出すのね。どっちがどっちの葬式を出すのかなあ」と言う私に、夫は「俺は、まだまだ山に登るぞ」と笑った。五歳も年上女房で、肺に慢性的な故障を抱え、膝も悪い私の方が、きつと見送って貰える側だろうな、と笑顔で応えながら思った。

夫は二カ月に一度程度の山登りが趣味だったが、「山は

そろそろ日帰りの低い山だけにして、おまえの温泉好きに付き合つてやろう」と言う。有り難いけど迷惑な。夫とふたりで温泉に行つても話題がなく、日常の続きでは、すこしも面白くない。だが夫の嬉しそうな顔を見ていると何も言えなかった。私の温泉行きだつて半年に一度のバスツアーというつましきだったし。

温泉旅行の約束はどこへ消えたのか、夫は昨年の夏を境にゴルフ三昧になった。週一回は早朝から出かける。時には、遠方に泊まりがけだ、と言う。何かに夢中になったら、ひたすら追い求めていく夫の性格を知っているので、またそうなのか、と思つていた。

ゴルフから帰つてくると「楽しかったけど、えらく疲れた」を連発し、風呂もゴルフ倶楽部で入つてきた、と言つて、軽にお茶漬け程度を摂つてさっさと寝てしまう。ゴルフの様子などほとんど話してくれない。翌日に「どうでした」と尋ねても、「忘れた」としかいわない。成績がふるわなかつたのだな、と思い、「そうですか」と笑つただけだった。

夫の顔色には、だんだんに艶が出てきた。やつとできた自由を満喫しているな、と思つた。

「定年退職でくすぶつて家に居場所を失くしてしまう男の人が多いらしいけど、あなたは大丈夫みたいね。何だか若

返つたみたいよ。気を遣わなくてよくて有り難いわ」と笑つた。そのとき夫がどんな顔をしたのか、覚えていない。

夫の部屋に、掃除機をかけるために入った。

減多にしないことだが、乱雑な机の上や抽斗を見かねて片付けはじめた。

大きな抽斗の一番下の紙箱に、畳まれて重なり合つた手紙の下書きをみつけた。何気なく数行を読んだ。

え？ と呟き、もう一回丁寧に読んだ。胸を殴られたような感じがして、その場にへたりこんだ。

女の家に泊まつた夜のことが綿密に書いてあつたのだ。

読み進むうち、相手の女が、盆参りをしてきた部下の妻だと分かつた。日付を見ると、去年の秋から始まつている。ゴルフだ、と頻繁に留守をするようになった時期と重なる。茫然とするよりも、かっと頭に血が上つた。信じたくなって混乱し、震えながら他の手紙を捜した。夫は、手紙は必ず下書きをして、その下書きを取つておく習慣があつた。こんなあぶない手紙でも、下書きをさつさと処分するなどの画策ができない不器用な人なのだ。

「あの風の通る林の中の静かな家で、あなたとふたりで暮らせたら」と夫はひたむきに書いていた。「近いうちに退職金もマンションも家内に渡して離婚し、身一つであなたのところに行きます。待つていて下さい」と筆圧も強く書

いている。

震える指で女から来た手紙を捜した。いくつかあつたが、それは郵便ではなく、手渡しの手紙のようだった。一番新しい女の手紙をみつけた。「私は生活の一部分であなたと深く結びついていたいだけ。私の家は、私だけの息をつく場所です。あなたとは時々お会いするからこそ、気持ちも新鮮で、大事なひとときになるのです」

六十二歳の老人から「身一つであなたのところに行く」と一途に言われて、まだ四十代半ばの女は浸つていた夢から醒め、慌てたのだろう。

「ゴルフ」から帰宅した夫には、何も言わなかった。

言い出した後の展開が怖ろしかった。いったん口火を切れば、家の空気が一変し、夫も私も、今までとは違う顔になる。私は自分の感情を抑える自信がなかった。

夫は、自分の部屋が片付けられているのを見、妻の強ばつた表情ときこちない返事に、はつと思ひ当たつたに違いない。一週間ほどして夫がゴルフだと言つて出かけたときに抽斗のなかを捜してみたが、手紙の箱はどこにもなかった。

夫が女と別れた日、そうか別れてきたのか、と私が分かつた日、夫の目が泣き腫れたように赤かつた。とうとう棄てられたのか、いい気味だ、と思う気持ちと、女に対して

の複雑な憎しみを、同時に感じた。

あなたはアザミのような人だ、と夫は手紙の下書きに書いていた。アザミの花の可憐さと棘のある葉は、私の知っている若い頃の女とはイメージが違う。ふつくと柔らかい感じの女を、開きかけの白牡丹のように感じていた。

夫が風呂に入っている間に、背広の内ポケットを捜し、女の写真を手帳の間に隠しているのをみつけた。四十歳を過ぎた女の姿は、面影を残しながらも見違えるようにシンプルで、知的で美しかった。アザミのような、という表現は、よく合つていた。

夫は私を花にたとえたことなどない。では私は何だろう。鏡を見ると、乾いてたるんだ顔があつた。例えるなら、かさがひらいてしまった土筆かもしれない。

夫は私に手をついて謝つた。自分がいるところはここしかない、もういちぢやりなおしたい、と言つた。そんなにすぐに私の気持は切り替わらない、と突き放した。痛烈な言葉が、口からあふれ出た。夫はうなだれた。

私は、頑なに目を合わせなかつた。

夜半にトイレに起きると、夫がベランダの椅子に座つている姿が見えた。泣いているようだった。妻を裏切つたことを後悔して泣いているのか、女を忘れがたく思つて泣いているのか、自分の情けなさを悔やんでいるのか、と私は

寝間着の襟をかき合わせながら冷たい心で思った。

男は九十歳を過ぎてても、綺麗な女に好きだと言われたら気持ちが悪くもつものだ。だからといって物わりの良い妻などいない。初々しく誘われたものだから、こつちも後先の考えなく、高校生のように、一途にのぼせてしまった、と夫は言ったが、他人事ならほほえましくさえ思うかしらね、と答えた。

食事の毎にそつげなく茶碗や皿を置かれては、夫は食欲をなくすだろう、ほとんどを残した。ええそうでしょう、私の料理は美味しくないのでしょね。残った料理をゴミ箱に棄てた。

夫の使った茶碗や湯呑みを洗うのが嫌だった。流し台に放りっぱなしにした。夫が自分で洗う姿を横目に見ていると、妙に情けなく、腹が立った。夫とは目を合わせないくせに夫の姿を神経を立てて追いかけていた。夫は無口になった。茶碗を洗う丸めた背中に、憂鬱さと無気力さが滲み出ていた。

夫は、あれは自分が愚かな夢を見ただけだ、むこうは恋をしかけてきただけで本当の愛情ではなかったんだ、一人息子に知られるのが怖かったんだそうだと、と荒れ果てた顔で言う。そう言えば妻が救われるとでもいうのだろうか。お互いにひどく傷ついているのだが、私の傷つき方と夫

た。誰とも話をしたくなく、一人のバスツアー参加だった。何を見てどこを歩き何を食べたか、何もかもどうでもよく、やたらと右膝の関節が痛むばかりで、虚しく詰まらないう旅だった。

バスの窓を流れ去っていく見知らぬ町並みを眺めながら、自分は夫と別れられるだろうか、そのことをずつと考え続けていた。この四十年間、専業主婦の私は夫に頼りきって生きてきた。私はすでに夫の一部だった。もし夫を切り離されたら半身を失ったよう、生きる気力もなくなってしまうだろう。

私がすることは、許すこと。忘れることしかない。しかしそれは早々と出来るものではなく、納得して心が静まるまで、何年かかるか分からなかった。

今夜帰宅したら、夫とじっくり話しあうしかない。

旅行から帰ってくると、夫はいなかった。

夫の部屋はきれいさっぱり片付いていた。本も服もほとんど棄てられていた。ここまで、と息を呑むほど、夫の臭いが消去されていた。空いた場所に何が置いてあったのか、全部は思い出せなかった。

机の上に、真ん中に「一行だけ「山に行く」と書いた便箋が残されていた。山の名前は記されていない。

あ、夫は家を出て行ったのか、と何だか他人事のように

の傷つき方とは違っていて、たぶん夫の方が複雑だっただろう。気持ちを意志的に切り替えるのは、私の方の役目だったかも知れない。

けれども私は夫の裏切り行為を恨み、夫は苦しんで贖い（あがな）をすべきだ、という考えにしがみついていた。

三世紀ほど前のイギリスの脚本家が書いたという一節。「憎しみに変わった愛情ほど激しい怒りは、天界にも見いだされぬ。蔑まれた女の想いほど激しい憤りは、地獄にさえ見つからぬ」そのとおり、心の裏には、夫への愛着がしつかり染みついて、どんなに消してしまいたくても消えることはないのに、口に出るのは裏切られた者の怒り、憤り、悲しみばかりだった。

夫が黙り込んだまま寝室に引き上げると、私は居間のソファベッドに寝具を持ってきて横たわる。寝返りばかり打つ。堪らなくなつて、深夜に女の家電話番号をプッシュする。

しばらく呼び出しのベルが鳴り、物憂げな声で「はい」とアザミの女が応える。息が詰まり、無言のまま受話器を戻す。そして、不意に気づく。女はきつと夫が掛けた未練の電話だと勘違いしただろう。

マンションの、密閉された壁の多い空間で、憂鬱な顔を付き合わせているのも鬱陶しく、二泊三日の旅行に出かけ

ぼんやりと思い、それから急に激しいショックが来て血の気が引き、床にへたりこんだ。

夫が家を出て行くだなんて、考えたこともなかった。

「山に行く」……山、とは何処の山のことだろうか。

少しでも夫と関わりのある山の土地の旅館や駅で、夫の写真を見せて歩いた。

誰もが、首を振る。関節症の右膝の骨と骨とがぶつかりあつてひどく痛み、片足を引きずって歩いた。

一週間たつても、手がかりは全くなかった。携帯電話は電源が切られたままなのか、何度かけても通じない。苛立ちと心配で眠れない夜が続いた。

自宅の電話帳に書かれていた三人ほどの山仲間にも尋ねてみた。夫は年間の半分は単独行だったそうで、心当たりの情報は、得られなかった。ゴルフ仲間が所在が分からなかったし、本当はゴルフなどろくにしていなかったのだらう。

膝に疲労が溜まって腫れ上がり、こわばりと痛みが激しい。胸が苦しく、地面がぐにやぐにやに感じられるほどの疲れに、寝込んでしまった。

膝の炎症がいくらか治まると、家にいることに耐えられず、ホームレスの多く集まる駅周辺に行つて、一目で分か

る彼らの一人一人を覗き込みながら歩いた。公園のブルーのテントの住人に夫の写真を見せて尋ねたが、みな首を振る。

居丈高に夫をなじった自分の声がよみがえってきて私を苦しめた。

些細だが懐かしい思い出がぎっしり詰まった四十年は、あんな感情的な言葉くらいで崩れはしないはずだった。あまりにあっさり去ってしまった夫に、そんなものだったの？ と怒りが湧く。

だがすぐに怒りは私自身を突き刺し、纏わりつき、喉を締め付けてくる。赦せない、と叫んで、赦されなかったのは、私も同じだった。

言葉ほど怖いものはない。ざらざらとした刃のような言葉は、相手の胸に深く突き刺さったまま、一生抜けないことがある。

迷った末に、アザミの女に電話を掛けた。

「夫があなたのところに行きませんでしたか？」

聞くのは惨めでやるせなかつた。

「いえ」と女は不審そうに尋ねた。「何か、あったのですか」

「ええ」声が震えた。放り出すように言う。

「夫がいなくなりました。もう二週間になります」

ってきた。最後の一節の、深く黙すものだけに時折幽かに聞こえる、という崖くずれの遠い音が、胸に沁みて余韻を残した。

だが、私の実際的な小さな脳では、読み解くのが難しかった。神の領域まで入り込んだ詩のような気がする。神のことは昔からよく分からない。

乏しい感覚を耕すようにして、何度も読みかえした。そのうちに、切り立つ断崖を持った、人を寄せ付けない灰色の山が、だんだんはつきりと眼前に現れてきた。もしかしたら、こんな山が実際に在るのかもしれない、と何かにすがるように思った。未知の山に登る人の心は、どこか、この詩のようなものではないか。

夫が過去に登った山を一所懸命に思い出そうとした。どの山からも、夫は充実感を抱えて帰ってきた。険しく鳥も飛ばない断崖だらけの、登り切れなかった山の話など、一度も聞いた覚えはない。

高野喜久雄のことを少し調べた。彼はキリスト者で詩人で、彼の名を冠した公式があるほどの数学者だった。他の詩を読むと、神に人間の存在の意味を問うものが多い。答えのない問いを、切ないほど繰り返していた。

私も夫と同じで「崖くずれ」が一番好きだ、と思った。

崖くずれ 灰色の山が夢に現れたのは、「崖くずれ」の詩を繰り返し返

女は息を吸い込む音を立て、沈黙した。

時季外れの風鈴の音が、弱々しく聞こえた。

やがて、「申し訳ありませんが、私は何も知らないのです」女の声が、消え入るように伝わってくる。

「夫が行きそうな山の話は、心当たり、ありませんか」たたみ込むように言う。

「いえ、べつにそれも」女の声が固くなった。

「何か、分かったら、すみませんがお知らせ下さい」と私は言うなり電話を切った。

夫の部屋を何度も調べた。何か行き先を暗示する物はないのか、と。本棚には辞書の類か古い本が数冊しか残されておらず、蔵書はほとんど処分されている。

残された本のなかに、ページの端が茶色に焼けた薄い詩集があった。

高野喜久雄という詩人の本だった。手に取ると、葉が挟んであるページが、自然に開いた。

「崖くずれ」という短い詩があり、タイトルに、鉛筆の丸印が薄くついていていた。夫は愛読していたこの詩集を処分するには忍びなかつたのだろうか。

印がついていたのは、人の心になぞらえた険しい未踏の山の詩だった。

ストイックな短い詩からは、非情なほどの孤独さが伝わ

し暗記するまで読んだ後のことだ。

鮮やかな夢だった。道もなく、しるべもない山の夢だ。

だがあのストイックな詩とは、山の趣が違っていた。私の夢は、私らしく俗っぽかった。山は、なぜだか、周囲を池に囲まれているのだった。山に入るには池を泳いで渡るかボートに乗るか、ふたつの方法しかない。

ボートは見あたらす、私は泳げない。池は深い。

みっしりとした暗さに満ちた山だった。

一筋の風も吹かず、何の気配も持たなかつた。灰色の崖の上に、青黒い色の羊歯が茂っているのが見える。

池のまわりを、膝の痛みがすっかり消えた足で歩いていくが、ボートはやっぱりない。山の周囲は行けども行けども絶壁で、人間が入る道が見あたらす。

池に映る山は、ゆらゆらと輪郭が柔らかい。だが見上げる山は凍り付いたように動きがない。

池の水は深く、中秋の冷たい色をしている。

土手の草は誰にも踏み荒らされた跡はなく、萩の白い小さな花がこぼれている。

振り返ると、背後は荒れ果てた野原だ。黙りこくった山は微動だにしないが、野原には風が生まれて、曇天の下に、銀白色に光るススキを茫々となびかせている。

朝刊に挟まれていた便利屋のチラシの片隅に「ボート貸

します」と小さく書いてあった。電話番号を控えたメモ紙と携帯電話を枕の下に入れた。なかなか山は夢に現れなかった。

三日目に池の傍に立っていた。いそいで枕の下からメモ紙と携帯電話を取り出す。だが、携帯電話の数字ボタンの順序がばらばらに入れ違って、何度も打ちそこなう。やっと押し終わっても、繋がらない。

辺りを見回すが、ススキ野の果てには、鬱蒼とした杉木立しか見あたらない。この野原自体が、山の中腹の平地なのだろうか。ススキ野には、人の踏み固めた道跡もない。池は、うらみを映し出すように暗い。秋の色をした柳の細かい葉が、風に震えている。

山に向かつて、夫の名前を何度も呼んだ。息苦しくて声に力がこもらないのが、もどかしい。叫べば叫ぶほど、山は固く黙り込んだ。かわりに、池の水が、黒と青緑の濃さをくつと強め、縮緬のさざ波を立てた。私の声を片端から小さな渦に吸い込んで、山まで届かせないようにしている。むせび泣く自分の声で目が覚めた。

若い頃、肺炎が乱れている、と医者に言われていた私は、六十歳を過ぎた頃にひどい肺炎を患った。そのあと肺のレントゲン写真には、常に薄い白い霧が掛かっている。二年ほど前から風邪を引くと、低酸素血症を伴う呼吸不全

く全身的にだいぶ楽になった。

酸素ボンベから伸びるチューブが床の上をうねってからまっている。

トイレに入っていると電話の呼び出し音が聞こえた。夫かもしれない、と慌てて出たら、チューブに足が絡まって転んだ。膝に激痛が走った。

立ち上がれない。何とか立ち上がろうと焦っていると、電話は切れてしまい、悔しさに床を叩いた。

携帯電話が入っているバッグのある所まで這っていき、救急車を呼んだ。

辛い骨折ではなく、膝のひどい捻挫だった。膝関節症がかなり悪いので人工関節置換手術を勧められたが、肺機能を用いて長めの二カ月半の入院、と聞いてやめた。

夫が、帰ってくるかもしれないのに……。帰ってきたら、二度と出ていかないように、引き留めなければならぬ。留守は出来ない。

歩くことがひどく大変で、病院から借りた松葉杖でトイレに往復すると、ベッドにぐったりと横たわった。

いよいよ独りでは毎日の生活は無理だと気弱になった。氣力を振り絞ってあちこちに電話をした結果、施設への紹介の話はもろろ断って、自由に用事が頼める民間の介護人を昼間だけ二人、交代で頼むことになった。費用は私

を起こすことが何度かあった。

酸素ボンベを自宅に置いて常に酸素吸入をしてはどうかとかかりつけの医者に言われていたが、二十四時間チューブに繋がれるなんて嫌ですよ、と逃げていた。

夫を捜し回る毎日の無理がたたったのか、風邪を引き気管支炎を起こした。こじれて肺炎になり、二週間入院することになってしまった。

退院までの拘束された日々が、夢に浚われたようにほんやりと過ぎた。

退院時、くれぐれも無理をしないように、という医者の言葉を上の空で聞いた。

杖を突いて前かがみになり、膝を広げた歩き方になっている自分に、ロビーの姿見で気づいた。白髪が増えて、いっそう年老いて見える。アザミの女と何という違いだろう。急いで帰ったマンションは、どの部屋も埃をうつつらと被っていた。夫が帰ってきた様子はどこにもなかった。携帯電話はついに一度も繋がらない。

今回の肺炎は何となく尾を引いて、掃除をしただけで喉がひゅーと笛のように鳴り、息苦しい。もう、無理の出来ない体と年齢になっていることを痛感した。

あきらめて酸素の吸入を医者に頼むと、業者がやってきて部屋の隅に大きな酸素ボンベを設置してくれた。

さっそく酸素チューブを鼻に装着すると、呼吸だけでな

の僅かな年金だけではとうてい無理で、夫の残した退職金と貯蓄でまかなえるのだった。行方不明の夫の年金には手をつけることができない。

食事の支度、掃除洗濯、買い物、二日に一回の風呂の介助を頼んだ。洗面とトイレだけは、購入した車椅子に腕の力と片足で移って、自力で行った。

無理にでも体を動かしている間は何とか気が張っていたが、介護人たちの世話になり始めると、ベッドに横たわる時間が多くなっていく。

次第に体力氣力が衰え、何もしなくても慢性的な疲れを感じるようになった。体温の調節が上手くいかないのか、肌寒いの眠ると汗がひどい。食欲もあまりない。

近くの医院の往診を頼むと、昔なじみの老医師は、あなたの精神の衰弱が体を弱らせているんだね、と言った。

介護人に銀行に行く用事を頼んだ。通帳を見るが、退職金も年金も、夫は一度も引き出した形跡がなかった。

深夜に電話が鳴った。

傍らの小さいテーブルに置いてある子機を急いでとり、名前をなめる。向こうは黙っている。

夫かもしれない。「もしもし、あなた？」大きな声を出す。「あのう」と気弱そうな声が聞こえた。アザミの女の声だった。

「失礼かしらと思っただんですが……」「何か、分かりましたか？」と、聞く声が前のめりになる。「いえ、私で良かったら捜すお手伝いをしたいと思つて」

しばらく、声が出なかつた。「ご一緒することは出来ませんけど」とようやくの思いで断わる。

「いえ、私一人で、あちこち当たりますので。何かわかつたら、ご連絡します」と声が沈んで小さく聞こえる。「お願いします」と言うしかない。夫のことをあちこち当たるほどの親密さがあつたのか、と傷つきながら。

夢の山の話は女にはしなかつた。自分の夢を他人と分かつなんて無理だ。

アザミの女の声がまつわりついて眠れない。じれつたいような怒りと悲しみが喉を締め付けた。

微かな疑念も湧く。アザミの女は、自分の夫の死のきつかけを作つた私の夫に、全く恨みを持たなかつた筈はないのだ。

アザミの女はそれからときどき、夫の言う「風の通る林の中の家」から、電話を掛けてくる。何の手がかりも見つからないのです、とそれだけを囁くように言う。

うとうとと眠りかけると瞼の裏いっぱいに、暗い青色がゆらめき表れてくる。さざ波を立てて、池が私を呼ぶ。池の岸を歩いていて。足下の草が柔らかい。

やつても飛ぶことはできなかつた。

山の上の空はそだけ空虚な感じの灰色で、鳥の影もみえない。山は日陰のように暗い。私はいつのまにか枕に沈み込み、うつらうつらとする。池から風が立ち、柳のやわらかな長い枝がむち打つように揺れた。その一瞬、山の奥深くの崖の上に、背中を丸めてしゃがみ込んでいる人の影が、みえた気がした。

はっと目を見開くと、自分のベッドに、ひどく疲れて冷たい足をして横たわっている。

冬の夜中にトイレに立って冷えた私の足を、夫がいつも黙つて自分の足に挟んで温めてくれたことを思い出す。不意に胸が詰まり、溢れる涙が、枕に染みこんでいく。

夫が家を出ていかなかつたとしたら、時と共に傷が癒えてまた寄り添って生きていけたとしたら、どんなに幸せなことだつたらう。道もなくしるべもない山の奥深くから、幽かな「崖くずれ」の音が聞こえてくるような夜があつても、それは救しと慰安なのかもしれないのだ。

朝、目覚めると、西側の壁に、煙色をした穴が現れている。穴から、音もなく細い水が流れ出ている。

介護人がやつてくるのを待ち、壁を指さした。

「あの穴を塞いで」

介護人は壁をじろじろ眺めて「どこにも穴などないです

山は変わらず沈黙し、隙をみせない。

しばらく歩くうちに、水面のすぐ下にコンクリートの平たい橋があることに気づいた。

私は草履を脱いで手に持つて、足袋のつま先をそろそろ伸ばして、足首まで水に浸るほどの橋に降りた。

橋は幻だつた。いっぺんに池にはまつた。夢の私は酸素チューブを外し、髪を綺麗に結び上げ、一番上等の訪問着の上に雨コートまで着込んでいた。濃い緑色の厚地の雨コートがズブズブと冷たい水を吸い込んで黒くなり、裾が固く足に纏わつた。濡れて収縮した帯が重く体を締め付けてくる。池は深い。夢中に水を掻いた。草履が、ぶかり、ぶかり、と鼻先に浮く。水が、鼻から口から入ってくる。苦しい。もがき、あえぎながら、ベッドに飛び起きた。本当に酸欠状態になつていて、酸素チューブを引き寄せてあわてて装着する。何度も息を大きくつき、小さなランプだけが点るほの暗い部屋の静けさになだめられ、落ち着いてきた。心臓の拍動がしばらく耳に響いた。なぜ和服など着てめかし込んで夫に会おうとしたのか、と独りで笑つた。

夢は私にとつては現実をこえた現実だつた。

記号のように頑なな灰色の山の奥に、きつと夫がいる。だが、何度ここにやつてきても、池を隔てて山を見上げるしかないのだ。夢ならばあの崖の上にひらりと飛び移ることができないのではないか、と思うが、夢のなかでも、どう

よ」と言つた。「床が水浸しでしょ」と言う。「いいえ、乾いていますよ」と不審そうな返事だ。

私の目がおかしいのか。幻覚をみているのか。

掛け布団を頭まで引き上げて、壁の穴から落ちる青みがかつた水を眺めている。「オキタさん、やつぱり壁に穴があるわ。うつすら青い水が流れ出してきてるのよ」と介護人に言うが、中年のふつくらとした女性は、「そうですか、お婆ちゃん、でも、放つておいても大丈夫ですよ。それに私はオキタさんではなくてハセベです」と愛想良く返事をする。私はお婆ちゃんなのか、と驚く。手鏡を覗く。白髪の乱れた、精気の抜けた、たるんだ顔が映つた。寝込んだ女は、こうも急速に老人顔になるものだろうか。

中年の女介護人たちは、雰囲気がよく似ていた。私は名前をすぐに呼び間違えてしまう。ふたりとも無駄口を叩かずよく働く。床も家具もびかびかに磨かれて、いつ夫が帰つてきても哀れな浅茅が宿にはならないですむ。

うとうとと眠る事が多くなつた。目覚めるとほんやりと壁の穴から流れ落ちる水を眺める。介護人に呼びかけられると、引つ張り上げられるように覚醒するがまた眠つてしまう。眠ると夢のなかにずぶずぶ沈みこんでいき、やがてこの世からずれたところで眼を醒ます。

そうか、あれは、と気づいた。空間のどこかに、あの池

に繋がった水路が生まれ、私の部屋に繋がって、流れ落ちてくるのではないか。いや、そんなはずはない。池の青い色は、水の深さに光が屈折して出来た色なのだから。だが、水は池と同じような重さと粘りを含んだ藻のにおいを放っている。

一日中、穴を見ていた。介護人が「どうかしましたか」と聞くので、「穴を見張ってるのよ」と答えた。

夜になって、水の筋がねじれて、一匹の小さな魚が鱗を光らせて跳ね落ちてきた。小魚は床で少しのあいだ跳ね、霧のように消えた。黄色くなった柳の落ち葉が流れ出てくる。やっぱりあの池の水なのだ。

ならば、どんどん流れ落ちておいで、と囁く。池の水が減っていつて、歩いて渡ることが出来るまで、この部屋に流れ落ちて欲しい。

流れ落ちた水は、床の上に落ちると同時に霧になって消えていくばかりだ。消えた水はどこに流れていったのだらう……。

アザミの女の声が受話器から聞こえてくる。何か便りはあつたでしょうか……。 「いえ」と短く答えるとアザミの女は自分を責めるように、すみません、と呟く。沈黙が落ちる。受話器を耳に当てたまま、穴から流れ落ちる水を見つめる。恨みが少し深くなる。

ねじれながら流れ落ちては、次々に消えていく水は、私

ときどき粗相をしてしまい、オバタさんだつたかトリイさんだつたか名前を思い出せない介護人の、無言のままの手際の良い処置を受ける。すみませんごめんなさい、と謝りながら、部屋中に広がる排泄臭に身が竦み、恥ずかしくて涙が出る。昨日はいつのまにか椅子に座らされて散髪されていた。散髪の間、子供のように眠ってしまった。目が覚めると刈り上げられた首筋が寒かった。ベッドに戻されて、また眠つた。

今日も、日常が時計の秒針のように小さな停止を繰り返しながら進んでいく。月の蒼白い光が壁に射している。穴から流れ出る水が黒く見える。穴の水は、細くなったり、太くなったり、ゆつくりと呼吸をする。やはり水音は聞こえない。池の水の匂いはますます濃くなり、壁や天井や床や寝具が、しっとり濡れていく。山の朽ち葉の匂い、木々の匂い、風のそよぎ、苔の香。背中を屈めて道のない山道を行く夫の後ろ姿を思い浮かべる。池の水の匂いが私の寝床を包み、肌着の下に忍び込み、体の奥に沁みこんでこよよとする。私は池に取り込まれまいと、布団を固く抱きしめるのだ。

目を閉じて、道も無くしるべも無い、だれも登り切れたためしの無い山のことを一心に思う。

山の奥深くから、崖くずれの音が、幽かに聞こえてくる

と夫が共に生きてきた四十年の「沢山の感情と些細な出来事で埋め尽くされた歳月の記憶」のようだ。光と影を巻き込んだ水の中に、黒い朽ち葉のかけらが閉じ込められて、流れ落ちていく。

数日後、介護人が、交代の女に向かって「かなり」と囁き、自分の頭を指さし、くるりと回すのを見た。

ふっと不安になる。私は介護人たちが耳打ちしあうように、そんなに惚けが進んでしまったのだろうか。アザミの女は本当に電話をかけてきているのだろうか。

何だか、大切なことを忘れてしまっている気がするのだが、いくら焦っても、それが何なのか分からない。

マンシヨンの五階という場所に閉じこもって、心も体も宙に浮かんだまま、日ごとに体力と気力が体の芯から抜けていく。私のすべてが、抜け落ちて薄くなっていく。介護人たちの世話になることが次第に増えてくる。風呂はもはや介護人ふたりがかりの作業となり、十日に一度となつた。そのかわり、清拭を毎日丁寧にして貰える。介護人たちは、「お婆ちゃん」と呼びかけ「さあ、お顔から、拭き拭きしましょうねえ」と、幼児をあやすもの言いをする。私は、自分の名前すらも失ってしまったらしい。

排泄だけは、車いすに移って何とか自分でトイレに行く努力をしている。

のではないかと耳をすませる。

崖くずれの音は、頑なな山の心が、揺れ動いて聞く音なのだ。崖くずれば、切ない。自分の一部を失いながら、何かを求めて崩れる。

池の端に立っていた。中腹の木立の間の崖道を蟻に似た小さな影がゆつくりと這い登っていくのが見えた。夢中に夫の名前を呼んだ。小さな影が立ち止まり、首を回して、じつとこちらをみている。夢の中に、もはや点でしか現れない夫に向かって、声をふり絞って、名前を呼び続けた。

浅いつながりのない夢の連続のなかで、山はふいに姿を現すのだ。

気がつけばまた池の岸に立っている。

萩は散り、ススキは白く呆けた。

柳の木は、垂れた裸の細い枝を、風に震わせている。

やっぱり、池の水量がかなり減っていた。

コンクリートの細い橋が、薄く水に洗われながら浮き上がって見えている。

大丈夫かしら、と思いつながら、片手で柳の幹を掴んで、こわごわと片足を載せると、橋はただの影で、ゆらめいて、砕け散り、しばらく破片を漂わせて、ゆつくりと元の橋の形に戻った。

山を見上げる。髪を刈り上げた首筋に、晩秋の冷気が沁

みる。寝間着の襟をかき合わせ、両手で耳たぶを温める。マフラーを持ってくればよかった。鼻に酸素チューブを入れたまま来てしまった。足下にくねっているチューブの端は、草むらのなかに潜り込んで見えない。

また顔を上げて、山を見上げる。人が入らぬ山は、針葉樹林も荒れていて、密集して重なり合った木の下は真っ暗で、ところどころに、曇天ながらも木漏れ日が、杉落ち葉のふかふかと重なる地面を、うつすらと、照らしているのだろう。

夜更け、沈んだり浮いたりする浅い眠りのなかにいた。浮かび上がったとき、ああ、いま、遠いところで小さな崖くずれがおきたな、と胸を衝かれた。

山の奥深くから、土が崩れて滑っていく音が、幽かに伝わってきたのだ。

外れた小石の、はるか下の涸谷の岩に跳ねるらしい乾いた音が、耳奥に響いている。

寝汗が首筋を濡らし、萎びた乳房の下を濡らす。湿った襟がひやりとする。

音が途絶えた。掛時計の秒針が、水のしたたるような音をたてて進んでいく。刻まれる時間の隙間を、ふたたび、遠くひそやかな音が

横切った。

幽かに訝しながら、長く崩落していく、土と岩の音だ。

『高野喜久雄詩集（現代詩文庫第40）』思潮社

「胡壺・KOKO」

9号より転載



納富奏子

のうとみ やすこ

- 1945年 福岡市生まれ
- 97 「午前」同人となる
- 2003 「胡壺」同人となる
- 01 「穴の空」にて福岡市文学賞
- 06 「文学界」上半期同人雑誌優秀作として「薔薇のように」転載

同人雑誌優秀作

胡壺・KOKO 9号

顔

井本元義

最愛の妻を亡くした時、私は七十歳になったばかりだった。急に意欲を失くした私は長年手にかけてきた会社を売り払った。私の生を含めて未練を覚えるものは何もなく、全てを捨てたくなったのだ。しかしそれは妻の死が理由のすべてではなかった。私は密かにこの機会を待っていたとも言える。

老人施設の入居金と年金で死を迎える準備は出来る。残った金で何をするかである。

私は五十年にわたる現実の事業の合間にも読書が好きだった。しかしそれも一つを除いて煩わしくなった。残った

のは十九世紀末文学の最高峰の一つと言われるユイスマンの「さかさま」だけである。貴族の末裔の最後の一人となった主人公、淫蕩の限りを尽くしたデゼッサントは城を売りパリの郊外に居を構える。世間を侮蔑した彼は日常生活と現実を拒否し、人工美の頹廢世界を創りその書齋に閉じ籠もる。妖しい幻覚のうちに彼は病んでいくだけである。

私はバリの東北部の小高い丘に一軒の庭付きの家を借りた。デゼッサントほど金持ちでない私には小さな家でもよかった。目的があるわけではない私には市街の中心よりも住みやすく思われた。それは正解だった。そこから市内を一

望することができた。

パリの朝はほんやりした薄いソーダ水のような色に明け、晴れる日の少ない空はいつの間にか午後を通り過ぎて、遠くまで広がる町並みの先へ桃色の気配を残して消えていく。市内の東のはずれの教会の尖塔を微かに赤く煌めかせることもある。朝焼けや夕焼けを映して打ち寄せるさざ波が、波打ち際に立った私の足元に打ち寄せるようである。

時折り若々しい朝日と水色が夜明けを破るときもある。その日の夕焼けは決まって激しかった。遠い市街地は大火に襲われたように真紅の中に果てしなく沈んで行く。そしていきなり龐大な赤黒い雲になって空中を占める。巨大な棺が燃えているようである。私は眩く。物語の始まりだ。動乱が起こる。革命前夜だ。

かの貴族のように裕福でない私でも、食には眼がなかった。鴨、豚、牛、鳥、鹿、猪、フォアグラなどその都度、ワイン、蜂蜜、オレンジ、ビール、香草、林檎の組み合わせで時間をかけて煮込んだ料理が好きだった。特に子牛の頭を輪切りにしたものを煮込んだものは好物だった。デザートは極上のメロンを半分に分けて、ホット赤ワインを流し込み、果肉とともに味わうのがいい。

満開の花群れになって通りの両側をその果てまで連なっている。私の庭にはそれらの花が全部揃っていた。ただマロニエと桐は塀の外から我が庭を覗き込んでいたのだが。

私が特に愛でたのは牡丹である。私は壁を這う白い蔓薔薇以外をすべて取り除いた。今までの牡丹園は五倍の広さになった。私の日課のほとんどはこの牡丹園で費やされるようになった。一日に必ず一度はそれぞれの牡丹に手を触れた。雑草や虫の除去、根付きの整え、肥料と水に時間を忘れた。蕾から次第に開いていく過程を毎日見つけた。それは私の愛玩動物であった。

かのデゼッサントが巨大な亀を仕入れてきて、その甲羅に様々な悪戯をして悦にいつていたのを思い出さなければならなかった。寶石を散りばめた日本式の花の図案を背中に刻まれた亀はすぐに死んでしまうのだった。

私は牡丹の美しさを表現する言葉を持たない。それを謳った詩も読んだことはない。私はすっかり魅入られてしまったが、それをどう消化して受け止めるかがわからず一時は気が滅入ってしまった。深紅には深紅の、純白にはその色合いが一輪ずつ違った。花弁の厚さはそれぞれに、薄く貧弱な花弁でさえそれぞれの歴史の豪華さを秘めていた。一本の茎がこの土から神秘を吸い上げて、深淵の果てからこの美しさを出現させる、その不思議さ。私は得体の知れ

家政婦は盛りを過ぎてはいたがまだ娘で、大柄で動作がやや鈍く、言葉も流暢ではなかった。ただ彼女の料理は私の好みに合った。私は彼女を離れに住まわせた。

音楽が好きなのは終日、家中に古典音楽を響かせた。そして手当たり次第にオペラ、バレエ、コンサート、芝居へ出かけた。なるべく安いチケットを手に入れてどこでも何時でも出かけた。それで全ての物語の筋や印象や記憶が濃い密度の中でごちゃ混ぜになってしまった。それは快い満足感になった。

日曜日の夕暮れ時に、大きな教会はパイプオルガンの演奏をする。ある雨の日、街外れの教会で私が一人だったことがある。私はその演奏に心打たれた。そして何故か急に自分が恥ずかしくなった。それは清涼剤のように全ての音響の中に残った。

春は街中に花々が咲き乱れる。どんな小さな公園でも必ず花壇があり様々な色が整えられている。落ち着いた芝生の中で薔薇とチューリップがその華やかさを競う。リラのそよぎが邸宅の壊れた石壁からのぞきながら香る。古い煉瓦塀を藤の花が這い登り、もの悲しげな紫を小さな乳房のように垂らす。薄紅と純白のマロニエは大きな葉陰で公園と憩う人を包む。そして桐の街路樹はまるで紫雲のような激しい欲求と、自虐のような哀しみさえ覚えた。そして私はある明け方、打ちひしがれたような気持ちのまま夢精をした。誇り高い美しいその花が一瞬脳裏を襲った時だった。

私は一日中牡丹の絵を描くようになった。眼で捉えたその美しさを私の内部に留めずに神経を通して指先へ、指先から絵筆へと伝わらせた。下手な絵ではあったが、しばらくはそれで耐えることが出来た。私が真の芸術家であれば、花の精と私の精が融合して素晴らしい絵となって昇華することが出来るはずだった。だが私は力不足だった。私の愛情、愛情とまで言えるようになった気持ちは、その美しさを受け止めることが出来ず表現も出来ず、苛立つようになった。その苛立ちは一種の怒りになって私に向けられた。

私は正直に書かねばならない。牡丹の精は私にとっては過去にもこれからも決して奪い取り我が物にすることの出来なかつた、そして出来ない絶対の女性になった。大輪の一輪一輪は気高い盛装の女であり、あるいは全裸だった。そして一枚一枚の花弁は美しい女性の器官、耳であり口であり眼であり脚であった。それらは幾重にも重なり豊かな胸や腰になって薄絹のロブからはみ出していた。微かな風に花弁が散る時は、ふくよかな胸が揺れて濃厚な匂いが漂

った。時折、一瞬でもそれが淫らに崩れようとすると、私は息を飲むほど動揺しそして悲しくなった。その女性の表情は畏怖の闇の向こうにあった。その闇に身を投げ出すには、私はあまりに無力だった。どれもが私を無視しながら、その魅力が私を捉え、打ちひしいでいるのを知っていた。そして微かに震える花弁はあくまで無意識のうちに私を誘惑し続け、そして私を拒否するのだ。限らない侮蔑を与えられても私はその魅力から逃れられない。欲望は増すばかりである。私は決してかなえられることのないその欲望に悩んだ。それは怒りとなって私を捉えるが、すぐに私は力を失い諦めの沼に沈み込んで行く。私はその絶望の淵からもはや這い上がれそうになかった。

私は家政婦を犯した。彼女の抵抗はなかった。私は決して彼女を弄ばなかった。陵辱とは言えない。いとおしさも湧いてはこなかった。私の対象は別のものだった。そして私は虚脱感と深い悲しみに打ち沈んだ。

悲しみは悔悟だった。悔悟は私に禁欲を科した。私は緊張して日々を送った。冷徹な心を持ちたいと思った。そして静かに花の美しさのみを味わうのだ。家政婦は最初の頃のようになんのわだかまりもないように振舞った。少しずつ増やしていった花株はついに百を越えた。初夏の陽を浴びて大輪の深紅と純白が庭中に溢れ、業火のように妖しげ

に揺れた。

だが私の禁欲は偽りであった。欲望をより激しくしようとする無意識の意識である。そこには決して叶えられないことはないという絶望が待っているが、その悲しみがさらに欲望を激しく駆り立てる。貴族デゼッサントは蘭を愛するが、やがてその花が梅毒の化身になって彼を襲う幻覚に悩まされるようになる。その恐怖のほうかどれだけ安らかであるだろう。

禁欲は死の想念を喚起する。荒れ狂う欲情の渦の中に奇妙な静謐が顕われる。

夢の中でそれが牡丹の花であることがわかっているのだが、美しい老婆が私を官能の世界へ誘惑するのだ。老婆は死に瀕している。私はその誘惑に負けそこに吸い込まれ快感と安らぎに陥って行く。

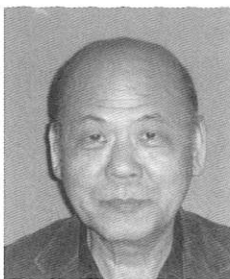
私は禁欲を解いた。もはや何ものにも逆らわない決心をした。長い時間をかけて一輪を凝視しその匂いに酔った。それ以外に出来ることはなかった。私は決してその花を、高慢な女を得ることが出来なかった。私は耐えねばならなかった。私は自分の無力を悲しみ、自分へ怒りを向けた。その絶対の存在の前で、私は再び家政婦を犯した。彼女は淡々と私に身を委ねた。私はただ処理をすればよかった。

繰り返されるそれらの日々の中で私の体力は確実に落ちていった。次第に痩せて黒ずんでいく老残に、美への愛と陵辱が叶えられるはずがなかった。その諦めでもない居直りでもない思いは、一種の安心感になった。私は死を予感した。花に集中した果ての性の衝動だけが私の力であった。そして肉体に残る性欲の処理は死への安らかな遊行と感じられた。私は美に拒否され打ちのめされた、死に向かう一つの老醜であった。そして来るべき死は無に帰することであるから、私の意識も一切ない、悲しみも恐怖も苦しみも悔悟もないはずである。花の匂いだけが私の栄養ではかば受け付けなかった。花弁の熱が私の微熱になり、その振動が共鳴して私の脱力感を誘った。そして私は倒れた。

ある朝目覚めると真夏であった。陽は高く上り青空が突き抜けていた。私は庭へ出て愕然とした。庭は完全に廃園と化していた。百本の花茎が枯れたまま並び、腐った花弁が幾重にも地面を被っていた。むせ返る肥料の匂いが灼熱の太陽に熱せられて息が出来ないほどである。長い間寝込んでいたわけではない。ならば、あの私を魅惑し死へ誘う花の群れは幻覚であったのか。

補道

その後の記憶はあまりないが、私は帰国していた。



井本 元義

いもと もとよし

1943年生まれ

九州大学理学部物理学科卒

69 第1回新潮新人賞佳作

中小企業経営で35年間休筆

2004 詩集「花のストイック」福岡

市文学賞

09 第5回文芸思潮現代詩奨励賞

他に詩集「レモクワール」

「胡壺・KOKO」9号より転載

胡壺・KOKO 福岡県

KOKO 来歴

真摯な思いで書く

「胡壺・KOKO」は同人会も同人名簿もない同人誌である。創刊から八年。この間、自分たちにはできるやり方で続けてきた。

創刊のきっかけは納富泰子とひわきゆりこの出会いである。ある会で同席し、初対面であったがお互い名前を知っていたし作品も読んでいた。ふたり共に他の同人誌に参加していたが、何度か会ううちにふたりで同人誌を創ろうという話になった。自分たちの手で自由に新しい同人誌を創り出してみたい思いがあり、相手の作品に対する信頼が基になった。

新たに何かを創造するのは楽しい。無からの出発であり、誌名や装幀など夢見るように語り合った。誌面はカットや頁数も入れた原稿ファイルを印刷所に渡すので、印字のポイント数や題字とのバランスなど、何度も試し刷りして見比べた。しかし運営については、次の二点くらいだったと記憶している。

・それぞれが知人に声を掛けて投稿してもらおう。どちらかの推薦があれば無条件掲載だが、迷う場合はふたりで読ん

で話し合う。

・費用は発行毎に精算する。共通の費用以外は、それぞれが使用した頁数に応じて負担する。

それと、もうひとつ。購読者を募り、入金してくれた方へ本誌を届ける。発行時に送りたい人はたくさんいるが、むやみに発送しても迷惑と感じる人もいるかもしれない。そこでこの方法を取ったが、私たちの想像を超えた方たちが申し込んでくださった。少人数でやっているのに経済的にも助かるし、何より心強い応援である。

これらは「規約」という程のものではなく、忘れてはいけないので書き留めておいた。

三年が経ち、あるときHPを見たというメールが届いた。自分も小説を書いており、どこかに発表したい、とあった。それまでも何度かこのような連絡はあり、作品を送ってもらって、それぞれの感想をメールや手紙で伝えていた。しかしこの時は実際に会って感想を伝えることになった。

人様の作品を読んで、小説になっているかいないかからは、かろうじて判るつもりだ。しかし優れているかいないかの判断には自信がない。この時、私たちふたりは送られて来た作品を好ましく思った。

居酒屋の片隅で三人が初顔合わせし、ずいぶん長いこと話し込んだ。「あなた、もうKOKOにお入りになったら」

心ゆくまで楽しむ場だ。

昨秋、納富がKOKOを離れることになった。以前から健康面で過酷な状況が続いていた。KOKOという枠を離れても、それまでの人間関係が切れることはない。それならばと、枠の出入りをもっと緩くすることにした。メンバーとメンバー外の区別も取り払い、それぞれがやりたい事、できる事をやる。こんなことが可能なのも、お互いに対する信頼ゆえと思う。

その時どきでやりやすい道を選びながら続けてきた私たちが、決して手にできないものがある。長い歴史を刻んできた同人誌を手にする、脈々と受け継がれてきた伝統を思う。同人数の多い大所帯の切り盛りも大変だろう。

だが、私たちは私たちのやり方で進むしかない。もちろん、これでよいという思いは微塵もない。これでよいことなど、そもそもあり得ない。だからこそ不安定な試行錯誤を続けてきたし、これから先どのようなに変化していくかはわからない。

力量はともかく、真摯な思いで作品を書くという核の部分を誠実に守り続けていけば、「胡壺・KOKO」はきっと繋がっていくはずだと思っている。(樋脇由利子)

という納富のひと言で桑村勝士が加わった。以後、月一回の居酒屋例会を持つようになる。

三人になっても、やはり「規約」はない。毎月、顔を合わせた時に何か提言すれば、その場で即決。三人しかいないので、同じひとつの話題で話が進む。発行時期についても決まりはない。発行後に顔を合わせた折り、「次はいつにしようか」という話になる。それぞれの事情をふまえて次回の締め切りを決める。「合評会」もないが、自他の作品について言いたいことがあると言いつ、誰かに問うてみたいことがあるれば質問する。教えを請うという意識もないし、育てようとも思っていない。三人が同じ立場で協力し刺激し合う関係である。

そのうち投稿者獲得の下心もあり、数人に声を掛けて集まるようになった。この時点では、メンバーとメンバー外という意識があった。三人の例会は異なる人たちが加わって世代も立場も超え、多面性が増した。多少の入れ替わりはあるが、毎回五、六人が集まる。ゲストが加わり、その人の作品をみんなで読むこともある。日常生活では触れることのない話題を



胡壺例会

踏切の音

朝岡明美

その家は確かに線路沿いにあった。だが母が繰り返して言っていた駅から三つ目の踏切はなかった。路線は高架になつていったのだ。そこが母のいう家だと分かったのは文字の薄くなったクリーニングの看板が軒の上にあったからである。何度も手を入れたらしい木造の二階家は少し傾き、半世紀を超えてそこにあった。

海に近い小さな町、この町の名を初めて母から聞いたのは、亡くなる三か月前のことだ。

「もう一度行ってみよう。あの家は今でもあるかしら」

母はその頃をぶつ切りにして話した。それは私がまったく知らないことだった。毎朝弁当を持って線路沿いに駅に向かう男は誰だったのか。二階の欄干から身を乗り出して

見送るのは何歳の母だったのか。聞けば口を閉ざす。そのくせすぐに遠い目をして語りだすのだ。

「あのひとの帰りはいつもきまっていたわ。踏み切りの音がすると窓を開け、欄干の手すりにもたれて待つ。すると駅のほうから……」恥じらうように言葉を消した。

認知症は進んでいたが、線路沿いの家は襖の模様まで鮮明に思い出すらしい。

断片的な語りの中で、わたしは母の切り取られ、しまいで生まれてきた数年を知ることになる。

七十を過ぎて母は一人暮らしになった。同居していた弟が転勤になり、妻子とともに首都圏に居を移したからだ。

数年前に祖父母が相次いで亡くなり、広い家に一人残ったのである。少しばかりの畑を耕し、季節の野菜を育てていた。時折顔を出せば必ず畑から採ってきて持たせてくれたが、独身のわたしが食べきれないほどの量で迷惑でもあった。土を落とし、葉物は新聞紙でくるんでそのまま冷暗所に置けばもつからと積み込んでくれるのを断れず、ありがたうと貰って帰る。「多かつたらお隣にあげればいい」と言うがそれほど近所付き合いをわたしはしていない。少し

ずつ職場に運び、家庭持ちに配っていた。車を三十分走らせれば行ける距離に住みながら、わたしは年に数回しか実家に顔を出さなかった。母一人になっているのにもかかわらず、電話もしないつめた娘だった。母もよほどのことがなければ電話を寄こさないひとだ。

いつ行っても家の中は整い、増えているものも減っているものもない。カレンダーの絵柄は変わっていても掛ける位置は電話機の横、活けてある花は季節を伝えるが、花瓶は備前で下駄箱の上。わたしは母もいつまでも変わりがないと思っていたのだろう。

あれは祖母の十三回忌法要のときだったか。終わった後の会食の席で、旦那寺の住職が、

「深雪さんはいつまでも若いなあ。きれいなひとと歳をとらん。わしはことし喜寿をむかえたよ。あんたわしより三つ上だったから八十になつたはずだな」と母に言った。

若くうつくしいとほめられているのに、母はキツとにらんで「わたしはまだ七十九です」と返す。

「子供の頃からとびぬけて可愛いかったから、かわいいかわい芸者の子と苛められていたんじゃないかな」

住職は母の顔色などにはかまわず話し続ける。「名前どおり雪のように色白で、おまけに成績もよかつたからみんな憧れと嫉妬でいじめたんだらうな」

「和尚さんもう酔ってる。血圧が高いから医者からお酒止められてるんじゃないの。わたしが奥さんから叱られるから気をつけてくださいよ」

母は言い置いて席を立ってしまったが、和尚はかまわずつづける。

「ほんとうに芸者の子だったから傷ついたらと思うよ」

まわりにいる人たちもみな知っている事実と思いい口に出したのであるが、これは家族でも忌避してきた話題だった。

どういいういささつがあつたのか、母は五歳のときに竹村家に貰われてきた。産んだのは芸者だと聞かされたが、父親のことは誰も教えてくれなかったと母は言っていた。

養女になつた頃の写真がある。おかつば頭に大きなリボンをつけ、長い袂の着物に袖なしの被風を重ねた少女の横に前髪をふくらませた祖母が少し体を内に向け椅子に腰掛けている。少女の後ろに中折れ帽の祖父、背景はもやつた

木立ちで右下に写真館の名前が浮き出している。三人とも無表情である。竹村の家に来る前の記憶はほとんどないと母は言っていた。おぼろな思い出は夏、銭湯の帰りに夜店を歩き金魚すくいをしたこと。連れて歩いたのは母親ではなく、年配の女性で母のことを「みいさん」と呼んでいたこと。

「母さんは自分の出生を知りたくなかったの」と聞いたことがある。

「聞いてはいけないと思っていたのよ。新しい家になじんで家族になっていっても、いつも遠慮があったんでしょね」

望んで迎えた娘だ。祖父母は慈しんで育ててきたとわたしは思ってきた。たしかにかわいがってもらったと母は言う。聞き分けがよく、学校でも優等生の子供は自慢の娘であつたらう。親が喜んでくれればそれで満足していたのだろうか。

女学校を卒業してから母は結婚までの数年間、小学校の先生をしていた。

婿養子として祖父が決めた男は電力会社の技術者であつた。一度会つたきりで母は天竜川上流の勤務地についていたのである。わたしはそこで生まれた。

桜の花が散る頃行つたのに、向こうはまだ蕾がふくらみ

普通に日常が流れていたということだろう。

母との情をわたしは薄いと感じていた。産んでくれたひとなのになぜか遠く思えたのは、この空白の時間のせいかといまでは思っている。

母が倒れたと知らせてきたのは弟の嫁である。

夕方、畑でうずくまっている母を隣の雑貨屋の主人が発見して、救急車を呼んでくれた。先ずは弟に連絡が行つた。明日、朝早く新幹線に乗るからおねえさんすぐに病院へ行ってもらえないかと義妹は言う。

わたしは仕事から帰つたばかりで、途中で買って来た食料を冷蔵庫に放り込むとすぐに車を出して市立病院に走つた。長い夏の日も八時を過ぎ、とつぷり暮れて行きかう車のライトばかりがまぶしかった。病院までの十分が途方もなく長く感じた。

ベッドの母は眠っているようだった。雑貨屋のおばさんが付き添ってくれていて、点滴の調整をしている看護師に「娘さんです」と紹介してくれる。

「CTをとりましたが特に異常はなかつたようです。明日先生から説明があると思いますが、熱中症ではないかとのことでした。この暑さですから、お年寄りには多いんですよ」

とりあえず今は落ち着いています、様子をみましょうと

かけているところで、あの年は二度花見をしたと母は語つたことがある。社宅は川の近くにあつたからいつも流れの音がしていたとも話した。岩にあたる水の音をわたしは聞いていたのか。だがその地の記憶はない。わたしが歩き始めた頃、父は結核を発病し、幼児だけが祖父母のもとに連れてこられたからである。

子供を産んだことのない祖母はまだ乳離れをしたばかりの幼児を預かり、不安だつたらう。わたしは母を恋しがり泣いたであろうか。いや、すぐに懐いたはずだ。日ごと知恵が付き、慕ってくる孫を祖母は溺愛した。

父は二年近く闘病していたが、私が三歳のときに死んだ。一人帰ってきた母に私はすぐには馴染めなかつたらしい。それよりも祖母が離さなかつたのである。

母が帰ってきて、わたしは終日祖母を追いかけ、夜は祖母と一緒に眠れなかつた。もちろんその頃の記憶は私にはないが、物心ついた頃には当然のように祖母の昔話を聞きながら眠りについていた。

母は土建会社の事務員になつた。毎日自転車出勤するのを門の外で見送るのが日課で、夕方帰つてくれば飛び出して迎えた。それでも祖母としか寝られないわたしを、母はどんな気持ちで見ているのだろうか。

その頃であろう。母がしばらく家をあげたのは。その期間をわたしはほとんど覚えていない。母がいなくてもごく

看護師が出て行くのと入れ替わりに、紙袋を提げた雑貨屋のおじさんが入ってくる。

「あ、来てたの。お母さん大丈夫だよ。熱も下がってきてるし、ちゃんと名前も言えたから」

おじさんはこれでいいのかとおばさんに袋を渡した。寝巻きやタオル、ティッシュペーパーにスリッパも入っている。

「すっかりご迷惑をおかけしました」

「いいのよ、この前はわたしが世話になつたんだから。でも倒れたのが畑でよかつたわよ。うちのお勝手の窓からよく見えるの。一人きりの家に帰つてからじゃあ大変だった」

五時ごろ母はお店に顔を出し、一時間ばかり畑の草取りをして、帰りに豆腐を買うからと言つた。お盆が近いからお仏壇の仏具を磨いたり、夏蒲団に陽を当てたり忙しかつたとも話した。

「あんまり根を詰めちゃあいかんよ」とおじさんが言い、「そうよ若くはないんだから」とおばさんが続けた。

母は勧められた麦茶を飲み干して、裏の畑に行つたという。六時を過ぎて来ないから、窓からのぞくと茄子の根元に丸まった背中が見えた。

「様子が変だと飛び出していったの。ひどい熱だったけどわたしたちがちゃんとわかつてね、救急車呼んだからって言つたら悪いわねとんでも繰り返してたわ」

夫妻はまた明日来るよと帰って行った。

「あんたも帰って休んだほうがいいよ。あしたも仕事あるだろう」

雑貨屋の正式名称をわたしは知らない。乾物類、菓子、生活雑貨を主に、豆腐、練り物、干物も扱っていた。主人の名が徳三さんで、「徳やん」と呼ばれていたから「徳やんの店」あるいは「おみせ」で通っていた。町内に種苗店と理髪店があったが、これも「たねや」「とこや」でなんの不便もなかった。それらの店には看板もあがり、当然屋号もあつたはずだ。

わたしは眠っている母の顔を眺めながら、十八歳まで暮らした小さな町の人たちを思い出していた。ちまちまと区画されていた田畑は整理されて、道も広がり多くの家は建て替えられているが、代をつないで住み続けている人がいて、人情も引き継がれているのだろうか。

もう十時か。時計を見ていた目をもどすと、母はうつろな目で天井を見ていた。

「起きたの」

「わたしどうしたのかしら」

「気分はどう」

「ここあんたの家」

「病院よ」

入院に至る話をかいつまんで話しても、母は聞いていな

いのか「どうしてこんなところにいるのかしら」と繰り返している。看護師を呼ぶと「まだ完全に覚醒していないのでしょう。薬が効いているからあかりを消せばまた眠られますよ」と言った。側にいたわたしを認識したらしいので少し安心して病室をでた。

翌日、職場に休暇の連絡をして病院に行くと、母は四人部屋に移されていた。入り口に近いベッドに横たわっていた母は、サイドに立ったわたしを怪訝そうに見ている。少し潤っている目が不安げに瞬きを繰り返し、あんた誰？とでも言っているようだ。こんな母の顔を初めてみた。

「母さん」と呼びかけるとやつと分かつたらしい。

「ああ」と口元を緩めた。「わたしどうしたの」と聞き、「あんた来てくれたんだ」と言った。

わたしは入院までの経過を、昨夜話したとおりに繰り返した。

「そう、徳やんに世話をかけたんだねえ」

「入院の準備もみんなおばさんがしてくれましたよ」

話しているうちにいつもの母がもどってきた。

「あんた仕事はいいの」と案じてくれる。

「午後には好江さんがきてくれるから」

弟の嫁が向かっていることを告げると、母は少し不機嫌になった。

「大げさねえ。わたしそんなに悪いの」

「そうじゃあないけど、熱がまだ下がらないし、血圧が高いようだからしばらく入院になるらしいよ」

「達夫も来るの」

「達ちゃんの仕事があるから」

そうよね、と言ったきり母は黙って天井を見ている。話しかけても曖昧な返事がかえってくるだけで、昼ごはんも少し箸をつけただけだった。具合が悪いのかとわたしは心配していたのに、昼過ぎ好江が現れると起き上がり「面倒かけて悪いわねえ」と笑顔を見せた。

「おかあさん。わたししばらくこちらにいてお世話しますから。おねえさんはお仕事がありますからね」

好江は子供に言い聞かせるようにゆっくりと言った。母はうつむいたまま聞いていたが「ごめんなさい」と小さな声で謝っている。

あのときから母は自分が「弱者」であることを実感したのだろうか。口数は少なかったが、気位が高く自尊心も強い人だったのに、「ごめんなさい」と「ありがとう」しか言わなくなっていた。

藤の上のハンドバッグの中で携帯電話が震えている。帰宅の電車の中。次の駅で降りるのだが待ちきれずバッグを開けた。母の入院からこちら、着信のあるたびにギクリとする。電話はきれていたが履歴から高野からだど分かっ

た。少しほつとする。クレーターの効きすぎた車内から生暖かいホームに降り立つとまたしても振動した。

「いま、駅に着いたんだらう」

高野は駅構内の喫茶店にいた。

「おふくろさん入院してるんだって？」

どうして知ってるの、誰から聞いたの、それよりなぜここにいるの。わたしは矢継ぎ早に問い詰め、彼は笑っている。「いいじゃないか、そんなこと」

「良くはないわよ」

「このあいだ会社に行ったとき休んでたよ、おまえ。珍しいなと思って聞いたらおふくろさんのこと教えてくれた。

今日こちらの方面に用事があったから、ちよつと待ち伏せてみた。定時に帰るんだったらこの電車だろうと当たりをつけて」

「ストーリーかよ」

「還暦過ぎの爺さんじゃあ待たれてもうれしくないだろうが」

こっちは定年目前のばあさんだが「まあね」と笑っておく。彼の車で病院に行った。駐車場で待つと言うのを病室へ誘った。母とは初対面ではない。まだ二十代のころ一度だけ実家へ連れて行ったことがあるのだ。同僚四人でドライブに行き、帰りに立ち寄った。その中の一人を母は覚えてはいないだらう。

七時を過ぎた廊下はひっそりしている。消毒薬と饅⁺えた臭いがただよい、部屋からはテレビの音が小さく聞こえる。母はベッドの上になんまりと座っていた。わたしが来るのがわかっていたかのように笑いかけたが、すぐに後ろの男に気がついた。

「ユウキさん」母が小さくつぶやいた。

「違うわね、ごめんさい」

「高野さん。会社の人」会社の人だったというのが正しいが、今の母にはどうってことはない。

「昔、家に来たことあるんだよ。若い頃」

高野は儀礼的な言葉をならべ、母はなんともうなずき「ありがとう、すみませんねえ」と言った。入院から一週間経つが微熱がとれず、食欲もない。ゆうべわたしが持つてきたプリンは二つとも手付かずで冷蔵庫にあり、好江が昼間届けたりしいイチゴも幾つもたべなかつたのだろう、皿にのって入っている。

高野をエレベーター前のロビーに待たせ、母の顔や襟首をタオルで拭いてやった。

「母さんこは冷房も効いていて快適だねえ。うちにいたら今夜は熱帯夜だよ」

「でも帰りたい」

病院の帰りに高野と食事に行った。

「どうするんだ、これから」高野は母の退院後を案じてい

のスキー、キャンプもしたしハイキングにも行った。高野はすぐにリーダーになり、陣頭指揮を執っていた。背が高く、毎日営業で出歩いているせいか日焼けした彫りの深い顔は凛々しく魅力的だった。わたしも含めて何人かの女性が想いをよせていたにちがいない。誰にでもやさしく、誰にでも毒舌を吐いていた高野の心の底は測ることができず、女の子同士が腹の探りあいをしていた気がする。馴れ馴れしく近づけば嫉妬を含んだ中傷の嵐が吹く。先制攻撃を仕掛けて、体よかわされた者。告白することなくあきらめて、寿退職をしていった者。取り巻きは歳を重ねるうちに減っていき、気がついたらわたしだけが残っていた。わたしは会社の近くにアパートを借りており、高野は電車で通勤していた。一緒に駅まで歩き、途中の喫茶店に寄ったり、たまには映画を見に行っても誰も何も言わなくなつた。

「竹村、干支はなんだ」あるとき高野がまじめな顔で聞いた。

「巳年」

「おれはねずみ、相性最悪だな」

「あんがい古いこと言うのね。年寄りみたい」

「年寄りだよおれは。昨日で三十一になった」

わたしはふた月前に二十六歳になっていた。

次の年の三月、彼は突然会社を辞めた。実家の家業を継

る。

「どのくらい回復するかによるけど、もう一人暮らしはさせられないかもね」

「引き取るのか」

「昼間ひとりで小さなマンションにはいられないでしょう。家に帰ればご近所に顔見知りがいっぱいいるから、気はまぎれるでしょうけど」

「仕事をやめておまえ田舎で一緒に住んでやればいい」

えっと思った。そんな選択肢はわたしの中には寸分もなかったのだ。

マンションの前で手を振って高野と別れ、玄関を入りながら思った。

ユウキさんでだれだろう。

高野とは同期で入社した。わたしは短大を出て二十歳、高野は大学を卒業したばかりなのに二十五歳だった。浪人したのは留年したのか聞いたと思うけど、忘れた。会社は、もとは製粉会社だったらしいが、麺類をはじめとする加工食品に移行し、わたしが入った頃はインスタント食品やトルト製品が主流になっていた。会社も若く、社員も若手がひしめいていた。

中学校を出たばかりの十五歳から三十歳くらいまでの男女が二十人ほどいて、グループで遊んでいた。夏の海や冬

ぐというのがその理由であった。鋳物工場を経営している父親が、癌で余命宣告を受けているのだと聞いた。

高野への想いは燻ぶりながらやがて消えてしまった。

再会したのはその二十五年後である。

会社の創業記念式に退職者を招いた。出席を大きく丸で囲んであり、みなさんに会えるのを楽しみにしておりますと、角ばった字で書き添えてあった。懐かしい筆跡であった。当日、ホテルのロビーで受付をしているわたしの前に立つた高野は、顔も腹部も少し丸くなっていたがすぐわかつた。

「竹村、全然変わってないな。名前までそのまま」胸の名札を見ながら、開口一番、彼がわたしに言った言葉である。それ以降、高野は思いついたように電話を掛けてきて、わたしたちは時たま会うようになった。会社の帰りに待ち合わせて食事をしたり、お酒を飲んだり、でもそれだけで駅で右と左に別れる。そういう付き合いがもう五年も続いている。

「まだトイレに一人で行くのは危険なので、必ず呼んでくださいと言っているのに夜中でも勝手に行かれるんですよ」

ベッドの傍らに便器を置くのは強く拒否したらしい。

「コールの押し方を何度も教えてるんですけどねえ」

わたしと看護師の会話を、母は背中中で聞いている。
 「母さんなんて呼ばないの。このボタン押すだけなのに」
 母はすねたように背中を見せて横たわったまま黙っている。

「まあいいわ、今日は土曜日だからわたしずっといてトイレつきあつてあげる」

あと一時間もすれば昼食が配られるが、少しだけ食べましようとしてきたアイスクリームを出すと、やっとからだを起こした。

お盆をはさんで帰省した達夫やその子供たちが毎日顔を出していた。入院当初は聞きつけた知人たちがつきつき見舞いに訪れていたが、今はときどき徳やんがのぞいてくれるくらいだ。

好江も一日一回、昼食の終わった頃来て、洗濯物を交換したらずくに帰って行くらしい。わたしもウィークデーは毎晩顔を出せるわけではない。母はほとんど一日中喋らないですごすのか。自分から語ろうとしないので、わたしが糸口を見つけ話しかけることになる。

「このあいだ来てくれた高野さんを見て、母さんユウキさんて言ったよね。ユウキさんて誰？」

母は高野が来たことも覚えていなかった。息子や孫たちのことは「そうそう来たわね、鳩サブレもつて来てくれたわ」と言い、でも好江さんはしばらく顔を見ないという。

聞こえなかったのか、無視したのか、黙ってわたしに手をあずけ、ベッドを降りた。

土曜日の午後、見舞い客が多く、病室も廊下もざわついている。突然立ち止まって母は脅えたように言った。

「どこに行くの」

「トイレでしょ」

「あ、そう」

用を済ませると母はさつさとわたしの前を歩き、間違はなく自分の病室の決められたベッドにもどった。ちゃんと分かっているんじゃないかと思つた途端、わたしを見て「あなたどうしたの、こんな時間に」と言った。

その夜好江と電話で話した。

「ナースコールをしないのは操作が分からないからではないのよ。トイレにまで手を借りるのはいやなの。プライドの高いひとだから」と好江は言う。

そうだろうかとわたしは思う。確かにボタンを押すくらいできないわけはない。ボタンの存在を失念するのか、いや、なるべく世話をかけたくないと思つうのか。

帰り際、「母さんどこへ行くんでも看護師さんをお呼びだよ。このボタン、わかるでしょ」というと、母はそっぽを向いたまま「だつてわたし歩けるのに」と小さな声で言ったのだ。

「頭の中が混乱しているようだけど、前から兆候あつたの

「何いつてるの、毎日来て世話してくれてるのが好江さんよ」

「あら、そうなの」

大丈夫かなと案じていると、母はもつと驚くことを言い出した。

「みんな来てくれるのに、わたしの両親はなぜ顔を見せたくないのかしら。わたしが入院していることを知らないわけなのよね」

「両親でわたしのお祖父ちゃんとお祖母ちゃんのこと？」

「しっかりしてよ二人ともとくに死んじゃったわよ」

母は黙り込んでしまった。わたしもシヨックでしばらく声が出なかった。そのうち思い直したように母は「わたしどうかしちゃったのね。とうとうこわれちゃったのかな」といった。

そのあとは回線がつながったように平常にもどり、「みんなに迷惑かけてしまった。早く家に帰りたい」と涙ぐんでいる。

午後になると今日も微熱が出て、うたたねのあとまた回線に乱れが現れた。

「トイレに行つておこうか」と声をかけると、目覚めたばかりの虚ろな顔で「お手数掛けますね、すみません」と言った。

「母さんなんでわたしにあやまるの」

かなあ

「わたしは気がつかなかったんだけど。電話でもしつかり話したし。でも、お店のおじさんに聞いたら物忘れは多くなつていたみたいね。八十越せばみんなそうだよって言うていたけど」

好江は毎日多忙らしい。茄子も胡瓜も食べきれないほど実る。

「こんなに作つて、どうして消化してたんだろう。もつたいないから毎日せつせと収穫してお友達に配つたりしてるわ」

十年前までこちらで暮らしていた好江には久々に会う友達との交流も忙しいのであろう。

屋敷内も畑も草はどんどん伸びる。音を上げた好江は夏休みいっぱい、高校生の末娘を呼んで手伝わせていると言った。

「大した時間じゃあないのにバイト料とるのよ」と好江は言うが、これを一人でこなしてきた母に感嘆の言葉はない。

「明日の日曜日わたしが付き添うから、月曜日からお願いますね」と電話を切った。

隣のベッドは母より少し若い、遅しい体つきのおばさんである。ヘルペスで、一日数回の点滴をするが、あといたつて元気で動き回っている。

「あんた娘さん？」六十歳に手の届きそうな娘はちよつと
テレながら肯定する。

おばさんは入院してまだ三日目。痛みから解き放たれた
らもう退屈で仕方がないとぼやく。夏休み中だから毎日孫
達を引き連れて連れ合いが見舞いにくるが、引き上げた後
の佻しさがたまらないと言う。三世帯同居の賑やかな家は
野菜農家で、軽トラックで早朝、市場まで野菜を運ぶのは
自分の仕事だったから、五時には目が覚めてしまうそうだ。

「一日がこんなに長いとは今まで思ったことないわ」

おばさんはわたしに向かつて喋り、母は微笑みながらう
つむいて聞いている。

「お母さん上品なひとだねえ。わたしなんかがさつだから
話しかけちゃあ悪いような気がしてね。でも一日中黙って
いて退屈じゃあないですか」

「わたしは一人暮らしで、慣れていきますから」

おお、ちゃんと通じてる、とわたしは喝采する。

「どうぞ、話しかけてやってください。脳の活性化になり
ますから」

「看護師さんの言うことはそんなに気にしなくてもいい
よ。夜中にトイレに行くことはそうなんべんもあつたわけ
じゃあないし、昼間は時間を見てさあ行きましようと思っ
て行くんだから。何かあつたときに責任をかぶるのがいや
なだけだよ」と言う。「ちゃんと名前も齢も言えるし、本

も読んでおいでる。呆けてなんかいないよ」

好江が持つてきてくれたのだろう、母の部屋にあった婦
人雑誌が枕元にあった。

そういえば今日の母は昨日に比べてまともだと思つた。
畑の管理を好江と孫娘がしてくれていると話したときは
「野菜は生き物だから世話をしてくれねば」と語り、徳や
んにもあげてほしいと言つた。食事も進み、お隣からもら
つた甘夏もわたしと半分ずつ食べた。

普通じゃないの、よかつた。

わたしの子供の頃の話をポツリポツリ、それでも正確に
思い出しながら話していたのに、いざ帰るといふときにな
つて寂しげに言つたのだ。

「あんた帰っちゃうの。そしたら、わたしのお父さんとお
母さんに一度来てくれるように言つてくれる」

「なんなんだろうね、あれは」

「他人の中では気を張っているんだろうな。身内の顔を見
ると緩んだよ、頭んかのねじが」

聞いてもらえる相手は高野しかない。めずらしくわた
しから彼を呼び出した。

ファミレスのハンバーグは大きすぎて半分残した。高野
は手をあげてウエイトレスを呼び、コーヒーのお代わりを
頼んでいる。

「退院の目処はついたのか」

「来週あたりからリハビリに入るらしいわ。熱は出なくな
つたけど血圧はずつと薬が必要なようだから病院へは通う
ことになるだろうけど」

「どうするんだ」

「弟の嫁がいてくれることになった。末っ子がこちらで短
大を受験することにしたらしい。上二人は社会人と大学生
だから手はかからないし、弟もそろそろこちらに帰れそう
だから。母がいてもいなくなつても、家はほつておけない
でしょ」

高野は黙つてわたしの顔を見ている。

「なによ」

「おまえだつたらどうする。おまえがお母さんの立場にな
つたら」

そうか、わたしだってそんなに遠いことではない。

「わたしは誰も見てくれる人いらないから施設にでも入るし
かないな」

いや、その前に一人ぼっちの部屋で倒れたらどうする。
まあわたしは突然いなくなつても困る人はいないのだけ
ら、神の思し召しにまかすことにしよう。

「でも悲しむ者はいるぞ」

「いないよ」

「まずおれが悲しいから、先に逝くな」

二十五年も忘れていてよく言うよ。

「竹村、おまえ昔よりきれいになつたよ。いや魅力的にな
つたと言うべきかな」

「馬鹿なこと言つて。おばあさんをからかうもんじゃあな
いわ」

「ほんとだよ、二十代のおまえはつねに身構えていて、下
手に触ると唾み付かれそうでちよつと怖かつた」

「可愛げがなかつたねえ」

でも恋をしてたんだよ、密かに。わたしは心の中で言う。

「心を許した友達なんていなかったらどう」

「親友はいないわね。でも欲しいとも思わなかつた」

十八歳で家を出た。学生寮から短大に通い、六畳一間の
アパートから会社に通勤した。

誰とも気さくに話し、一緒に遊んでいたが、心は閉じ
ていたのかもしれない。

「一人が好きだったの」

今でも一人が好きかと高野は問う。居心地はいいよとわ
たしは答える。

「寂しくなつたら言え。おれが癒してやる」

「相変わらず調子のいいことを言つてるのね。もう手遅れ
だよ」

母は九月の半ばに退院した。夏の名残はあつたが風はも

う秋の気配を感じさせていた。母の部屋の前に植えられた金木犀が例年と同じ香りを漂わせていた。

「こんなところに金木犀があつたのね」と母は言った。花の名前はすんなり出てくるのに、何年も見続けていたことを忘れていたのか。ひと月以上空けていたとはいえ部屋の調度はかわっていない。すぐに以前の感覚を取り戻すに違いないとわたしは思っていた。なのに母は最初、電灯のスイッチの位置がわからなかった。

「住み慣れたところに帰り、親しい人たちと話すようになれば元のお母さんに戻られるかもしれませんよ」と看護師にも言われていたが、入院前とは歩き方からして明らかに違うのだ。

倒れる二日前には自転車に乗って仏教の法話を聞きに出かけていたというが、いまは庭に下りるのもおそろおそろである。

「ここがどこか分かっていようね」とからかうように聞くと、母は少し驚いた顔で、

「やだ、わたしの家にきまつてるじゃあない」と応えた。安心する。

毎週とはいかないが、わたしはしばしば実家に通った。

好江の軽自動車がないときは玄関のチャイムを鳴らさず、直接母の部屋のガラス戸を外からたたいた。母は座椅子に寄りかかってテレビを見ていることが多い。レースのカー

「だめだわ、鍵がかかっている。わたし鍵ないもん出かけられない」と言った。

「あんたが来てくれたから今日はいい。でもお茶もあげられなくてごめんね」

このごろは台所にも入っちゃいけないと言われていられるらしい。

「食事は好江さんが作ってくれるんでしょ」

「作って運んでくれる、ここへ」

母は誰にも干渉されず自由に行動していたのに、突然入り込んできた好江に束縛されているのが腹立たしいのだから。一人では何もできなくなっている現況が分かっているはずなのに不満なのだ。

「母さん、好江さんを恨んじゃあだめよ。好江さんのほうがもっと大変なんだから」

夫や子供をおいて姑の世話に明け暮れているのだ。ひとりで出歩き、転んで怪我をされたら困るし、火でも使って消し忘れたら危ないと思うのはもっともだ。

「本来ならわたしが母さんの面倒を見るのだけど、一人で生きていくためにも今仕事を辞めるわけにはいかないんだからね」

そうね、と母は小さく言った。

「でもわたし歩けるのよ」

それ以降、母を訪ねるたびにこういう会話になっていく。

テンを少し開けてわたしを見ると、笑顔になって開けてくれた。

「ひさしぶりね、どうしているかと思つた」

「先週も来たじゃあない」

「そうだった？ だめだねえわたし、すぐ忘れちゃう」

毎回同じような会話から始まる。

「からだ動かしてる？ 運動しなくちゃあだめよ」

「草取りしてる」

「草なんかあんまりないでしょ。散歩でもしたら」

しばらくうつぶむいていた母は小さな声で言った。

「外へ出ると好江さんに叱られる」

とぎれとぎれの話でわかつたことは、先日徳やんの店へ行こうとして坂道で転んだらしい。ズボンをまくってみせた膝に救急絆が貼つてあつた。急いでいたわけでもないのに転んだという。それでもお店までいって、おばさんに手当てしてもらつたらしい。

「わたし好江さんには黙っていたの。でもあの人がお店で聞いたみたいで、一人で外へ行かないでっていうの」

「じゃあついていってもらつたら」

「行きたいときには言つてくださいというけど、言いたくない」

「わたし連れて行ってあげようか。今から」

うれしそうに母は玄関まで行つたが、

「好江さんには感謝しなきゃね」と言い、「文句を言つたらばちがあたるわね」とうなずく。

毎回同じ話を繰り返すことが多いが、昨日だけそれさんが来てくれたと話したりして、わたしは「戻ってきている」と安堵していた。

あとで好江に、あれはひと月前のことだと教えられて少々がっかりはしたが。

クリスマスソングの流れる師走の街は、慌ただしいというより浮かれているとしか思えない。イルミネーションに彩られたメイン通りから一本入った路地に紺の暖簾はあつた。白抜きの文字は「みゆき」、あかりの消えた理髪店と薄暗い古道具屋に挟まれた店だ。

ガラスの引き戸をおそろおそろ開けると、小上がりの奥の席で高野が顔を上げた。

「すぐわかつたらう」

昼休みに電話があつた。いい店を見つけたと高野は言った。駅に近いが会社からは反対方向だから誰にも会わないよ、とも言う。見つかって困る付き合いではないが、誤解は避けるべきだ。

「みゆき」という店の名にも気を引かれた。母の名前と同じだから。

「このあいだ隣の古道具屋へ来たときに見つけた。暖簾を

出すのを待つて入ったらかなないんだよ。そこで忘年会兼、おまえの慰労会をしよう。おれは今日そちらに用事があるから帰りに寄るつもりだが」

「わたしも今日ならいいわよ。でもなんですか、わたしの慰労会って」

「まあいいから」

高野は日本酒を飲んでいる。熱いお絞りで冷えた手を温めていると、体が温まるから飲めと盃を出された。

「どうなんだ」母のことである。

「このあいだ好江さんが向こうに帰った二日間、母と一緒にいたの。食事に連れ出したり、お墓参りをしたり。夜は床を並べて寝たわ。わたしそのとき思ったの。母と寝たことなんて、記憶にある限り初めてではないかと」

彼が会社に行った頃も再会してからも、わたしたちはお互い家庭の話などしなかった。母子家庭で齢の離れた弟がいることくらいは話した覚えがある。その弟が東京の近郊に居ることも彼は知っているが父親が違うことは話したのだろうか。

「わたしが七歳のときに母は再婚したの。やがて弟が生まれたけど、いつの間にか義父は家に帰らなくなった」

おとうさんと呼んだ記憶もさだかではない。父母は離れに住み、わたしは母屋で祖父母と暮らした。義父は離れから勤めに行き、離れに帰った。食事は母が母屋の台所から

運んでいた。

「離れに行ってレコードを聞かせてもらったことはあるわ。どこからか幻灯機を借りてきて見せてくれたこともある」それくらいしか思い出はないのだ。

弟が生まれたとき、一番喜んだのは祖父ではなかったか。達夫の名をつけたのも祖父である。

達夫の一歳の誕生日には義父もいた。二歳のときにはもういなかった気がする。

おとうさんどうしたのとわたしは聞いただろうか。いや子供心に聞いてはいけないことに思えて聞かなかったかもしれない。祖父との確執があったらしいと徐々に感じていくのだが。

竹村家の主役は達夫になっていたが、祖母だけは相変わらずわたしを溺愛していた。

「達夫の誕生日を祝うようになってから、祖母が主張してわたしも祝ってもらうようになったのよ。達夫が保育園に通うようになって、母は再び勤めに出るようになったわ」祖父が役員をしていた水利組合の事務に定年まで勤務していた。

わたしは母の給料で高校にも短大にも進めた。

「それなのに母はこのあいだ、わたしが帰るときに涙ぐんで言うのよ。あんたに何にもしてやれなくて、恨まれてもしかたがないのにこんなによくしてくれてって。なんだろう

うね」

わたしは喋り続け、高野は手酌で時間をかけて飲んでいく。

「おれのお袋は継母だよ。おれが赤ん坊のときに来て育ててくれた。自分も子供を産んだけど隔たりなく接してくれたね。悪いことをするとひっぱたかれたしね」

「今もお元氣なんですよ」

「元氣、げんき。女房と張り合って、見えないバトルを繰り返している。双方から愚痴を聞かされるおれが一番の被害者だよ」

幾つだっけ、八十五かなあと高野は指を折っている。

ぶり大根が湯気をたてて運ばれる。上にのった刻み生姜の黄色が美しい。少しずつ出される料理がおいしい。ピリ辛こんにゃく、たたき牛蒡、ピーマンの味噌炒め。変哲もない家庭料理なのに味付けが合うのだ。

「だろう」と得意げに高野が言う。

「おれたち味の好みが違うな。結婚すればよかったかな」

「あまいなあ。わたし料理は得意じゃありません」

こんな軽口がいまのわたしを癒してくれる。

縁談はいくつかあり、好意を持った人も何人かあった。

高野もその一人だがいずれも結婚までには至らなかった。わたしが「結婚」から逃げていた感もある。わたしは怖かったのだ。

母は二度結婚した。どちらも親の選んだ人である。結局

幸せにはなれなかった。

「幸せだったか不幸だったかなんてお母さん本人に聞かなくちゃあわからんだろう」

「だって写真もないのよ、父の」

「結果がどうであれ、新婚生活があり、子供も授かった。

幸せなひと時があったはずだよ、きっと」

そうかもしれない。でもなんにも語らない母はやはり不幸だったにちがいない。

「おまえの頭の中はいつまでたっても乙女だな」

去年までは接待役を勤めていた母はテーブルの端に座って黙って料理をつまんでいる。買ってきた黒豆は、見事な色艶だが母の口には合っていないだろう。それでも母は一粒ずつゆっくりつまみ口に運ぶ。久しぶりに顔の揃った達夫のファミリーは話が弾んでいる。わたしは母の皿に大皿のお造りを取り分けてやる。黙々と食べて、「ごちそうさま」と母は自室に引き上げていった。

「正月明けからおばあちゃん、デイ・サービスに通うことになったから」好江が言った。

「まだ週に一日だけど、気分転換になると思うから」

最近は何となく閉じこもり状態らしい。

「寒いせいもあるけどね。今日はお天気がいいから外のほ

うが気持ちがいいよと言っても無視してる」

エアコンやテレビのリモコンは操作できるし、新聞もしつかり目を通していているのに、突然、「好江さん、今わたしを誰か訪ねてきたでしょう」と聞く。

「誰も来ないと言っても、隠さないで教えて。まるでわたしが意地悪してるみたいじゃあない。おかあさんは呆けた振りをしてるんじゃないかってときどき思っちゃう」

好江も疲れている。

就職してからあまり実家に帰らなかったわたしが、年越しだけは家族が顔を揃えていた。達夫が結婚するときには離れは建て直し、子供たちが育つにつれ母屋もリフォームされていたから、わたしの部屋はとつくになくなっていた。わたしは座敷に泊まり、すっかりお客さんである。

達夫一家が家を出て、母一人になった初めての正月、わたしは新聞広告で今住んでいるマンションの建築を知った。四月完成、入居者募集中の文字が躍った。

駅に近いから会社まで電車で一時間、実家までマイカーなら三十分くらいだ。そろそろ自分の老後も考えなくてはならない時期が来ていた。

「いいじゃあないか。いざという時に姉さんが近くにいてくれたら、ほくも安心だし」

達夫はそう言つて、女一人じゃあなめられると何度も一

か、もともと愛情がなかったからだとはくは思うね」

家には写真の一枚もない。祖父母の話題にも上ったことのない人だが、実子の達夫にもない思い出がわたしにはある。癖のある髪がいつも額を隠していた。レコード盤をひっくりかえし、静かに針を下ろすと首を振って髪をかきあげる姿が好きだった。それでもわたしには、離れのおじさんで、達ちゃんのおとうさんでしかなかった。そして母も達ちゃんのものだと思っていた気がする。

学校の行事には必ず母が来て、「きれいなお母さんだね」と友達に言われるのはうれしかったが、「おまえはお父さん似だね、かわいそうに」と何気なく言った祖母の言葉に傷ついたりもした。

休暇が終わり、皆が帰っていった頃から母の認知症は進んでいったように見える。訪ねたわたしに母は声をひそめて聞いたりする。

「ねえ、向こうの部屋に誰かいるの？」

「好江さんがいるじゃない」

「いつ来たの」

「母さんが退院してからずっと」

「そうだった」

部屋の隅にいくつかの紙袋や風呂敷包みがおいてある。

先週、突然母はタンスのものを引っ張り出して荷造りを

緒に足を運んでくれた。親孝行などと格好いいことを言うておきながら、わたしはあまり顔をださず、母も一度も訪ねてこなかった。だが、やはり正解であったと今は思う。

「ことよつたらこちらに帰れるかもしれないよ、ほくも早くても六月くらいかなあ」

転勤希望を出したと達夫は言う。とりあえず好江と末娘が三月までに引越しすることになっている。

「ぼくは長男だからな。家を守れ、母を守れと祖父さんに言われ続けて育ったから気にはなっていたんだ」

「好江さんがよくやってってくれるわ」

「好江には苦労かけてるよ、愚痴も聞かされるけど。あいつは長男の嫁の心得を教え込まれて育たなかったからなあ。でもがんばってってくれる」

母は早々と床についたらしい。「おかあさんお風呂どうするの」と好江の甲高い声が聞こえる。

その晩久しぶりに達夫と昔話をした。

「親父さんが家を出された理由を姉さん知ってる？」

「お祖父ちゃんとうまくいかなかったからじゃあないの」

「女がいたらしいよ。だって夫婦のほうがうまくいってたら、二人で家を出りゃいい」

「あんたそれ、母さんに聞いたの」

「そんなこと聞ける雰囲気なかったじゃん。あんなにきれいさっぱり親父さんの形跡を消したんだぜ。憎んでいたはじめたらしい。そして驚いた好江に言ったのだ。」

「いつまでもあなたにお世話をかけられませんか、わたしは家に帰ります」

「おかあさん、ここが家なのよ。どこにも帰るとこなんてないのよ。それともおねえさんの所に行くんですか」

「いえ、あの子にも迷惑はかけられないわ」

おかあさんはどこへ行くつもりだったんでしょうね。わたしが気に入らないんだわ。と好江は憤慨していた。

一緒に暮らしている頃から嫁、姑の葛藤があったのだから。プライドの高いひとだったからわたしも気を遣って接してきたつもりだけど、ちよつと疲れたわ」と好江は珍しく不満を口にした。

「いえ、おねえさん謝らないでください。わたしも自分の親を見てきてからわかっているのよ。仕方がないことだと思っし、やがてはわが身ですもんね。でも可愛げがない」

母は認定度が上がって、週五日デイ・サービスに行くことになったという。

「福祉事務所から面接にいらしたのよ。したらおかあさんシヤキつとして名前も生年月日もちゃんと覚えて、字も書いたのよ。不都合なことを聞かれると貝のように口を閉じて、聞こえない振りをしたりするの」

毎日迎える車で福祉の家「ももの木園」に通っているの

に、母はそのことをうまく伝えられなくなっていた。
「あんた丁度いい日に来たねえ。わたし昨日まで仕事で遠くに行っていたからせつかく来てくれても会えなかったのよ」

「仕事じゃあなくて、ももの木園でしょう」

「それはどこにあるの」

行くたびにこういう会話から始まり、帰りには、

「わたしも早く自分の家に帰りたい」と言うのだ。

もう母に会うのが辛いと高野に漏らしたら、「聞くだけでいいから聞いてやれ」と言われた。

三月の末、好江が引越しの準備で帰るといっているので、わたしは母をマンションに連れてきた。

はじめて訪れた娘の部屋である。もう少し感動があるかと思っただけ、母は黙って並べられたスリッパを履き、短い廊下をわたしの後に続き、言われるままにソファーに座った。

「殺風景でしょ。物はあまり持たない主義なの」

「ふん」

買ってきた食材を冷蔵庫に収めて居間に戻ると、母はソファーの上で微動だにしていない。

「楽にしてよ。洗濯物入れたら夕飯作るから」

「ふん」

踏切がなるたびに母は線路沿いに駅に向かう背中を思い出し、だんだん近づいてくる姿が眼に浮かぶのだろうか。遠い目をしてガラス戸に顔をつけている。

結局わたしに分かったのは、母がユウキさんを心から恋しく想っているらしいということだ。

妄想と思うにはあまりにもまざまざとした記憶である。

話は発展しないまま、同じような思い出をつぶやくだけで二泊三日の母子二人の同居生活は終わった。

「恋人がいたんだ。踏切の音が古い思い出をひきだしたということか」

母の思いがけない告白を達夫や好江には伝えず、わたしは高野にだけ話した。

「結婚前のことかな」

「違うとおもう」

心当たりがあるといえればひとつだけである。
わたしは五歳くらいだったろう。母の姿が家から消えた時期があった。私は当然「母さんはどうしたの」と聞いただろう。祖母は「お仕事で遠くに行った」と答えたと思う。

それでわたしは納得したにちがいない。母との接触は少なく、わたしは朝から晩まで祖母にくっついていたから、すぐに母のいない生活に馴染んでいったのだろう。
「母は孤独だったのね。夫を看取り、やっと子供と一緒に

無表情な母が突然生気を吹き返したのは、わたしがヴェランダへのガラス戸を開けたときだった。母は弾かれたように立ち上がりヴェランダへ駆け出たのである。

カンカンカンと踏切の音がして立ち並ぶ屋根の向こうを電車が走り抜けて行くところだった。

「帰ってくる」

「誰が」

「ユウキさん」

その夜わたしたちはテレビもつけず、ユウキさんの話をした。母の話は切れ切れで要領を得ないのだが聞き直したり、質問したりすると黙ってしまうので「ウン、ウンそれで」とひたすら聞いていた。

「ユウキさんは結核だったの」

「結核だったのはわたしのお父さんじゃあないの」

「ユウキさん」

切れ切れをつなぎ合わせてみると、ユウキさんは結核の手術で肋骨を何本か切ったのだろう、片方の肩が下がってからだが傾いていたらしい。

住んでいたのはクリーニングやさんの二階で線路沿いにあった。駅から三つ目の踏切が家の前であって……

町の名前も駅名も母はきちんと言った。しかし「どうしてそんなところにいたの、いつごろのことなの」というわたしの疑問には答えてくれなかった。

暮らせると思ってた帰ってきたのに、わたしはすっかりおばあちゃん子になってたから」

「でも、いい思い出があったみたいだから、よかつたじゃあないか」

あれほど熱く語った思い出を、その後母は一度も口にしなかった。

わたしが訪ねれば、「あら久しぶりね」で始まり、「昨日まで留守にしていたから、よかつたわ今日で。会えないところだった」と喜ぶのである。

そして極めつけの会話は養父母のことになる。

「わたしのお父さんとお母さんはどこにいるのかねえ。帰つたらうちにいないのよ」

「とつくに死んじゃったわよ」

「わたしに知らせしてくれた？」

「なに言ってるのよ。母さんが一人とも見送ったじゃない。考えてみて。母さんが八十を超えているのに、おじいちゃんやおばあちゃんが元気でいるわけないでしょ」

繰り返される話題にわたしは少し苛立ちはじめた。

「そうね」と悲しげにうつむいているから、強く言ったことを後悔し始めると、「でも出かける前はいたのよ」と話を蒸し返す。

母には疑問がいつぱいある。まず現在の状況がわからない。記憶のきれぎれが、妄想の衣を纏って往来する。思い

出の「こまが湧き上がるように現れて渦を巻く。一日中「なぜなの」「どうなってるの」と考えているのだろう。

自分のことばかり話して、娘のわたしのことはなんの興味もないのかね、と高野に愚痴る。

「おまえにしか話せないんだろう、ひたすら聞いてやれ。でも娘だとすぐわかるんだから、いいじゃあないか」

六月はじめの蒸し暑い日、母は「ももの木園」で突然倒れた。昼食のテーブルから立ち上がった直後、床に崩れ落ちたのである。

「脳の血管が切れたんですって」

好江が病院から電話してきた。

母は三日ほど眠り続け、そのまま逝った。

「母さんは自尊心の強い人だったなあ」と達夫は言う。

「あんなになっても虚栄を張っていたと思うよ」

葬儀に参列してくれた友人、知人たちが言っていた。

「深雪さんは毅然としていて、隙のないひと」

退院したあと、次々と訪ねてくれた人たちは「あの深雪さんが痛々しくて足が遠のいた」と語った。母も見られたくなかったのだと思う。好江が杖を買ったり、手押しのリバーカーを用意しても、使おうとしなかった。

クトメール、それを見て好江が葬儀の通知をしたという最近の年賀状だけである。日記や手帳など一切見当たらない。読むことも、書くこともいとわない人だったのに。いつごろから母は死の準備をしていたのだろうか。

写真はあった。古いアルバムが一冊、あとは封筒に整理されて、きれいな菓子缶の缶に入っていた。アルバムはわたしも子供のころから見ている。幼い母や、まだ若い祖父母の変色した写真が貼ってある。小学校の集合写真、袴姿の女学生、教え子と並んだ母は珍しく洋服を着ている。剥がされた後がいくつもあり、これはわたしが見たときからそうなっていたと思う。あれからアルバムは貼り足した形跡は見られない。菓子缶の缶に入っていたのは水利事務所に勤め始めてからのもので枚数は多くはない。母は写真嫌いだったのだろうか。

アルバムから菓子缶のあいだに、母は二度結婚して、二人の子供を産んだ。子供の写真はそれぞれのアルバムに整理して持たせてくれている。

わたしの部屋がシンプルなのは、わたしが物に執着しないでボンボン捨てるからだ。だが、母は包み紙や縛ってあった紐まで取っておきたいほうだったのに、想い出は潔く捨てたのか。

着物だけは祖母の残したものでしまいこまれていた。押入れのブリキの衣装缶をあけると、樟脳の臭いが鼻をつ

「おねえさんには手を引かれても、わたしではだめだった」と好江。

達夫は言う。「母さんは子供に対してもクールだった」

「あんまり叱られなかったよ。祖父さんにはしょっちゅう怒られていたけど、母さんは冷めた目でじっとみただけ。

軽蔑されている気がしていやだったね」

「そうなの？ わたしはむしろ悲しい目で見られていた気がする」

だから母を悲しませないようにいい子でいようと思っていた。祖母にはわがままばかり言っていたのに、母には遠慮があった。そして母もわたしに気をつかっていたと思う。

忌が明けてから好江と二人で母の部屋を整理した。

この家で八十年も暮らしてきたのに、自室に残されたものは少ない。

「おねえさん欲しいものがあつたらなんでも持っていってね」と好江は言うが、服もバッグも使い古したものばかりで、最近では何も買っていないようだった。宝石など集める趣味も買う余裕もなかったのだろう、おもちゃに近いアクセサリーが少しあるだけだった。ルビーの指輪と珊瑚のブローチはとつくにわたしが譲り受けている。

タンスの中も小机の引出しもきれいに整頓されていた。不審に思ったのは手紙類が残っていないことである。状態差しにあるのは役所関係からきた通知書とわずかなダイレ

いた。手を通す機会はなくなっていただろうが、虫除けだけは手抜きなく続けていたらしい。

畳紙に包まれた着物や帯を上から少しずつ出していくと、間に小さな丸いものが見えた。コンバクトであった。赤いセルロイドの上に、いぶし銀の唐草模様が盛りあがっている。

こんなところに、なぜ。

「お茶にしましょう」冷えた麦茶を盆にのせて好江が襖をあげ、わたしはコンバクトをエプロンのポケットに落とし、落とした。

線路沿いの家を見に行こうと決めたとき、高野は同行すると言った。

車窓からは、防波堤の向こうにかすかに波打つ午後海が見えたが、降り立った駅は町並みの中で、潮の匂いもしなかった。改札を出て戸惑う。線路に沿った道は一本ではないのだ。

あてずっぽうに、駅裏を来た方角に戻る道を選んだ。

歩き始めてすぐに気がついた。踏切はないのだ。次の駅まで線路は高架の上を走っている。反対方向であったかと不安を抱えながら歩を進めると、交差点の角にその家はあった。

「結城クリーニング」色あせた文字が読めた。高野と視線

を合わせる。視線の先で声にはならない「あった」がほじけた。

ガラス戸の中にカウンターが見える。人影はない。二人ともぼんやり突っ立っていた。再び視線が絡み、こんどは「どうする」と無声で語る。

そのときガラス戸が開き、母と同年代の老女が如雨露を手に出てきた。彼女は立っているわたしたちに気がつき「いらっしやいませ、ちょっとお待ちくださいね」と言って、店先のプラントナーに水をやり始めた。

「あの、客ではないんです」

老女は腰を伸ばしてわたしを見る。

「ちょっとお聞きしたいことがあって」

プラントナーの中には色とりどりのペチュニア。「きれいですね」と高野が言って、老女はちよつとだけ笑顔を見せる。「かわいがってやるだけでこの花は季節をまたいで咲いてくれるよ」

咲き誇る花を持ち上げ、根元に丁寧に水をかける。傷んだ花を摘み取ってから「それで、何を」と聞く体勢に入った。

「わたしの母は竹村深雪といます。ふた月前に亡くなりました」

「あなた……」と言って、老女はわたしの顔をじつと見てから「まあお入り」と招いた。

家の中はひっそりしている。家族はいないのだろうか。

「あなたが深雪さんの娘さんかね」

彼女はもう一度わたしを見つめてから「亡くなったかね」とつぶやいた。

隣にいる高野をわたしは古い友人だと紹介した。

わたしは母の晩年を語り、ユウキさんがどういう人だったかをとうとう教えてくれなかったと告げた。

「ここにお世話になってたんですよね」

「弟と、この二階においでたよ」

弟は結城宗吉、わたしは姉のたきだと彼女は名乗った。

「宗吉さんはいま」

「死んだよ。病続きの短い人生だった。もう四十何年になるかなあ」

とつとつとたきさんはわたしの疑問に答えてくれる。

「宗吉は結核になって学校をやめた。手術して一応治ったけど、力仕事はできなかったねえ」

土建会社の会計事務に職を得た宗吉さんはそこで母と出会った。たきさんの話は行きつ戻りつ、時には脱線しながら続く。

「お金がなくなったのよ」

宗吉さんは事務所の二階に寝泊りしていた。休日あけ、事務所の金庫から週末に入れたはずのお金がなくなっていた。鍵の在りかとダイヤル番号はごくわずかの人しか知らないし、常に管理していたのは宗吉さんである。

「疑われたんよ、宗吉は」

もちろん宗吉さんは潔白を主張する。だが管理不十分であったと自分を責めて会社をやめたしまったという。

「ばかだよねえ。あの子は疑われたことに相当傷ついていた。あんなに早くやめることはなかったんだよ。お金の行方が分かった時にはもう荷物まとめて、うちに帰ってきちゃってただだから。社長さん自らが、ぼくの入れたつもりが思い違いだつたからと謝りにこられたけど、宗吉は結構頑固だから」

宗吉さんが会社に帰らないと決めたのにはまだ理由がある。

「宗吉は知ってたんだよ、確かに社長が金庫にお金を入れたのを。社長は誰かを庇っていたのだからね。親族で成り立っている会社だから、自分の将来に希望が見えなくなつたんだろう」

理由はもうひとつあった。これは大事だよとたきさんは座りなおす。

「深雪さんを好きになつてしまったから」

十歳近くも年上で子供もいるひとを、病弱で半人前の自分が好きになつてどうする。毎日そばにいて、会話を交わすだけで幸せだったのがだんだん苦しくなつてきていた。

「逃げたんだね、なにかもから」

クリーニング店はたきさんが継ぐことに決まっていた。

やがては店で働いている腕のいい職人さんを婚に迎えることも決まっていた。

「やつと宗吉の仕事が決まり、通勤を始めた頃だから、ひと月ほどたつていたかねえ。突然訪ねてきたんだよ、深雪さんが」

まだ職場から帰らない宗吉さんを、母はずつと彼の部屋で待っていて、そのまま住み着いてしまったという。

「母はそのつもりで家出してきたんでしょか」

「さあ、どうかねえ。布で作った手提げ袋ひとつ持っていただけだったよ」

「おうちの方は迷惑だったでしょう」

「父にはいろいろ話したみたいだったけど、わたしたちは突然お嫁さんが来たくらいにおもつてたかな。昼間は店番などとしてくれて、台所も母とわたしと三人で賑やかにやっていたけど、身の上話は出なかったねえ」

宗吉の笑い声が久しぶりに聞けることだけでうれしかったとたきさんは言う。

「これ、見覚えありませんか」

わたしはバッグから母のコンパクトを出した。

「あるよ。休みの日に二人で出かけて、小さな姫鏡台とこれを買ってきた。うれしそうだったね深雪さん。口数も少なく感情をあまり見せないひとだったけど、あの笑顔はきれいだつた」

「姫鏡台は丸い鏡の朱塗りでしたか？」

「そうそう、赤い」

その鏡台を、母はわたしが短大に入って家を出るときにくれた。何にも買ってやれないからと言って。学生寮では本箱の上に置いた。何度かの引越しを共にして、朱は色あせ、鏡の縁には黒いしみが現れはじめたので、わたしはそれをマンションに移るとき捨てた。

知っていたなら捨てなかつたと思つたがもう遅い。

母が出奔したあとの我が家はどうかだったのだろうか。幼いわたしに記憶はない。

「ご両親は知ってらしたんじゃあないかな」とたきさんが言つて驚かす。

「深雪さんが知らせたのか、しばらくして身の回り品を詰めたみかん箱が届いたのよ、おうちから。お父さんからも、父のところは達筆の手紙がきていたよ。何が書いてあつたかわたしは聞かされなかつたけどね」

あの祖父母がどうして許したのか。それからたきさんはもつと驚かせる。

「深雪さんがいたのは一年ちよつとだったよ。あのひとは帰る時期を決めていたから。結婚なんて最初からあきらめていたんだろうね」

「どうして帰つたんですか」

「子供さんが小学校にあがるから」

かけている今の高野も悪くはないとわたしは思つたりする。

時間も確かめずホームに上がった。家並みの向こうに夏の陽が落ちていく。

人生にも日没は訪れる。わたしの日没に夕映えは残せるのだろうか。

反対電車が先にホームに入り、高野は「おい、これに乗ろうか」という。行き先に温泉地があるのだ。

「温泉に入つて、新鮮な魚を食べて一泊する。どうだ」

「妻帯者が何を言うか」

長い夏の日が赤く染まつて暮れていく。

クリーニング店は息子の代になり、仕事場を新しく他所に移したから、いまここでは取次ぎだけをしている。たきさんの夫、腕のいい職人さんも暮会所で時間をつぶす毎日だという。

結城家を辞し、線路沿いを歩きながら高野が言った。「お母さんは記憶の壺からあの一年をときとき取り出して心をあたためていたんだろうなあ」

おぼろになつた記憶に、踏切の音がスイッチとなつた。「よかつたわ、母にも熱い想い出があつて」

誰もが口を揃えて言う「冷静で誇り高きおんな」にも情熱に身をゆだね、奔放に走つたときがあつたのだ。断ち切つた恋が母の人生を支えていたのか。

少しうらやましくもある。

「おれたちもなんとかなつておけばよかつたかな」

「なんとかつて、なによ」

「なんとかは、なんとかだよ」

「なんとかがなかつたから、わたしたち今こういう付き合いができてるんでしょ」

「まあそうだ」

高野との再会がなかつたら、わたしの記憶の壺に高野はどんな形で残っていたのだろうか。時々取り出すのはシャープで、精悍な若者であるう。全身丸みをおびて、老眼鏡を

夜光の時計 八覚正大

定時制高校生たちの姿がここに躍動している！
それを見つめる教師のまなざし、作家の眼
彼らとの苦闘と押して、彼らに真の光を当てた
教育現場白書 1600円(本体)

新読書社 TEL03-3814-6791

「文芸中部」86号より転載



朝岡明美

あさおか あけみ

愛知県生まれ
愛知県立西尾高校卒業
2003 文化センターで小説作りを学ぶ

07 「文芸中部」同人
中部ペンクラブ会員

空の通信

北川朱実

1

「おかえり。夕飯できてるよ」

「……」

「さっき、友だちから電話あったよ」

「……」

何を話しかけてもタエの返事はない。仕事を終えて帰宅すると眼を大きく見開き、息を詰め、玄関からまっすぐ廊下を走ってトイレを覗く。風呂場のガラス戸を力まかせにあける。下駄箱をあけて靴の確認をする。この三つの行為をタエは六歳の時から、まるで遺伝子に組み込まれたかの

「和子おばちゃんはいえへいきなさい」と書かれたメモが一枚あった。

暗くなっても帰ってこない母親を待ちながら、タエは、食べ残したパンの白いところをむしって、つばでやわらかくして手でこねた。人形を作り、うさぎを作り、魚を作った。それから、泣きながら家の中を歩き回った。最初にトイレを覗き、風呂場へ行き、それから、母親がいつも履いている靴を捜して、下駄箱をあけた。帰らない母を捜すその行為は以後、タエの日課となった。

陽子はこの二つ違いの妹だった。タエは陽子の初めての子供だったが、予定日を十日過ぎても産まれる心配がなかったため、入院となり、陣痛促進剤を打たれた。陣痛は一昼夜続いたが、赤ん坊は頭だけを見せて、いっこうに出てこなかった。

「吸引しましょう」

「医者はおわただしく言った。」

「姉ちゃん、子供の顔はやっぱ丸いほうがいいね」

ひょうたんみたいな頭がくびれて出てきた赤ん坊を見て、陽子は出産の苦しみをすっかり忘れたかのように笑った。

三千グラムと、充分に健康な体重で生まれたはずのタエは、けれども一歳半になっても歩くことができなかった。つかまり立ちをしても、クニヤリと膝から力が抜けてくず

ように、一日も欠かさずに繰り返す。
いなくなった母親を捜しているのだ。

タエの母陽子が突然姿を消したのは、タエが小学校に入學して半年が過ぎたころだった。

「おかあさん、ただいまア」

アパートの上がりがまちに、ランドセルを放って、居間に走った。パートを終えた母陽子が、いつもおやつを用意して待っていてくれるのだ。

けれどもその日、母親の姿はなかった。食卓の上に、いつもより多くのビスケットとレーズンパンが置いてあり、

折れてしまうのだ。何か変だ、成長が人並みでないと言子
が悩みはじめた頃、やっと歩き出したが、ホッとする間もなく、今度は、他の子よりも言葉が遅いことに気がついた。
三歳になっても単語しか言えなかった。

「ミカン、たべる」とは言えず、「ミカン、ミカン」「ミズ、ミズ」といった具合だった。

陽子は、勤め先の中古車販売会社から夜遅く帰ってくる夫を待って、毎晩タエの話をした。けれども夫は、原因は陽子の接し方にあるような物言いをし、仕事で疲れているのか、話の途中で眠ってしまうのだった。「重度ではない、軽い精薄ですな」医者にそう言われた日から、陽子の心は重くふさがっていった。くる日もくる日もタエのことで激しく言い争う日々が続いたある日、突然夫から離婚を切り出された。「疲れた」夫はそうつぶやいて黙った。

陽子は、何があっても自分が育てると決心して、五歳になつたタエと二人で暮らし始めたのだった。

「担任の先生がね、このままだとタエがかわいそうだって言うの。勉強が全然ついていけないし、話すこともわからないから、なかよし学級に入れたほうがいいって」

ある日、めずらしく陽子から電話があった。声は沈んでいた。

「タエみたいに知恵の遅れている子は、クラスでいじめに

「あいやすいんだって」

「そのいじめがないように指導するのが先生の仕事じゃないの！」

私は思わず声を荒げた。

「きつと、タエのことが面倒なのかもしれない。思うようにならないと、大声で泣きわめくから」

タエにとつて、同じような知能の子ばかりが集まった特別クラスで、半分遊びながらでもいいから過ごせたら、そのほうがいいかもしれないね、という話をして電話を切った。その直後の失踪だった。夫と離婚して一年が経っていた。

いつもタエのことばかりを考えていたはずの陽子に、何があつたのか。それはタエを置き去りにしなければならぬほどのことだったのか。体のすみからすみまでCTを撮っても、人の悲しみなどわからないように、陽子の思いはわからなかつた。親戚や、バイト先の知り合いなど八方向を尽して捜したけれど、行方はわからなかつた。

三年後、一本の電話が警察から入った。タイの首都バンコク郊外の水上マーケットの運河で女性の水死体が発見された。所持していたバスケットからその死体が陽子だと判明したということだった。

そのことを、タエには知らせなかつた。

タエを引き取つて、十二年が過ぎた。タエは、小学校も

中学校も特別クラスで勉強をした。人並みに高校生活を送

らせてやりたくて、中学を卒業後、職業訓練校をすすめる担任の言葉を振り切つて、知能障害を持つ生徒をも受け入れる高校に通わせた。

「おばちゃん、私、就職できそうだよ」

高校卒業を一月後にひかえた日、タエは、細い目をキラキラ輝かせ、大きな声で言った。学校の紹介で、電子部品会社の下請け工場の、携帯を箱詰めする仕事に採用になったのだ。

さつそく担任にお礼の電話を入れると、

「障害のある人を採用すると、市から会社に補助金が出ますからね」

あつさり言うのだった。

「ねえ、おかあさん。バナナの木つて、かしこいんだよ。

知つてた？」

夏休みも終りの頃だった。試すような口ぶりで息子の健太が言う。

「台風が来ると、自分からあの大きな葉っぱをバラバラに裂くんだった」

「え、自分から？ どうしてそんなことをするの？」

「あのね、バラバラに裂いて、その間から風を逃がして抵抗をなくすの。幹が折れないように」

慣れない言葉を口にしながら、小学生の健太は得意気だ。

「自分から大けがをして、命を守るんだよ」

「それ、学校の本に書いてあつたの？」

「ちがうよ。タエさんが教えてくれたの」

「タエが……」

「そう、タエさんね、木とか花のことに詳しいんだよ」

人より知恵が遅れているはずのタエが、そんなことを知っていると聞いて、驚いたのだった。

今年の正月には、

「タエさんがお年玉くれたよ」

中学生の周太が、うれしそうな顔をして二階から降りてきた。

「あら、よかつたねえ。お礼を言いなさいよ」

「うん、それがね、お年玉と一緒にバナナの木の写真が袋に入つてたの。なんでだろうと思つて……」

周太は袋の中から一枚の写真を取り出した。見ると、少しピンボケだけど、確かにバナナの木だ。どこかの植物園で写したもののなか、回りにうっそうと樹木が繁っている。

タエがいると、食卓が、異邦人が入り込んだように静まり返り、ぎくしゃくした空気に包まれた。

「わたし、これ大好き」

今日もかん高い声を上げて、タエは鶏のカラ揚げをいく

つもいくつも、むさぼり食べた。

「野菜も食べなきゃね」

何度言つても、タエはカラ揚げばかりを食べ、そのあとみそ汁だけを飲み、野菜だけを食べるのだ。肉を食べ、野菜を食べ、みそ汁を吸い、次に冷やっこというふう交互につつとということができない。一つの行動に他のことを、臨機応変に組み入れることができないのだ。

「そういう能力に欠けています」

いつだったか医師が教えてくれた。

タエが食卓にいる間じゅう、家族の神経が彼女にばかり集中して落ち着かないが、食べ終わって、口のまわりを油で光らせてタエが席を立つと、それまで無口だった周太や健太が俄然元氣を取り返す。

「何も変な眼で見ることはないさ。あれでいて、タエはけっこうしっかりしているところもあるんだから」

ふだんは無口な夫の隆一が、新聞から顔を上げて言った。「さあ、さあ、もう十時だよ。周太、早くお風呂に入つてよ」夕食後、ソファに寝ころがってくだくだとテレビを見て、いつまでも風呂に入らない周太に言ったその時、

「わたしと一緒に入る？ アハハハ。冗談。冗談」

自分ひとりが面白がつて大笑いして、タエは二階へ上がつていった。周太は、いつまでもムツとした顔をして、動こうとしない。

「ちょっと鈍感なんだなア。生まれつきだから仕方ないさ」
夫は、周太に聞かせるように言った。タエにとつて、冗談だろうが言っていることとよくないことを区別することは、困難なことだった。

夕方の四時だった。そろそろ食事の支度にとりかかろうと立ち上がったら、ガラガラと玄関が開いて、タエが帰ってきた。

「あら、今日は仕事早く終わったの？」

「そう。仕事がないから、明日から三日間休みだつて言われたの」

「臨時休業？ いいねえ、ゆつくりできて」

「そう。わたしだけが休みな。他の人たちはみんな出勤だよ」

タエはあっけらかんと言った。そういうえば最近、携帯の箱詰めではなく、床掃除やトイレ掃除ばかりしているという。

夜、夫と二人きりになった時、思わずため息をついた。

「要は、タエは使い走り。だから突然明日は休みって言われるのよ」

「まあ、会社としても、毎日掃除婦は必要ないだろうし。

クビにならないだけましかもしれないよ」

「けど、仕事が忙しくなると、土曜だろうが日曜だろうが

だけを出していた。顔は青白く、少し口をあけている。口のまわりが腫れ、閉じたまぶたの下と、右頬に血がにじんでいる。短い眉毛と長いまつげが対照的だ。

タエは、一人で会社の非常階段を昇って屋上に出て、そこから誤って落下したのだった。

医者はシーツをめくった。黄色のワンピースはあちこち破れ、萎れた花びらのように体にはりついている。私はひんやりした太い腕に触れ、胸の上に組み合わされた手に触れた。まだ硬直はきていないようだったが、力を失った変にやわらかな肌ざわりだ。うっすらとあいた口は、今にも声をあげて笑い出しそうだ。

「屋上の金網にもたれかかって落下したようですが、植え込みの中に落ちたから、それほど傷がつかなかったし、血も流れませんでした……」

医者は言う。

よく見るとタエは長いまつげの奥でほんの少し眼をあけている。このまま閉じたら、二度と目覚められないとばかりに。

太い腕や首やふくらんだ胸の張りつめた皮膚が、すうすうと、どこまでも冷えていく気配がする。スキップすると耳の後ろをくすぐった長い髪も、くるくる回ると、裾が傘のようにふくらんだお気に入りワンピースも、タエを守ってはくれなかった。

来てくれて言うのよ。勝手なんだから」

納得がいかない気持ちだったけれど、そんな時でも、

「ハイイ、わかりました」と素直に明るく返事をして会社へ向うタエを思い出して、話を打ち切った。

「根が素直でやさしいから会社でも使いやすんだよ」

夫はそう言うけれど、やさしいからとは少し違う気がした。

2

タエが会社の屋上から転落して、市民病院に運ばれたという電話が入ったのは、七月の終り、夕食の準備をしているときだった。

「急いで来て下さい。もしもし？ もしもし？」

電話の向こうの、かん高い声を耳にしながら、何か大きな塊が喉に詰まったようで、声が出ない。出したのかもしれないが、言葉にならない。突然目に黒い膜がかぶさったように、まわりが暗くなった。

夫と二人で病院に駆けつけると、タエは、病室ではなく、地下の霊安室にいた。ボイラー室の隣の、ひどく冷えたコンクリートの壁に囲まれた十畳ほどの部屋だった。天井に天使の絵が貼られ、壁ぎわに小さな木製の祭壇がある。

タエはストレッチャーの上で白いシーツにおおわれ、顔

「今朝、ほんとうに今朝、ごはんを二杯おかわりして、おかずも全部食べて出かけたんです！」

ふいに喉から大きな声が飛び出た。

「外傷はそれほどありませんが、後頭部が……」

医者は声を落とした。

「ごはんを食べたあと、冷蔵庫からバナナを一本出して食べました。それから、それから夕食は焼肉がいて」

言葉が止めようもなく飛び出してくる。

「もういい。なにも言わなくていい」

夫は私の肩を抱いた。そのあとのことは憶えていない。

突然目の前が暗くなって、そのまましゃがみ込んだ。

3

「誰にも話したことがないけれど、私、タエがいなくなることを願ったことがあった」

タエの部屋に座り込んだまま、夫に言った。

「それ、いつの頃のこと？」

「タエが中学生になった時。他の同級生が、みな大人っぽくなって活き活きして見えて……。将来、タエが結婚して子供を産んで、人並みの家庭を持てるはずがないと思つた。私たちはいずれ死ぬでしょ。したらどうやって生きていくんだろうって考え込んだ。でも、本当は心の

底で、タエのことを厄介者扱いしていたのかもしれない。それほど手がかったわけでもないのにね」

窓の向こうをうす桃色の雲が流れていく。「それから、どんな死に方がいいかなって考えたの。できるだけ苦しまないほうがいいから、やっぱり睡眠薬かなって。でも、タエは油っこいものが好きで、若いのに血圧が百八十もあったから、脳いっ血なら一瞬だな、なんて思った。車で街を走っていて、葬儀会場があると、通り過ぎる瞬間、いつも中をのぞいた。外国のホテルのようなまあたらしい建物に、きらびやかに灯りがついて通夜が行われているのを、眼を凝らして見た。

それから一瞬でもそんなふうにも思った自分が嫌で、家に帰って甘い物を次々と口に押し込んだ」

たくさんのことがほどけて、体が遠くへと運ばれていくようだった。

どこで写したものだっただか。白い夏帽子をかぶったタエが、葬儀場の祭壇で、こちらを見て笑っている。大勢が写った一枚から、あわてて引き伸ばしたものだから、粒子が粗くピントがぼけているけれど、タエは確かに笑っている。笑い続ける顔から、最後の約束になった、一緒に見るはずだった映画のワンシーンが流れ出ていく。

僧侶が二人着座して読経が始まった。顔を上げてあたり

になつているといふ。無表情で式の段取りを進めるよう、マニュアルに書かれているというが、昨日、家に打ち合わせにやって来た女性社員は、棺の中を整えながら言った。

「ごらんになるとわかりますが、亡くなっても、爪だけは生きていて、少し伸びます」

驚いて、身を乗り出してタエの指を見た。蒼白い指の先で、そう言われれば爪が少し伸びている気がした。

その時ふいに、「九九が言えなくてごめんさい」とタエが言った夜を思い出し、そのことが悲しいわけではないのに、涙があふれた。

身体がしんしんと、どこかに沈み込んでいくようだった。爪の話をした女性社員は、もしかしたらマニュアルに反していたのかもしれない。

タエが骨になるのを待ちながら、十畳ばかりの遺族控室に集まった八人は、目をつぶったり、ぼそぼそと隣の人と話したり、ケータイの画面を眺めたりしている。

まっ青に澄みわたった夏の空に、垂直に突き刺さった高い煙突から、白い煙が高くどこまでも放たれていく。高く高く昇って、そこから意を決したように横にたなびいて消えていく煙。ゆっくりとタエでなくなっていくタエを、私は見続けた。

を見た。自分の回りに腰かけている人たちは、みな親族にちがいないが、顔の知らない人もいる。タエの会社の人たちだろう。二十人ばかりが固まって入ってきて焼香し、係員の手招きによって流れるようにロビーへと去った。あとは、やって来る者はいなかった。その時初めて、タエはもうこの世にはいないのだという思いが、身体じゅうを襲った。

棺の中の、ほんの少し臉を持ち上げたタエを見つめたまま、健太は、何度も不思議そうに首をかしげた。死というものがまだ理解できないのだろう。

震えるまつげの隙間から最後にのぞき見たものが、せめて澄み渡った空ならと思うけれど、落下した時、植え込みのレンガが、思いのほか強く後頭部に当たったというから、蜜蝋に夕日が溶けていくような空だったとしても、もはや色を感じできなかっただろう。

周太は椅子に座ったまま怒った顔をしてうつ向いている。夫は焼香に駆けつけた人一人一人に頭を下げ続けている。

出棺になった。

棺は玄関横で待機していた霊柩車に運び入れられた。

「ここへ、ここへ」

葬儀屋の社員が、黒いワゴン車のハッチバックをあけて指さした。まるで宅配便を積み込むみたいなのに、素早さだった。葬儀屋はけっして喜怒哀楽を顔に出してはいけないこと

4

タエが小学生の頃、街にたった一つしかないデパートによく連れていった。五階の大食堂でお子様ランチを食べ、それから階段を昇って、屋上へ行った。屋上には、小さなメリーゴーランドがあり、二頭の木馬を待って、いつも子供たちが並んでいた。けれどもタエが小学校を終える頃には、屋上にはすでに人の気配はなかった。木馬はペンキが剥げ、目玉の黒い部分が落ちて、白目をむいていた。

屋上のフェンスを背にしたパイプ椅子に、いつも初老の植木屋が座っていた。二十ばかりの山野草の鉢植えを並べていたが、デパートが閉鎖になる少し前に行くと、まだ彼はいた。誰もいない屋上の、ひび割れたコンクリートの上に、やはり二、三十の鉢植えを並べ、パイプ椅子に座ってほんやりと、晴れわたった空を眺めていた。

人がいなくても、タエは大喜びだった。百円玉を入れると、朽ちかけた木馬は、ギーギーときしんだ音をたててゆっくりと動き出し、白目をむいたまま頭を下げたり上げたりした。もう一頭に私が乗って、中空の生きもののように私たちははしゃいだ。

帰りぎわ、植木屋の横に置いてある水槽をのぞいた。「肺魚」と書いてある一メートルもある魚が、いきなり尾ヒレで水を叩いて、私たちをびしょ濡れにした。

この街に一匹しかいない太古の魚というふれこみで、いつも人だかりがしていた魚は、大きな鱗におおわれたまま、狭い水槽のよごんだ水の中で、ひっそりとまだ生きていた。

デパートがオープンした当日は、空にたくさんのおバブルンが上り、赤と白に塗られた新聞社の取材ヘリコプターがバタバタと音をたて、まるで空のお祭りのようだったが、五年後には経営が悪化し、それからまもなく閉店になり、あつというまに取り壊されて、大きなさら地だけが残った。

中学生になっても、タエは木馬が忘れられないのか、「オクジョウ、オクジョウ」とよく言ったものだった。

少し前のことだった。夕方、仕事の帰りに車でいつものように橋を渡っていた時、川下の彼方に一瞬、水門が見えた。水門は、夕日にまっ赤に染まって、川沿いの木々の緑に溶け込んでいた。

毎日のようにその橋を渡っていたのに気づかなかった。私は、堤防沿いを走って水門に近づいた。洪水防止のために造られたコンクリートの水門は、堰き止められた水の中で、水際を茶色に汚して静まりかえっていた。丈高い木や草をかき分けてよじ登った者がいたのだろう。水門の上部にわけのわからない文字が、なぐり書きされている。蛍光

塗料で書かれた文字が、夕暮れた風景の中に光って浮かびあがっている。

水門は、静かなたたずまいを見せながらも、もし何か急なことがあるらば、いつでも体を張って立ちはだかつてやる、という強い意志が見える。落書きなどびくともしない気配だ。何日も降り続いた雨は、ここで太く束ねられて、海へとうねり出ていくのだ。

ふとタエのことを考えた。にぎやかな社会のはずれでいつも独りだったタエは、この水門のように、淋しさを抱き込む力を持っていたのだったか。

そういえば、タエが小学生の頃、町はずれの空き地に電車の車輻が一輛置かれたことがあった。廃止になった路面電車を惜しんで、市が町に寄与したものだだった。

「長年働いてくれたんだから、むげに処分できないね」

「思い出が詰まっているからね」

などと言う人がまだ当時はいたのだ。

車輻は、子供用の図書館として使われ、学校から帰ると子供たちはまっすぐ空き地に走ったものだったが、それも数年の間だけだった。車輻は風雨にさらされて錆が出た。投石されて窓ガラスが割れ、落書きをされた。

無残な姿をさらしてもう誰も来なくなったその車輻に、けれどもタエは毎日のように一人で遊びに出かけた。ぼうぼうの草の中で朽ちかけ、すでに虫の棲家となった車内

廃電車の子ども図書館で読んだとタエは自慢げだ。木や草花も、何かで体が傷つくと、それを癒すために、自ら遣伝子を星座のようにひっそりと動かして、生きのびるのだろう。

5

を、歓声をあげて駆けまわって少しも淋しそうでなかった。そんなことをぼんやりと思いつきながら水門を見ていたら、背後で、カシャン、カシャンと金属がこすれるような音がした。自転車をこいできた若い女の子は、追い越しざま、クラリと傾いて倒れそうになり、ふらふらと危なげに身体を立て直して、去っていった。

つい一週間前に、タエが何を話し何を笑い、どんなものを食べたのかまるで思い出せないが、亡くなる三日前の朝、居間の窓から外を見ていたタエが大声で叫んだのを鮮明におぼえている。

「おばちゃん、カンナの花がまっ白になったよ！」

「まさか。そんなわけないでしょ。そのカンナは赤、みんな赤だよ」

台所で野菜を切りながら笑った。

「本当だって、見てよ！」

はつとするような大声を出すので外を見ると、道路沿いの花壇に、毎年ガスバーナーの炎みたいなまっ赤な花をつけたはずのカンナが、五、六本、まっ白な花をつけている。

「わたし、知ってるよ」

タエが眼を輝かせて言った。

「木も花もね、何かにいじめられると、こっそりと体の形や色を変えるんだって。死なないように」

「タエは電話魔だった」

「電話魔？ どういうこと？」夫は身を乗り出した。

「毎日、携帯に五回かけてきた。一分も間違えずに同じ時刻に。朝、会社に着いた時。十時の休憩時間。それから弁当を食べ終わった十二時十五分。三時の休憩時間。そして帰りの駅から。一日も欠かさなかった」

「それは何か用事があった？」

「ううん。何もないの。ないけど必ずかけてきて、三つのことを言うの。おばちゃん、今何しているの？ タローにエサあげた？ 雨が降ったら駅まで迎えに来てね。空がまっ青に晴れ渡った日でもそう言う」

「その三つのことだけ？」

「そう。いつもそれだけ。時々携帯が鳴っていることに気がつかないでいると、それを言うために十回もメールが入っていた」

「どうしても電話しなくてはならないことなど、毎日そう

あるものではないけどね。たぶん、話をまともに聞いてくれる人が他にいなかったんだらうな」

夫は納得したようにうなずいた。

あの日、タエから一度も電話がなかった。初めてのことであった。少しうんざりしていたから、ああ今日は忙しいんだ、くらいにしか思わなかった。新築中の向いの家の二階の窓が、みな開け放たれていたけれど、そこから放たれた鳥みたいに、どこまでも自由な気持ちだった。警察から電話が入るまでは。

タエはなせ命を落とさねばならなかったのか。

タエの最期を詳しく知りたいと思った。最後に息を吐いた場所をもう一度見たいと思った。

葬儀が終わって一週間がたっていた。夫と私は、タエの会社へ向かった。

浅く水が流れる川。遠くの蒼い森。金色にうねる麦畑。

タエは毎日、急行電車の窓からこんな風景を見ながら通勤していたのだ。

事務室のドアを開けると、作業服を着た中年の男性がすぐに立ってやってきた。胸の名札に、配達主任山本とある。

タエの直属の上司だった。タエの伯母であることを伝え、迷惑をかけたことをもう一度わびた。

小さな事務室には、スチール製の事務机が三つ、整理棚

とロッカーがあった。つい立てで仕切られている向こうに、ガス台ややかんが見えるから、湯沸かし室になっているのだろう。

「タエちゃんには、いろいろと無理を聞いてもらいました」

主任は、深々と頭を下げた。彼の話によると、タエは他のパートの人たちに、好かれていたという。家族で旅行に行くとき、タエがかならずパートの人たち一人一人におみやげを買っていたことを思い出す。

「分けへだてなく一人一人に配っているのを見て、タエちゃんはきつと、人間を嫌うことができない子だらうって思いました」

主任は、眼鏡の奥で細い目をしばたかせた。

「これ、タエちゃんが使ってた……」

主任は、ロッカーから座布団を持ってきた。ピンク色の花柄のその座布団は、うつつすらと汚れていた。その時、パタパタと大きな足音を立てて、太った男が事務室に入ってきた。

「社長です」

主任に言われて、初めてタエを雇ってくれた人と向き合った。

「いろいろお世話になりました。タエが働いていた会社を見せただきまして、やっと胸のつかえが取れました」

頭を下げた。

「実はタエさんにはすまないことをしまして……」

社長は薄くなった頭髮の乱れを気にしながら言った。

「タエさん、亡くなられる一週間前に辞めてもらったんです」

私は、ほんやりと彼の顔を見つめた。

「パソコン打ちのできる人を一人雇ったんですが、そのために誰か一人辞めてもらわないとやっていけなくて。それでタエさんを……。うちも経営が苦しくて……」

朝、ごはんを食べて弁当を持ってタエは、「行ってきます」と言って毎朝出かけたけれど、一体どこへ行っていたんだらう。そういえば、死ぬ一週間ばかり前、届いた郵便封筒を開封しないで、いきなりねじってゴミ箱に捨て、ドンドンと足音をたてて二階へ上っていった。あのときのタエの背中が、声をかけようがないほど全てを拒否していた。クビになったことを、タエは私たち家族に言わなかったけれど、あの封筒は会社から届いたものではなかったのか。

「屋上へ上らせてもらえませんか？」

深呼吸を一つして、私は言った。

六階までエレベーターで昇って、そこから暗い階段を上った。屋上のコンクリートの床は、ところどころひびが入って剥がれて、まるで皮膚病を患った巨大な生きものみ

たいだった。タエは昼の弁当を食べ終わると、残りの時間を、よくここで一人ですごしていたという。

タエが誤って落下したというフェンスは、目の高さまであった。金網を手でつかみ、ゆさぶったが、思ったよりも頑丈にできている。下を覗いた夫は「あーっ」短い悲鳴をあげた。幹線道路沿いにあるこの建物のま下に幅二メートルばかりの植え込みがあり、そのすぐ横を、絶えず車が猛スピードで行き来している。まわりの建物は、みな低いため、屋上から見る空は果てもなく広がって、吸い込まれそうな錯覚におちいる。

遠くに海が見え、海面が午後の陽にキラキラ輝いている。海岸の端で、赤と白の縞模様様の巨大なクレーンが、いくつも長い首をもたげている。

私は夫と顔を見あわせた。高くて頑丈なこのフェンスから、どのようにしたら誤って落下できるのだらう。よじ登るに登れないではないか。金網の上の手すりに両手を置いて、体を持ち上げようと力を入れても、いっこうに持ち上がらなかった。

「金網が破れていましたので、昨日直しました」

ふいに背中が声をした。日焼けした小柄な老人が立っている。

守衛だというその男は、私たちに軽く会釈した。前歯が一本欠けている。

「破れていた？」

夫は大きな声を出した。

「はい、この間社長に言われて調べましたところ、金網と金網のつなぎ目がはずれていて。けど、よほど強い力で押さなけりゃ落ちませんがね」

「社長さんは、どうして破れていることに気がついたの？」

「タエさんですよ。タエさんがいつも昼休みに屋上に昇って、その破れた金網にもたれるようにして遠くを見ていたのを、社長が見たんです」

私は息をのんだ。タエは、網が破れていることを知っていたのだ。

「タエちゃん、生まれ変わったらバナナの木になるんだって、よく言っていましたよ。なんでバナナなんだろうって、みんな不思議がっていました」

主任は、首をかしげながら言った。

夕焼けが始まっていた。屋上の上に広がった青い空が、少しずつうす桃色に染まっていく。

空が色を落として、街にゆっくりと淡い墨を流していく。こんなによさしいものを見たなら、人の手を離れた風のように、人は行き先を見失うのかもしれない。

私は、目を凝らして遠くの水平線を見た。白い船は、少しも動かないように見えながら、けれども少しずつビルに

隠れていく。まちがいなくゆっくりと進んでいるのだ。た

めらいのない強い直線となって、空と海を対峙させる水平線。茶色に染めた長い髪を風にまき上げて、タエもあの水平線を見たのだ。

その時、私はどこで何をしていたのだろう。おそらく、いつものようにいつものスーパードで、夕食のための買物をしていただろう。約束した焼肉をするために。

帰ろうとして、思いついて社長にたずねた。

「もしかして、タエが誰かとおつきあいをしていたということは、ありませんでしたか？」

「え？ ああ、ご存知でしたか。ここで働いていた夏木という男ですよ」

なぜこんなことを聞いたのだろう。たしかにここ三か月ばかり、タエの帰りが毎日と喋っていいほど遅かった。遅く帰ってきて、「夕食は食べてきた」と言う時、いつも一瞬顔をあかくした。

「誰かつきあっている人がいるのかしら」

夫に言うのと、

「そんなわけないだろう。タエのような女をまともに相手にする者はなかなかいないさ」

自信ありげに言った夫に、少し腹を立てながらも、安心したのだった。

やはりタエにはつきあっていた人がいた。

「その夏木さんという人、今日は出勤していますか？」

「いや……。一年前、契約が切れた時に辞めてもらったんです。あまり真面目ではなかったもので」

社長は、そう言ったきり口をつぐんだ。

夏木の住所を教えてもらって、私たちは会社をあとにした。

夕暮れが、天体のリズムにあわせて色を変えていく。その音が聞こえるほどに静まり返った風景のどこかに、まだタエがいる気配がした。

6

夏木という男に会わねばならないと思った。連絡をしないで突然彼を訪ねることはためらいがあったが、連絡をすることによって会えなくなる気がした。

社長が書いてくれた地図を持って、私は夏木の家に向かった。

近鉄線の小さな駅で降りた。駅舎を出ると、あたりは田と畑ばかりで、数棟の団地と小さな鳥居と、高圧線の鉄塔が見えるだけだった。遠くまで一面に広がった麦畑から、ゴッホの絵のような熟れた金色の風が吹いてくる。

空はまっ青に晴れわたって、雲一つなかった。まばゆい

太陽の光は、歩道のケヤキの梢を通り抜けて、やわらかく額に当たった。上空をヘリコプターが風を切り裂き、轟音をたてて通過していった。

田と田の間の農道をしばらく歩いていくと、赤や黄の小菊が咲き乱れる畑があらわれ、数軒の農家が見え、その裏に一棟の古い鉄骨アパートが見えた。

私は息を整えた。

アパートは、階段もベランダの手すりも赤く錆びて、人が住んでいるから辛うじて持ちこたえているというふうだった。一階のそれぞれの部屋の庭先には、木や花が植えられ、鉢植えが所狭しと並べられていた。

夏木の部屋は二階の一号室だった。

タエが死んでまだ十日しか経っていないかった。階段を上りながら、何か遠い出来事のためにやってきたような、不思議な気持ちになって、足が止まった。夏木という名前は、通夜も告別式も受付名簿になかった。つまり、タエとはそれほどの関係ではなかったということか。

ドアを叩くと、「ハイ」という小さな声が出て、十センチほど開いた。二つの黒い眼が光っている。タエの伯母だと名乗ると、一瞬相手は沈黙し、それからゆっくりとドアをあけた。

年は三十くらいだろうか。TシャツにGパンの男は、想

像していたより背が高く、体もがっちりしている。大きな眼は憂いのある光を放っている。

「夏木さんですね」

男はうつ向いたまま唇をゆがめてうなずいた。

「すめられるままに部屋に上がり、コタツ兼用の座卓の前に座った。六畳ほどの部屋には、テレビとビデオデッキ、食器棚、それに小さな本棚しかない。

窓ぎわの台の上で、音をしばった小型のテレビが映像を流し続けている。テレビのまわりの床には新聞の広告、封が切られていない郵便物、空っぽのペットボトルなどがころがっている。座卓の上には、食べ終わったばかりなのか、汁が少し残ったカップラーメンが置いてある。

窓の向こう、畑のまん中に農家が見え、その背後に線路が見える。やってきたオレンジ色の電車が通過する瞬間、部屋の窓ガラスがカタカタと小さな音を立てた。線路のすぐ向こうは、小学校のグラウンドだ。青いペンキの金網が張り巡らされ、金網沿いに爽竹桃が、濃いピンクの花をつけている。運動場では、体操服の生徒たちが走り回っている。「やっと、ここがわかりました」

詰まった息を吐き出すと、夏木は、

「大変なことになって……」

額に垂れた髪を長い指でかき上げた。タエの死にそれほどショックを受けているとは思えない口ぶりだが、タバコ

に火をつける時、一瞬ライターを持つ手が震えた。

夏木は、落ちつかぬ様子で、手で何度も顔をこすった。眼を右に左にせわしなく動かした。何かを言いたいのだが思うように言葉が出てこない、というように唇をひくつかせた。

「タエがいろいろお世話になったようですね」

「いや、何も……」

「いつごろからタエはこのアパートに来るようになったのですか？」

「えーと、もう半年になります」

「それで、タエとは、仲良くやっていますか？」

「はい。タエちゃんと一緒にいると楽しかったです」

夏木はふっと目を青ませた。その言葉に、それまで白黒に見えた部屋に、色がついた気がした。

「コーヒー、入れてきます」

夏木は立ち上がった。私は正座した足をくずしたかった。けれども少しでも動けば、夏木との張りつめた空気がゆるむと思つてこらえた。

「タエちゃん、銭湯が好きでした。この部屋にも風呂はあるけど、町に一軒しかない極楽湯によく歩いて行きました」

タエのことで知っていることは、一応伝えておかなければというふうな、淡々とした口ぶりで夏木は言った。

「あ、それから、知つてたかもしれんけど、タエちゃん、

な」と、ひとりごとのように言ったことがあった。

夏木はタエにどのような情を抱いたのだろう。少しつきあいがあつた友人を思い出すような口ぶりからは、二人が深い関係にあつたとはとても思えなかつた。

「結婚を考えていたのですか？」

思いきつて聞くと、夏木は急に怯んだ顔をした。それから思い直したように言った。

「タエちゃんは将来のためにつて、バナナ貯金をしていたんです」

「バナナ貯金？」

「ええ、特に深い意味があるわけではなくて。ただバナナが好きだったから……。毎月二万ずつ入れていたんです。落ちついたらそちらにお返しするつもりでした」

夏木は、食器棚の引き出しから一通の通帳を取り出した。

タエは夏木と、この古いアパートの一室で、不安定な日々の底からぶくぶくと泡立って発酵する酒のような、心を潤す時間を育てていたのか。

夏木は立ち上がって隣の部屋のふすまを開けた。

「この木も、タエちゃんが育てたんです」

見ると六畳ばかりの和室いっぱい、巨大な葉が広がっている。抱えるほどもある鉢から、幹がまっすぐ、天井につかえるほど伸びて、幹の途中から、幅三十センチ、長さが一メートルもある葉っぱが八方に広がっている。

一週間前に会社をクビになったんです」

夏木は続けた。

「朝、いつもの時間にそちらの家を出たあと、ここに来て、それから、ぶらぶらしているのがイヤだから仕事探してくるとってハローワークへ出かけました。けど、仕事は見つからなかつたようで、映画を見たり、デパートの屋上に上がりたり、買い物をしたりして、時間をつぶしていたようです」

人目を避けて、映画館の暗闇の中で、ひとりポツンと画面を見つめ続けるタエ。百貨店の誰もいない屋上のベンチに腰かけ、まっ青な大きな空を眺めながら、子どもの頃のことを思い出していたのだろうか。

「タエちゃんが出てきてくれました。僕は失業中だから」

亡くなる何か月前から、タエはしきりに「お金おろさない」と言っていた。何かお金のいることでもあるのかと聞くと、笑って何も答えなかつた。つきあっている人でもいるのかな、と思つたけれど、知恵の足らないタエと交際する男など、やはりいないのだろうと思つた。

夏木は、窓の向こう、白いモルタルの壁の家に眼を遊ばせた。そこから、たどたどしくピアノを弾く音が聞こえてくる。そういえばいつだったか、タエが「ピアノ習いたい

「バナナの木です。買ってきた時は五十センチくらいだったのに、タエちゃんが毎日熱心に水をやったり、肥料をやったりするうちに伸びて、この部屋は、だから他に使えないんです」

部屋じゅうを占拠したバナナの木は、得体の知れない精気を発している気配がする。

「大家さんには内緒なんです。近いうちにそちらで引き取ってもらえますか。他にもいろいろ荷物があつて……」

夏木は引越し業者のような、乾いたもの言いをした。

声を小さくしほったテレビが、ニュースを伝えている。

インドネシア・スマトラ沖で大きな地震があり、高台へ逃げようとした人々を津波が襲ったのだという。あの美しい海が、トリポーターが声を震わせて叫んでいる。天も地も人も予告もなく一瞬にして変容する事があるのだ。

私は窓の向こうを見た。朱に染まった空を、首の長い黒い鳥が、ギイーエ、ギイーエと苦しげな声をあげて渡っていった。

来た時は部屋を通り抜けていた風が、夕風の時刻になつて、ピタリと止んだ。

タエの通帳を預かり、手紙や料理の本などこまごました物を鞆にしまうと、あとは特に話題がなかった。立ち上がると、ほっと顔をゆるめて夏木も立ち上がった。時計を見

夏木にとってタエは、気がついたら一緒にいたというくらいのことだったのかもしれない。それは、冬の始まりに庭にやつて来る渡り鳥のツグミに似て、半年の間、律儀に毎日やつて来て夕方には帰っていく。そして暖かくなつた頃いつのまにか姿を消す。そんな存在だったのではないか。ツグミは、たくさんの海峡を渡って、遠い大陸へ帰って、翌年には再び律儀に姿をあらわすけれど、タエはもう帰ることはないのだ。

あらためて見ると、夏木の胸板は厚く、Tシャツから出た腕は筋肉が引き締まっていた。シャツを脱ぐと、吸いついたら二度と離れない吸盤があらわれそうだった。

「近いうちにタエさんの荷物とバナナの木を、引っ越し屋さん頼んで送ります」

夏木の声を聞きながら靴を履きかけた時、下駄箱の近くに一枚のレシートが落ちていたのに気がついた。

「平成22年7月16日、13時25分COCO一番八七〇円」

眼を疑った。この日この時間、タエは火葬場だった。タエが煙になったその時間に、夏木はカレーシヨップでカレーを食べていた。

私はうす紫色に染まりかけた空を仰いだ。

「タエちゃん、死ぬ時、怖くなかったでしょうか」

ると五時を過ぎていた。夏木と向きあっていたのは二時間ばかりなのに、まる一日を費したような疲労感に襲われた。

「タエちゃん、妊娠していました」

「妊娠？ タエが？」

こんな大事なことを、なぜ夏木は帰りがけに言うのだろう。

「まだ二か月でした。検死の時に聞きませんでしたか？」

「タエは喜んでいたのかしら」

「自分のような子どもが生まれたら、かわいそうだと言っていました」

私は言葉を失くした。タエに、そんなことを考える力があつたのか。

「それであなただけが欲しかったの？」

「はい。でも、誰の子供？ って冗談で言ったら、タエちゃんすごく怒って……」

そう言ったあと、しまった！ というふうになら夏木は顔をしかめた。

私は夏木の顔を穴のあくほど見つめた。

心暖まる映画を観ていたなら、途中でフィルムが切れてパツと明かりが点く。その間の抜けたまぶしさの中に取り残されたような気持ちだった。

「子供は生まれてこなくてよかった」
やっとなら夏木は言った。

夏木の言葉に、思わず顔を上げた。それから大声で笑った。笑いながら、ドアや、ドアの横の洗濯機、ポリバケツ、窓ガラスと、目に入るものを力まかせに叩き続けた。

7

真昼の道をタエが、大声でわめきながら歩いていく。両手を振り回し、足を踏み鳴らし、ぼろぼろ涙を流しながら遠去かかっていくのだ。タエを追いかけて道へ出たとたん、何かに足を引っかけて転んだ。眼が覚めた。夢だった。隣でいびきをかいて眠る夫を、私は荒々しく揺さぶった。理由もなく怒っていた。

「おばちゃん、ソースが足りないよオ」

台所で焼きそばを作るタエの声を思い出す。タエはその日突然仕事が休みになって、昼ごはんを作ってくれたのだ。

「あっ、カラスアゲハ！」

縁側から部屋に迷い込んだ黒い蝶を、タエは、長バシを持ってそのまま追いかけた。その時タエは、ピンクのブラウスを着ていたのだが、昨日、夏木のアパートで、そのブラウスを見た。アパートを出て早足に二十メートルほど歩いたあと、もう一度アパートを振り返ると、庇のつき出た二階の窓の、短い物干し竿に、タエのあの半袖のブラウスが干されていた。

その時突然、まぶたを焼く熱いものが眼からあふれ出た。歪んで見える風景の中を、嗚咽をこらえながら歩いた。頭の中を、たくさんの事が出たり入ったりした。

駅のホームに立っていたら、レールの震動が次第に大きくなり、やがて、構内アナウンスの声をかき消して特急電車が、猛スピードで通過していった。ベンチに座って、髪を乱したままぼんやり見送りながら、夏木の、青白い顔を思い出していた。日曜日にタエとよくドライブに出かけて、ドライブインでソフトクリームを食べたと言ったが、たとえソフトクリーム代を自分が払ったとしても、タエはうれしかっただろう。アパートの座卓にかぶせたテーブルクロスのは、淡いピンクのコスモスだった。タエが夏木とすごした時間は、そのような柔らかな色をしていたのだったか。

数日後に、夏木からバナナの木と段ボールが一つ届いた。ダンボールには、タエの洋服や靴、小物が詰まっていたが、人が遺すものなど、これくらいにまとまるものなのだ。一メートル六十センチあったタエの体も、骨壺一つに納まったのだから。

ダンボールの底に、「週末クッキング」という料理本が入っていた。タエは、料理にそれほど関心がなかったけれど、夏木のために、こんな本も読んでいたのだ。ばらばらに光ってたわなに実っている。

「ほら、りんごがもう赤くなっているよ」

見ると、少し先にりんご園が広がり、りんごがルビー色に光ってたわなに実っている。

赤い小さなまだれかけをした道祖神の横に、私たちは腰をおろした。誰かが石仏の前にそと川原の石を置いてあるが、タエのおなかや胸にも、澄んだ空から降り注ぐように、やさしく土が被せられたのだ。

黄色に色づいたカエデの幹にコゲラが飛んできて、ギョーツ、ギョーツと鳴いた。

ミゾンバが風に揺れている。

少し冷たくなった風が私たちの髪を散らした。

さっきまで木の幹で鳴いていたコゲラをさがしたが、見つけることができなかった。鳴き声だけが近づいたり遠ざかったりした。

宿に着くと夫は上着のポケットから、小さな紙袋を取り出した。駅で買った炒りたての山栗だった。

木造の小さな旅館の夕暮れた窓辺に座って、買ってきた地酒を飲みながら、私たちは続きのようにタエの話をした。タエが家にやってきた日のこと。中学生の頃のこと。高校を卒業した頃のこと。それから、してやれなかったこと、してやれたことについて。

タエは、かならず朝五時頃に起きてきて、居間のソファ

めくってみると、ところどころに赤鉛筆でアンダーラインが引かれている。パイの作り方のページには小麦粉がこびり付いている。一字一字夏木に読み方を聞いたのだろう。本格カレーのページの牛肉、油、火力、圧力鍋の漢字の横に、ふりがながしてある。

「カメは背中に固い甲羅を持つてるし、背びれに毒を隠した魚だっているのに、人間の背中中は心配だね。身体の前には、手があつて、ころんだら前につけるし、腹が立ったら叩くことだってできるよ。目も鼻も口も前についているけど、背中って何もないよね。襲われても戦えないよ」

いつだったかそう言ったあと、タエは、ひとりに身体をすり寄せてきた。

8

晴れ渡った空がどこまでも広がっていた。青みがかった山脈が、鮮やかに稜線を流し、背後で積乱雲が、プラチナのように輝きながら、垂直に立ち上がっていた。

タエが死んで三か月が経っていた。

無性に太陽や澄み渡った空を見たくなくて、私は夫と信州へやってきた。赤ん坊の名前に似た駅で降りると、眼の前に北アルプスの山々が蒼くそびえ立っていた。田と畑の間の農道を歩きながら、夫はふいに立ち止まった。

に寝直した。家族はみな、あんなところに毎朝毎朝なぜ寝直すんだろうと、不思議な顔をしていたけれど、私は知っていた。タエは起きてくると、一度は私の蒲団に入って体を暖め、それからソファで眠ることを。

「小さい頃、母親に抱かれて眠ったことが、今でも遺伝子みたいに、体に染み込んでいるからよ」

部屋の窓から、遠く蒼い山脈が見え、それを縫うように電車が走っていく。

いつだったか、「幸せになれる色ですよ」と店の人にすすめられて、タエがあかるい空色のワンピースを買ってきたことがあった。一年前、それを着て家族旅行で来たこの安曇野で、

「深い海みたいだね。あそこには、幸せがきゆうきゆうに詰まっているの？」

身体まで透き通ってしまいうような空を指差してタエは聞いた。

すでに天空を幾巡りかしただろうタエは、今なら教えてくれるだろうか。残していったあの大切な問いについて。

ポケットの中で携帯が鳴り続けている。

文芸中部

愛知県

責任編集制の活力

同人雑誌って、長くやってりゃいいってでもないでしよ。昔は「三号雑誌」といって、意気の合った同志が集まって喧々諤々、論争しあって、三号も出すと解散したようです。そしてまた、次の雑誌を創る。本来、芸術家の集団というのは離合集散があたりまえ。そもそも個なくして、なんの文学ぞや、そう思うのです。といたながら、「文芸中部」は、その長くやっているのです。定見がないからでしょうね。

昭和三十四年九月、江夏美好、井上武彦を中心に堀井清、近藤許子たちが集まって「東海文学」を創刊したのが源流——もう半世紀も前のことになりました。伊勢湾台風の日が最初の合評会だったと聞いています。昭和五十六年十一月、八十号で終刊。ほぼ季刊を維持していました。実はこのころが同人雑誌がもつとも日の目を見た時期でもあります。江夏、井上のほかにも上京した安達征一郎が直木賞候補、甲洋子が芥川賞候補。主宰の江夏は「下々の女」

文芸中部



(河出書房)で第十一回田村俊子賞を受けました。民俗学者・谷川健一も若き日、小説と戯曲を寄せています。あ、この人も直木賞候補だった。

終刊後、残党が集まって「文芸中部」を創刊したのが、昭和五十七年四月。井上を代表として出発。同時に責任編集委員制を採用しました。編集委員は井上のほかに福富奈津子、堀井清、堀江光雄、三田村博史、吉村登。これらが順に各号を責任をもって編集する。その後、加わった者に責任を放棄した者があって退会しましたが、おおむねこの制度は成功しているようです。というのも、長期にわたる主宰ひとりが責任を負うのは大変だし、どうも私物化する。しかも、主宰がなくなつた後、継承がむずかしい例を



北川朱実

きたがわ あけみ

1952年秋田県生まれ
20代後半より詩を書き始め
現在に至る
詩集5冊上梓
6年前より小説を書き始め
現在「文芸中部」同人

自費出版承ります

文芸思潮 出版部

あなたが残したい本、形にしたい本作りに協力します。文芸思潮編集部がアドバイスして、最良の本を作ります。

心に残る本を

200P 500部
ハードカバー
80万円上製本 並製 65万円
詩集 100P 50万円 ご相談に応じます
文芸思潮出版部へお電話ください。
TEL03-5706-7848 五十嵐・池田・里見まで



誼訪哲史さんを囲んで

堅苦しく文学を語る会



80号記念バトルのあとで 前列中央誼訪哲史さん 中列右端 朝岡明美さん 後列右より二人目北川朱実さん

●同人一八人、会員五人、同人費月一五〇〇円、会費五〇〇円、掲載費ページ五〇〇円

文芸中部の会

〒四七七・〇〇三三
愛知県東海市加木屋町池田一・三二八
三田村方 TEL〇五六一・三三四・四五六一

見てきたからです。原稿集め、編集、校正、本の受け入れ、宛名書き、袋詰め、発送。しかも会計、印刷所、同人への連絡。書きたい主宰にとっては大きな負担。そこで「文芸中部」は輪番制にしたのです。そして編集委員は最初のうち毎月発行に際し、編集会議、校正にと集まった。年三回発行ですから合評会もふくめ年に少なくとも九回は顔を合わせた。編集会議や校正が早く終ると漱石、マルケスを論議しました。これは編集委員同士を結束させ、だれの編集であろうと比較的同等水準の雑誌を発行する力を養ったと思っています。そして現在は編集発行はほぼその号の責任者まかせ。それがまた各号の色合いをも生んでいるようです。

と、いうわけであえて代表をおく必要もなからうと代表制も廃止。井上が昨年十二月亡くなって、現在は名村和実が編集委員に加わって完全に輪番編集です。と、いって会計は福富、補助金(愛知県、名古屋市は同人雑誌への補助金制度があります)申請担当は堀井、発送と雑務窓口を三田村とトロイカ方式も併用しています。

者ですからうれしいですね。またベテランの蒲生一三「研究会」と堀井のエッセイ「無縁社会を考える」が準優秀作、はじめて参加の本興寺更の「跡目」も好歴史短編という五十嵐さんの評価ですから、なかなかのものと自賛してもいいかなと思っています。そういえば編集委員はいずれも中部ペンクラブ文学賞受賞者、他に北川、西澤しのぶも受賞しています。そうそう、名村は第一回まほろば賞をも受けています。



昨年夏の合宿 ▲ 渡し船の上で ▼ 坂手島小学校前で



毎回、原稿が集まるかなと心配もしていました。ところがなんのことはない、集まってくるんです。年三回発行は一度も遅れたことがありません。百二十ページを割ったこともありません。結構水準の高い作品が集まってきました。八十六号も二作が「文芸思潮」に転載と連絡がありました。それも朝岡明美、北川朱実とこの数年のうちの参加

最近、夏は合宿研修です。合評会のあとゆつくり温泉の湯につかり、ドストエフスキーを、鏡花、秋声を、そしてこの夏は湯の山温泉で小島信夫を語るという企画です。昨年は鳥羽に泊まり、翌日は志摩の海を渡って乱歩の奥さんが勤めていた坂手島の小学校を訪ねました。いや、誌名が「文芸」ですから、堅苦しい「文学」ばかりではないのですよ。

同じ人がいつづけば同人雑誌はどうしても年々高齢化する。若者は若者で目につかないところで、「同人雑誌」という意識もありません。フリーペーパーにでもして配っているでしょう。それはそれでいい。わたしたちだってそうだった。無理に若者を誘うこともない。一方「同人雑誌」だけに凝りかたまるともありません。商業誌、同人誌の垣根を超えていい文学を生み出していきたいと思っています。少しばかりの自負と、大いなる意欲を持って。まずは自身が納得できる作品を書く。これが難しいですね。(三田村博史)